

資料

(昭和四十一年十月)

第十一回「合宿教室」  
(雲仙)感想文集

社団法人 国民文化研究会

長男合宿に参加すと告ぐる電話を受けて

加 藤 敏 治

吾子<sup>わこ</sup>ゆくとよろこびつたふる妻の声電話を通  
しふるへ聞えく

雲仙のこれの集ひは若き日の友らの子らもあ  
またまじれり

心こめ開く我らの合宿に吾子<sup>わこ</sup>もかたれとねが  
ひ来りし

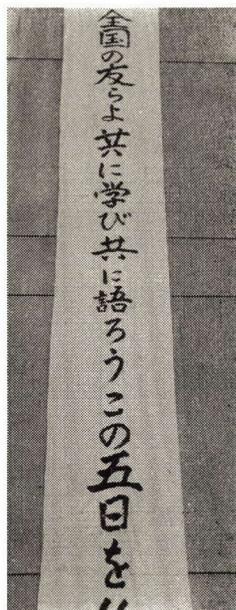
言の葉にだして告げねど我が思ひ吾子にかよ  
へとねがひ来りぬ

すぐれたる人たらずとも国のため世のためつ  
くせと我はねがふも

有海<sup>ありうみ</sup>の海をわたりてこの宿を訪ね来る子をひ  
たに待つなり

(註) 三首目の「かたれ」は方言で、「加われ」  
の意である

第十一回「合宿教室」(雲仙)感想文集



目 次

はしがき	2
「合宿教室」の日程概要	6
合宿を契機として、今、私の胸中にたぎっている思い	16
走り書きの感想文	18
短歌詠草(しきしまの道)	88
あとがき	105



## は し が き

私たちは、戦後国民の間に失われてゆきつつあった同胞的連帯を、国民各層、とりわけ若い青年学生の胸に回復したいとの悲願から、過去十余年「合宿教室」―研究集会―を行なってきた。我々はこの合宿を通じて青年たちが、イデオロギーを論ずる前に、お互いにいつわりのない自分を友の前にさらけ出せば、心と心が通い合うのだという体験を通じて、人間としてまた日本人として相和し、睦み合う精神的基盤のあることを確め合い、その感激を基として確固たる人生観を確立し、正しい学問への姿勢をうちたてることを念じて合宿を運営してきた。

しかし敗戦を契機として、国民の間に意識的、無意識的に行なわれた価値の転倒は、過去の日本および日本人のあり方がことごとく誤まったものであるかの如き風潮を生みだした。そうした風潮が、社会、学園を問わず風びしているなかにおいて営み続けてきた我々の道は、必ずしも平坦なものではなかった。しかし、徹々たる歩みではあったが、昭和三十一年の第一回合宿参加者が、わずかに九十余名であったことを思うと、今年の合宿に二百五十名近くもの参加者をえたことは、理解ある方々の暖かいご援助のもとに、我々の営みがいくばくかの実を結びはじめたものと思われ、感慨深いものがある。

この小冊子は、今年の合宿教室の閉会式直前二、三十分の短時間に、全参加者にしたためてもらった感想文を集録したものである。ひじょうにあわただしい中で書かれたものなので、自分の気持を整理しきれないままに記すことになり、意を尽せなかったことはいないが、それだけに、合宿の空気がなまのままに表現されているとも言えるのではなからうか。これらの感想文のなかには、若い青年学生たちが、日本人としての自分に目ざめた心の波動が記されている。それはまた、個人・自我の尊重に偏りすぎた教育。ともすれば理論が唯一の学

問であるとする教育の風潮に対し、深い疑問を投げかけているとも感じとれる。この合宿参加が、大学生活の全部であると言つていいと告白する学生の感想が、このことを雄弁に物語つてはしないであらうか。

また、いままで人の真心に感動することを知らなかったと告白する学生たちが、真心をこめて語り合うことよつて、友と心が通い合うことを知った喜びがどれ程大きかったかは、多くの感想文のなかにみられる通りである。しかしそうした体験は、決して主催者側の熱意だけでなし遂げることのできるものではなかった。そこに至るまでには、理論を少しばかり知っていることで物事が分つていゝと思つていた自分の誤りに気づいて、本当の自分は何か、何一つ分つていない自分ではないかと思つてゆく真摯な努力が、参加者一人一人に必要であつた。

この合宿においていただいた福田恆存・木内信胤の両先生は、ご多忙のなかを三泊四日にわたり、講義のみならず、班別討論に、また、パネルディスカッションにと時間を惜しんで出席された。たしかに会の雰囲気は、先生方の心をお引きとめする若く真摯な気魄がたたえられていたことも事実であつたが、それにもまして、先生方の青年学生の心情の開発を願う一途なお気持がそうさせたと思われるのである。それは世間でいう講義・講話とはかなり違ったものであつたし、むしろ若い人々の健全な成長を願う「祈り」にも似た訴えでもあつた。福田先生が学生の質問に対し、時間が足りなかつたことを心にとめられ、翌朝その青年に直接会つて回答なされたことなど、その一端を物語るものである。

また全国から集まつてきた助言者および本会の会員である三十余名の社会人も加わつて行なつた班別討論、古典の輪読は、諸先生方の講義からうけた感動をさらに深めさせた。さらに、全参加者が二回にわたつて行なつた短歌創作において、自ら和歌をつくり、相互に批評しあうことによつて、歌は、自分の心をごまかすことができなことを知つた筆者たちが、先人の歌をよみ、天皇の御歌を拝誦することによつて、天皇の深いみ心や、祖国

のために生き、かつ死んでいった先人の魂を、心の中に生き生きと実感したようである。

雲仙の夜のしじまのなか、篝火の燃えさかる祭場で厳肅に営まれた慰霊祭——それは今回の合宿ではじめて行なった「祖国日本のために尊い生命を捧げられたすべての祖先のみたまを祭る」営みであった。主催者としては、「厳肅」ということにふれる経験に乏しい今の若い学生諸君が、これを素直にうけとめてくれるかどうか若干の危惧があつたが——その挙行のあとの感想は、一部の人たちを除いて、ほとんどの人たちが「なき人のみたまをまつる」ということを、現実に体験しえた喜びを伝えてくれたのである。

さらにこの合宿で青年学生たちは、大学のあり方、そして、学生のあり方を深く考えたようである。現在の学校教育は、実は、大切なものを教えてくれないのではないかということを感じたり、イデオロギーや理論体系よりも、自分の心、自分自身を求めてよき師を求めることが学問の要であると感じたり、イデオロギーや理論体系よりも、自分の心、自分自身の心の正しいあり方を、きびしく教えてくれる師が欲しいという願いを訴えている。しかし、これ以上述べるよりも、この冊子をお読みくださる方々が、感想文の行間から、現代教育の問題点と我々の貧しい営みの趣旨をお掴みとり、いただけるものと思うのである。

最後に、十余年の歩みを経た今回の合宿で合宿運営責任層の移行が行なわれたことを附言させていただきます。すなわち、この合宿は今日まで、主として主催者である国民文化研究会の会員のうち、戦前に学業を終えた者たちが、その運営を行なってきたが、今回より、この合宿教室を経験し、社会人となった戦後の人たちにその運営の大部分をゆだねることにしたことである。重荷にたえ、さまざまに心をくだきながらも幸いに成功をおさめることができたことは、今後の合宿運営が、こういう若々しい人たちによって行なわれるであろうという、明るい見通しを見いだしたことであり、ともに喜びを分かち合いたい。

# 「合宿教室」の日程概要

と き 昭和四十一年八月五日～八月九日

と ろ 長崎県南高来郡小浜町「雲仙国立公園」  
「雲仙ユースホステル」

第 一 日 (八月五日・金曜日)

開 会 式 (午後二時)

国 歌 斉 唱

黙 禱 (われらの祖国を守るために、いのちを捧げられた祖先のみ霊に対して黙禱を捧げた)

あいさつ

国民文化研究会理事長 小田村寅二郎氏

大学教官有志協議会 夜久正雄氏

亜細亜大学教授 森重忠正君

長崎大学経済四年 森重忠正君

合宿に臨むにあたって

幹部学生代表

中央大学 商四年 磯貝保博君

京都大学 法三年 井上慎一君

東京女子大学文理三年 梅 田 咲 子 君

班長の所懐表明と自己紹介（各班に別れて行なった）

○講 義 「和歌創作の手びき」（三十分）

福岡県立若松高校教諭 山 田 輝 彦 氏

第一回和歌創作

夜

○講 義 「合宿教室のめざすもの」（一時間三十分）

鹿児島大学助教授 川 井 修 治 氏

班 別 討 論 （三十分）

班 別 輪 読 （福田恆存先生の翌日の講義に備えて「新しい学風を興すために」第一集中の「現代の思想的

課題」を輪読）（三十分）

検 討 会

（男子学生班、十班を——運営委員を中心とし、助言者を加えて——三つのグループに分けて行なった。第二日・第三日も同時刻に行なった）（午後十時～十一時）（一時間）

運 営 委 員 会

（十一時～十二時、運営委員・助言者を加えて、毎日同時刻より深更まで続けられた）

第 二 日 （八月六日・土曜日）

午前

国旗掲揚、体操、（午前七時）（第三日以降同じ）

第一回和歌創作（総数五百七十余首）

○講 義 「近代化の意味とその克服」（二時間）



文芸評論家 福田恆存氏

班別研修

(福田先生の講義を中心に班ごとに問題を掘りさげ、質問書を提出した)(二時間)

質疑応答

(質問書にもとづいて回答された)(二時間三十分)

午後

班別討論

(一時間十五分)

○講

義

「聖徳太子・古事記について」(二時間三十分)



亜細亜大教授 夜久正雄氏

夜

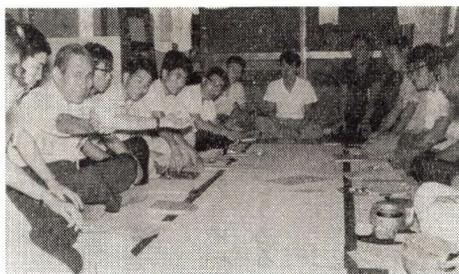
班別討論(二時間三十分)

第 三 日 (八月七日・日曜日)

午前

○講 義「私の経済哲学」(二時間)

班別輪読(木内信胤先生の翌日の講義に備えて「私の経済哲学」を輪読) (三十分)



班別討論に参加  
された木内先生  
(上)と福田先生  
(下)



世界経済調査会理事長 木内信胤氏

質疑応答（質問書を提出し、それにもとづいて回答された）（一時間）

午後

第一回創作和歌講評（一時間）

若松高校教諭 山田輝彦氏

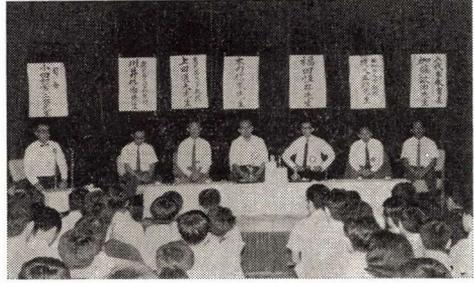
仁田峠・野岳登山（午時二時出発、午後五時帰着）

第二回和歌創作（創作総数六百八十余首）

夜

○パネルディスカッション（午後七時～午後八時三十分）

「学生生活はどうあるべきか」



木内信胤氏  
福田恒存氏  
を中心として

混迷せる大学教育を改革するには、まず教育理念、文化理念の確立が急務であること。一方、学生はよき師（古人を  
 含めて）を求め「本を読むことが、行為であるような読書」をすることが、義務であると強調された。  
 班別討論（二時間）

第二日目までは、概念的な言葉のやりとりから抜けきれなかったが、ようやく胸襟を開いての体験的告白が行なわ  
 れるようになり、魂の交流が急速に行なわれていった。

第 四 日（八月八日・月曜日）

午前

○講 義「われわれ人間は、自分一人で生きているのではない」（二時間）



国民文化研究会理事長 小田村寅二郎氏

理事長は、参加学生が問題としている諸点をとらえて、福田・木内両先生の話をつき合いた形で、「つき合い」の心がけを中心に語りかけた。

班別討論（一時間三十分）

講話「自己克服」（一時間）



玉川大学教授 戸川尚氏

班別輪読（「日本への回帰」の「天皇と天皇のみ歌」を輪読）（二時間）

地区別・大学別懇談会（一時間）

夜

和歌相互批評（班別に行なった）（一時間三十分）  
慰霊祭（一時間）――午後八時三十分～九時三十分――



祖国を守るために命を捧げた、すべてのみおやのみたまを祭る慰霊祭は、星空のもと  
篝火燃えさかる式場で、簡素ななかに厳粛にとり行なわれた。

最後の夜の集い―班別茶話会―（一時間）四日間の合宿生活を顧み、明日の別れをおしみつつ、それぞれの思いを  
胸に秘めて、なごやかに語り合った。

## 第五日（八月九日・火曜日）

午前

講義「明治百年にちなんで」（一時間）

修猷館高校教諭 小柳 陽太郎氏

全体意見発表（一時間）

こもごも立って、合宿の感想、今後の決意などの表明を行なった。

「合宿を終るにあたり所感を述べ」（十五分）

川 井 修 治 氏

感想文執筆（三十分）（本感想文集はこれを集録したものである）

閉 会 式（正午）

国 歌 斉 唱



あいさつ

（大学教官有志協議会）鹿大教授 上 田 通 夫 氏

国民文化研究会理事 山 田 輝 彦 氏

（学生）早稲田大学政経三年 今 林 賢 郁 君

（写真は上田氏）

参加者（学生）九大 中大 早大 鹿児島大 都立大 亜細亜大 京大 明大 玉川大 神戸大 富山大 広島大 大分大

岡山大 鹿児島工業短大 国学院大 慶大 島根大 長崎大 福岡大 鹿児島経済大 宮崎大 順天堂大 福岡教育

大 四国学院大 上智大 日大 明治学院大 皇学館大 同志社大 一橋大 佐賀大 福岡工大 立正大 関西大

東外大 大阪大 学習院大 横浜国大 熊本大 東工大 熊本商大 下関市立大 東女大 西南学院大 共立女子短

大 津田塾大 青山女子短大 第一薬大 神戸女学院大 お茶の水女子大 熊本女子短大 長崎大付属看護学校 福

岡修猷館高校 島根県松江南高校

（社会人班）会社員 長崎県中高校教諭 信用組合 福岡県中高校教諭 経営研究所員 経営者協会 大学講師 教育

助言者および主催者側参加者

委員 熊本県小中学校教諭

前武雄市教育長	毛利潮	自民党鹿兒島県支部連合会	湯通堂
大分県・国見町教育委員会・教育主事	三重野 梯次郎	朝日ビル(株)東京支店販売課	坂東一男
電源開発(株)施設業務課	長内 俊平	(株)十八銀行熊本支店	田川和昌
計理士・税理士	小泉 明	日商(株)外国為替第二課	沢部 寿孫
共同通信社・大阪支社整理部長	浜田 収二郎	皇宮警察本部・護衛官	亀井 孝之
長崎・宇宙書房代表者	脇山 良雄	神戸市立湊中学校教諭	諏訪田 陽三
亜細亜大学学生部主事	関 正 臣	キューピー(株)拳母工場生産課	山本 伸治
玉造・(有)こんや旅館代表取締役	青 砥 宏 一	東京鋼鉄工業(株)浜松営業所	大川 寿雄
(株)日本タール協会調査部総括部長	加 部 隆 三	長崎県中小企業金融協議会主事	合 原 俊光
熊本市役所経済部次長	徳 永 正 巳	福岡・徳島水産(株)加工部	加 藤 征雄
福岡県立宇美商業高校教諭	小 林 国 男	九州大学大学院農学研究科	行 武 深
鹿兒島工業高校教諭	押 川 公 親	早稲田大学大学院理工学研究科	山 本 博 資
山陽電気軌道(株)宇部営業所長	加 藤 善 之	県立長崎北高校教諭	本 城 良 子
光村図書出版(株)九州出張所	百 崎 素 明	長崎・楠木真珠養殖場	内 田 英 賢
(株)千代田コンサルタント総務課長	上 村 和 男	陸上自衛隊幹部候補学校生	大 越 雅 行
福岡・筑紫女学園高校教諭	行 武 靖 枝	下関・(株)宝辺商店社長	宝 辺 正 久
県立横浜翠嵐高校教諭	国 武 忠 彦	県立岡山笠岡商業高校教諭	名 越 二荒之助
県立岡山操山高校教諭	三 宅 将 之	八代市教育長	加 藤 敏 治
		熊本県林業研究指導所指導部長	瀬 上 安 正

# 合宿を契機として今私の胸中にたぎっている思い

——「合宿教室」の総括的回想——

第九班班長  
早大政経三

今 林 賢 郁

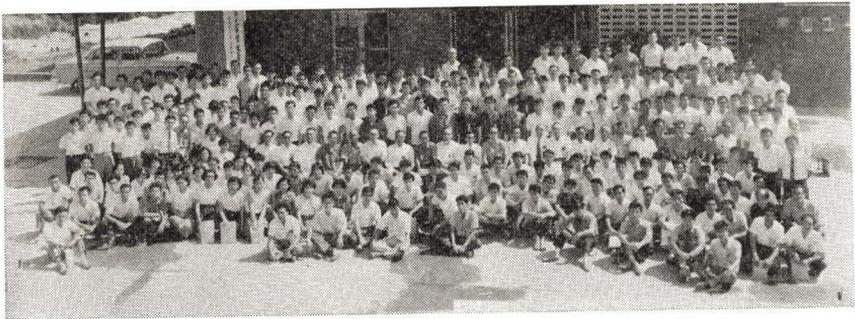
今日もまた学園の中には、ケバケバしい立看板が立ち並び、アヂ演説が続いている。私たちはこのような環境の中にあつて、どのように生きたらいいのか、という問いがまたしても私を苦しめる。四泊五日の合宿においても、この問題は中心的な課題であつた。「どのように生きたらいいのか」という問いほど、私たちを苦しめるものはない。しかしこの問

いとの対決を避けて私たちの生活はありえないが、私たちは現代日本の何を心のよりどころとして生きていったらいいのだろう。戦後の歴史に一貫して流れてきたものは、悲しむべき、というよりは、愚かなまでの日本人の自己喪失であつた。国旗を見ればイヤな過去を想い出すから掲げるのをやめよう、とまじめに論議された時期もあつた。こうした風潮の中で日本の文化伝統は否定され、国籍不明の思想が論壇を賑わせた。その結果生じたものは、政治、経済、思想等々あらゆる分野の救い難い混乱であつた。その混乱は、今なお果てしないイデオロギーの対立となつて続いている。この間、日本および日本人とは何か、という最も大事な問題は置きざり

にされて、私たちは日本人でありながら祖国を忘れてしまふようなことになつていった。が、このような状態がいつまでも続くわけがない。最近のナショナルリズム論議をはじめとする論壇の傾向は、この深奥の問題にふれないわけにはいかなつたといふことのあらわれといつてよいであらう。

時として、現代日本のなさけなさ、身にしみてつくづくイヤになることもある。が、私の祖国は日本であり、私は日本人であることから逃がれることはできない。幼子が母親の懷で安心してねむっているように意識すると否とにかかわらず、われわれを抱いてくれている祖国が現存する。しかも、祖国日本の自然はことに美しい。その美しい風土の中で日本人は日本人にふさわしい生活様式を生み、岡潔先生のいわれる日本の情緒を育んできたのだろう。私はこうした日本へのどうしようもない愛情を覚える。伝統否定の風潮は以前のようではなくなつたとはいへ、その禍根は深い。私たちは合宿において、古典に接し、和歌を創作した。これは一体どのような意味を持つているか、忙しい今の世に古典など読んでい

たのでは時代遅れになる、それよりも現在の政治、経済の勉強の方がより大事だ、と若い私たちは思いがちである。確かに私たちが現代に生きている以上、過去よりも現代に通ずることの方が一見有用であるようにみえる。が、問題はその先にある。現代にほんとうの意味で通ずるには歴史とのつながりを無視してはできないはずではないか。「伝統とか歴史とかいうものは、今日においてもなお私たちの血肉となっているもの、自分の手足のように自分の内部に所有しているもの、それを切離せば自分が自分ではなくなるもの、そういうものであるはずだ」と、福田恆存先生は書いておられるが、私たちが合宿において古典を論読し、和歌創作を実習したのも、古人の心に直接ふれようとしたことにほかならない。それにしても古人の心をしみじみと感じとること



は何と容易でないことか。しかし、心をこめて過ごしたあの合宿において、直接に先人の生命の息吹きを感じたときのよろこびはたとえようもないものであった。その瞬間、古典は私たちの心の中に生き生きとよみがえってくる。この体験は、知的理解が唯一の学問の方法であるかに思っていた私たちにとって、ひじょうな驚きであった。私たちは合宿での友との討論においても、絶えず相手の心にふれようと努力し、他と共感できるよろこびを知った。これらはすべて、はからいをして無心になることによって、はじめて体験しえたものであった。それは知的に理解されたものではなく、自己の強烈な体験であるがゆえに、確信の持てるものであった。私たちはこうした友との心の通いあいの中に、歴史に直接する確かな方法があるのを知り得た。

私たちが真に日本人たらんと望むなら、改めて自国の文化、伝統に深く思いをこらすべきである。そして、それは現代日本の中にある、伝統を顧みない一切の欺瞞や偽善を毅然として排除し、日本をふたたびわれわれの中にとり戻さんとする意志へ連ならなければならぬ。合宿教室参加を契機として、今、私の胸中にたぎっている思いはこれである。

# 走り書きの感想文

## 第一班

日本人でよかった

愛国心とはこういうものであるということが、諸講師の講義および態度からひしひしと理解できた。それは「歴史に自分をつきあわせよ」ということばからも、学ぶことができた。われわれ日本民族の、世界に類のない高き心情、明治天皇のみ心の雄大さ、日本国家の高き理想、それらをここで心から知り得た時、私は、自分は日本人なのだ、日本人でよかった、と痛感したのである。日本民族の血の流れている自分にとっては、古への真の日本人が理想としてきた、生活観、国家観、天皇観を自分の最高の理想とし生活することに、心からの喜びを感じます。

今日からは、ここで、和歌を通して知りえた、吉田松陰先生や聖徳太子を師と仰ぎ、生活に実践していきたいと思う。

(大分大学 教 二年 中原義人)

心に残った二つのこと

この合宿で特に心の内に残ったことが二つあります。それは木内先生の「自分で考えてやって見よ」ということと、福田先生の「経験としての読書をせよ」ということでした。今、私はこの二つのことを実際にやれるかどうか、大学に帰って実行してみようと思います。そしてまた、この二つの問題にとり組むことに楽しみに似たものさえ感じております。私はこの合宿教室に参加しなければ、知識としてだけの読書に追われていたでしょうし、また、空理空論だけに終わっていた今までの生活を改めることはできなかったでしょう。

私はこれを機会に、よりいっそう大学生活を充実させるために、自分で考え、自分で実行していこうと思います。

(広島商科大学 商 一年 中西弘幸)

もっと叱られたい

今はほんとうに疲れた。大学生活最後の合宿教室になると思うが、過去三回の合宿教室の中で一番疲れたように思う。

今までの合宿生活で人とのつき合いを正しく行なってきたのだろうか、いや、この大学四年間を一つでもほんとうに正しい人とのつき合いをやってきたのだろうか。今、私は一つもやっていなかったと痛切に感じる。しゃべるのが恐ろしい気がする。

班別討論の場で、あるいは夜遅くまで班の人たちと話していくうちに、班員の切実な気持を聞くのがたまらなくつらくなって、何度かその場をにげだしたくなった。単に自分には何の体験もないから、自分のいっていることが相手の心に通じないのがつらくて、というだけでなく、そういう気持の整理さえしてはいけないような何か強い力が、自分をおさえてくるような気がしてならない。

心の姿勢とは何かというようなことを考えていた自分に、もっとも簡単な、相手に対する体の姿勢さえできていなかった。体の動きは心の姿勢を示すものであり、また逆に、心の姿勢のあり方はそのまま体の姿勢にもなることを教えられたような気がする。今までの自分が、いかに頭の中だけしか考えていなかったかをなさげなく思う。もっともっと物事にぶつかって、もっともっと心を悩まし、人から叱られたい。

(中央大学 商 四年 磯貝保博)

### 火花の飛び散る情熱を持ちたい

講師の先生方のお話を聞いていると、一体、若さ、情熱とは何なのだろうと考えさせられた。先生方は僕等より一回りも二回りもお年上の方である。しかし、そのお話、考え方の澆測とした若さ、自分がやろうと思っておられたことに対する火花の飛び散るような情熱はとうてい僕の想像もできなかった程だ。あの情熱を自分は持ちたい。木内先生のおっしゃるように、自分で力んでみたい。徹底的にこれと信ずることをやってみよう。

(九州大学 医 四年 友池仁暢)

### 真の生活のあり方を知った

私にとって最も嬉しかったことは、この合宿で精神生活態度を諸先生、諸学生の心と心の触れ合いの中から、真の体験として実感として味わえたことである。

今まで、いろいろな話を他の場所で聞き、話し合ってきたが、その言葉の中に心の響き、心の内容、心の魂が欠けたりしました。大学時代にこういう合宿に参加でき、真の生活のあり方を実感として知りえたことに大きな有難さを感じ、満足感をもって終えたことを非常に嬉しく思います。

祖国を考えたことがなかった

少なくとも合宿参加以前の私には、祖国日本を思う気持ち、天皇というものについて考えてみるということはなかった。この世に生れ、日本という国で、大学生活を営んでいることすら、当然のことと思っていた。

五日間の合宿では、物をいうべき時はいうんだということ、さらに波にまかせて歌い、踊らされるような人間には、決してなっけはいけないんだということを身にしみて感じさせられた。

(亜細亜大学 経 四年 小山田清光)

自らの心を開くことから

副班長というせいもあってか、四泊五日の合宿がとてつらく感じた。

一番心に残ったことは、人と接するには、まず自分の心をひらかねばならぬということ。自分にはそれが欠けていた。副班長として失格だった。班員の皆さんに申しわけないと思う。

(九州大学 法 三年 宮崎義美)

まったく面くらった

この合宿に参加してみて、最も強く感じたことは、この合宿でやろうとした、またやったことが、僕が今までの四ヶ月の大学生活や、高校、中学時代に考えていたこととは、まったく次元が違っていたことです。

具体的にいえば、僕は今までに、人間の内面的なこととはほとんど考えたことがなく、政治、経済問題などを、表面的ではありましたがやっていただけでしたのに、この合宿では人間のつき合い、大学生活の生き方などをやり、まったく面くらったことです。(そのため、僕は、どうもみんなが話す言葉の一つ一つが国語の語訳のようで、どうしてもなじめなかつた。)

しかし、このような経験をして、僕の今までの生き方がまちがっていたのではなからうかと思いました。

(鹿児島大学 工 一年 横田喜弘)

親孝行がしたい

僕は、九州はじめてです。ずうっと東京に住んでいました。だから九州地方の学生の方々と友だちになれたことはとても良かったと思いました。

先生方の話されたことはよく理解できませんでしたが、自分は自由に自然に無理のない生活をこれからしたいと思いません。自分はとても弱い人間なので自分のことをまずきちんとしていこうと思います。だから、ある先生が、ただ良い学校を出て良い会社に入って良い給料をもらい、美しい奥さんをもらうだけでよいのかといわれましたが、はいと答えます。だって僕はそれができればとてもうれしいことです。二流大学の夜間部にいる僕はそれさえもなれないかもしれない。親父、おふくろさんに金銭的に苦勞させないで良い生活をさせてあげたいからです。

だから、今の僕はほんとうに出世がしたい。早く大学を出て出世しよう。世の中で自分の役割をきちんとはたそう。それが自分のためにもなり社会のためにもなると感じました。いままで、それが悪いことのようにいわれてきましたが、この合宿に参加して親孝行しろといわれてそれが立派なことだと気づき、ほんとうによかったと思います。

(都立大学 人文 一年 末光正忠)

### 心に残る言葉

いろいろの先生方の講義のなかで、とくに福田先生の「歴史につきあえ」とか、小田村先生の「つき合い」などは心にくつきりと光を照らされた感じがしました。合宿を通じ、こ

れまで自分には生活に対する基本的態度とか姿勢とかいうものが、欠けていたことを痛感させられた。これから合宿で教わったことをもう一度よく考え直して行動にうつしたいと思います。

(神戸大学 法 二年 深津春義)

### ただ一言

ただ一言だけ申し述べまして感想といたしたい。「今日様に相済みませぬ。」(玉川大学 文・教 二年 益井重征)

### いかげんだった自分

今まで自分の考えてきたことが、みな、いかげんなことのような気がして、班別討論でも、まったくしゃべれないこともあった。今も自分が何を考えているのか、うまく整理できていない。時間をかけて、ゆっくりもう一度考えてみます。

(明治大学 政経 一年 繁永正博)

### 初参加と違った刺激

きびしく自己をみつめる合宿の経験は、昨年の初参加の時とはまた違った意味で、自分の内面的な何ものかを刺激されたような気がする。

今は混乱してはつきり分らない。けれど、この四泊五日の経験は自己の生活になんらかの指針を与えてくれたと思っ  
ている。  
(鹿児島大学 教 三年 中西勝義)

左翼の勉強も必要である

開会式で小田村先生は、「右翼でも左翼でも良いことは取り入れる」という趣旨の話がされたが、実際にどの程度実行されたか疑問に思う。輪読などで左翼的な書物は全く読まなかった。現実に大きな力を持っている左翼共産主義を知らずしては何もできないと思う。川井先生は、マルクス主義は独断があり、固着していると言われたけれども、この合宿にもそのような雰囲気があると思う。

(中央大学 経 一年 井ノ口重紀)

## 第二班

先生を父親のように感じた

いきづまっていた班別討論が、国文研のある先生が自分の体験を真剣に述べてくださったことで、班員間の空気もなごみ、真剣に体験を通して考えようという雰囲気になったことは、ほんとに嬉しかった。この時ほど僕は自分の体験を語る

ことの尊さを感じたことはなかった。今まで自分が体験であると思ひこんでいた体験はまだまだ観念的なものに過ぎないことを痛切に感じた。

今度の合宿で、僕は、先生というものをなんだか父親のように思った。合宿を積みかさねるたびに、知識が積み重なっていくのではなく、合宿を通して洗い清められるのだ。合宿を迎えるたびに僕は素直な心に帰らなければならぬのだと思つた。僕は班長という立場を離れて、とにかく一人の友を得たことが嬉しい。一人の友を得るということはなんと嬉しいことなのだろう。僕らはギリギリのところまで自分を問いつめられ、初めて尊いものに接する心の姿勢を各自の心に持つことができたのだから。

(富山大学 工 三年 岸本 弘)

様子の違った合宿、でも嬉しかった

ある日、ふと学校の掲示板をみると、今度の合宿のことがでていた。九州一周をかなり前から私は計画していた。四泊五日で三千円、しかも学生の場合片道旅費負担とあるから、あとのことはどうでもかまわぬと飛びついた。合宿で何をやるのかまだ知らなかった。興味さえわかかなかった。

こんな態度で始まった第一日目、私が考えていた合宿とはかなりようすの違った印象を与えられた。日がたつに従つ

て、その様子はますます明瞭になっていく。われわれの学校における単なる合宿とは何か違うものがある。そして友が得られた。期待していなかった何か大きなものが恵まれたような気がした。それが嬉しかった。

(慶応義塾大学 法 一年 雨宮夏雄)

今までの自分は安易すぎた

今までの自分が、単にズルズルと安易に過ごしてきたのではなからうか、読書においても無意味なことばかりやっていただけではなからうかとの疑問が合宿期間中、次々と湧いてきて、どうしようもできませんでした。

何はともあれ、今日から真剣な生活態度を身につけ、自然を鋭敏に感ずる心を養うよう研鑽したいと思います。

(亜細亜大学 商 二年 坂本民雄)

何かに黙祷を捧げたかった

実際のところ、感動することが連続的に続いて、今は收拾のつかない状態である。先生の、あるいは友の話を聞きながら、心に何か通ずるものがあるのか、あるいは単に感傷的なものか、そのところは定かではないが、胸に迫って涙がじんできるときもあった。講義を聞いた後の班別討論会にお

いては、自分の感動を言葉に出せず、どちらかというと沈黙して、友の感想発表に耳を傾ける立場であったが、友の感動がそのまま自分にも流れ込んでくるような満足感を得た。

それから、最後の夜の慰霊祭は深く感銘した。僕は今まで儀式的なものに反撥を感じていたが、自分がこの場合、祖先の御魂に対して真に感謝の気持をもってみれば、やはり儀式とのみ蔑視すべきでないことをじかに感じた。全体意見発表のとき、不思議と何かに黙祷をささげたいような気持ちにひたりつつ、友たちの感想を聞いていた。

(鹿児島大学 法文 二年 凶師博隆)

生きていくきっかけを得た

私は苦しかった四泊五日の合宿に参加して、日本人であった喜びと、人間として生きていくきっかけを得て、感無量な心であります。

(鹿児島工業短期大学 一年 佐藤正文)

私をとらえてはなさなかつたもの

「絶望」と「つき合い」というこの二つの言葉が初参加の私をとらえてはなさなかつた。私の今までの友人関係は、不信とはいえないまでも、誠意を尽したものであったとは思えない。人対人の関係において「つき合い」がいかに必要なも

のであるかを知らされた。四泊五日の短い期間ではあったがこれをきっかけに、ここでの体験を基にして、自分の態度を決めなければと思っている。

(九州大学 法 一年 小松大輔)

### 身に沁みた体験談

非常に有意義な合宿に参加させていただき、ほんとうにありがたうございました。自分の考え方がいかに甘かったか、今はっきりと知ることができたような気がします。先生方のお話は非常に大切なことをいっておられると思いましたが、実感としてとらえられませんでした。しかし、班別討論のときこられた長内先生のお話を聞き、ほんとうにそうだな、そういう読書をしなければウソだなと、しみじみ感じさせられました。私にとって、この合宿において一番の収穫だったと思っただけのことだと思いません。班員の皆さん、先生方ありがとうございました。(神戸大学 教 一年 白坂隆重)

### とめどなく涙がでた

心の中はもやもやである。諸先生方のお言葉、友の言葉がとどまるところを知らずぐるぐる心の中をまわっている。そのためこの合宿の感想を書けと言われても書き得ない。ただ

自分が今書けることは、涙が出てきたということである。先生の御言葉、友の言葉に接し、とめどなく泣いたということである。それは講義の内容に感動した点多かったが、それよりもそれを語られる師の心根にじかに接した時の感動がそうさせたのである。(鹿児島大学 法文 二年 溝口忠文)

### 自分の言葉で

人との交流にはもつと心し、いたずらに観念的になることや、自分の自覚の入らない言葉はつっしみたいと思います。

(神戸大学 工 二年 圓尾敏浩)

### 初参加の感銘

私は今度の合宿に初参加ですから、私の町の駅を出るときからいろいろな不安や期待がありました。はっきりいって、三日目の夜まで何かむなしくすごして参りました。しかし、その夜長内先生に国文研の方々の真剣な生き方や、輪読の仕方、聖徳太子のお言葉、その他いろいろな話をおききして、自分が今までいかにごうまんであったか、いかにえらぶっていたか、自分の心がいかに素直でなかったかを知らされました。また、先生のお言葉が、私の父がよくいっていることに非常によく似ているのにおどろきました。つまり本を読むと

き、全部をやってもだめで、その中に「これだ」「なるほど」と心に思ったことを大事にとっておけ、ということですよ。

その日から講義がおもしろくなり、真剣に聞きました。この四泊五日の合宿では少し睡眠不足でねむかったのですが、よかったですと思います。またその人の心にふれるのは、和歌が一番よいと思いました。「日本への回帰」の中の明治天皇の御歌を読んで、天皇がこれほど国民のことを思ってくださいということがよくわかりました。

(玉川大学 工 一年 細田邦泰)

真心だけはもちつづけたい

自分は何回も感動した。ところが感動した次の瞬間にはすでに自分はその場を離れて、あたかも他人のごとき態度でそれを思い出そうとしてしまう。実際そうしていた。友だちにいわせると自己偽瞞だと批判するだろう。事実そうである。僕は同意する。しかし、頭で理解してもその場であつてくしても、僕はそれから以後の生活に自信がないのである。昨年の合宿以来今日までその調子であった。それから後も同様な毎日をおくるであろう。

しかし、自分はいませめて人間としての真心だけは大事にもちつづけるつもりである。

(鹿児島経済大学 経 二年 横手満男)

もっともつと話し合いたかった

私は初参加という関係もありましたが、何かまだすっきりしません。まだいろいろ話しがしてみたいとの思いでいっばいです。この合宿で得たことは、まず見も知らぬ人と友だちになれたこと、それもこれ以後関係がなくなるようなのではなく、「僕の家へ遊びにこい」などのことをだれもが気軽にいい合うほどの親密なものであり、ほんとうに友がそうしてくれることを心から願っている姿でした。

また、今まで頭の中でこねまわして友だちと話をしていたが、福田、木内両先生の講義をきいて、まだまだ一人前のつもりでごうまんになっているということがわかった。

(島根大学 教 三年 岩本一也)

みずみずしい人間の生き方に感銘

諸先生方のご講義、班別討論会、短歌創作など、一連の合宿の過程でわれわれが心をひらき、おたがいの言の葉から何かを求めていくことによって、友だちとの心のふれあいが増えたことは最もありがたいことでした。これは自分の考えていた概念の崩壊であり、同時に建設であり、新しいものの創造であったのでした。

この合宿によってみずみずしい人間的な生き方に感銘し、人とのつき合い、歴史とのつき合いなど、このような社会生活上基本的な「つき合い」を不明確にしたままでいた愚かさを知りました。

(国学院大学 文 四年 白鳥和彦)

とらわれの心がつながりをとぎした

長内先生が、自己の切実な体験を通して考えを述べてくださったときは、先生の心が自分の胸にひしひしと感じられ、非常に感動しました。それに反し、私は、班の責任者ということにとらわれすぎて、自分の弱点を班員に知られたくないという気持があり、これが班の人々との間に壁を作ってしまったように思えるのです。他の人々には体験を通して述べようように強いながら、自分自身はなかなかできなかったことは、副班長として不資格であると思いました。そして体験を通して語る赤裸々な姿勢を今後の姿勢とすべく心がけるつもりです。

(鹿児島大学 教 三年 田渕勝次)

### 第三班

初歩から出直そう

一言で言って、今までの自分はいかに曖昧であったかを痛感させられ、自分の古い殻をぶちくだかれた思いがしました。天皇や国家の問題もさることながら、ぼくには人間としての心の姿勢がまったくできていなかったということです。相手の心をくみとることがいかにむずかしいか、わかっていたように全然わかっていなかったことを思い知りました。人間の心というものはもっともって深いものだ。その心をくみとるには自分自身の心もそれなりに深いものでなければならぬ。よほどの厳しい精神力なくしては、人とのつき合いはできない。できると思っているその曖昧な態度をまず捨てさり、人間として全くの初歩から出直そう。

ぼくは班長としてほとんど責任を果すことができなかったが、先生方や班員、副班長たちのあたたかい思いやりをつくづく知らされ、人間としてよい体験をさせてもらったと思っています。

(岡山大学 理 三年 伊藤三樹夫)

ジワリジワリと味がでて来た

まず第一に自分の考えの甘かったことを吐露せずにはおれ  
ません。合宿最後の日になってようやくじわりじわりと味が  
出てきたようです。

現代の教育界は実にお粗末です。日本という国を正確に把  
握することを困難にしていた。私の環境を考え合わせてみる  
と、日本という国の特質を知る機会のない人々にその機会を  
与えてやる義務があるように思います。

最後に、私が自分自身をより深く考える必要を痛切に感じ  
られるようにしむけてくださったことを、深く感謝いたしま  
す。  
(広島大学 齒 一年 大橋健治)

気になったこと

この合宿で少々気になったことが二つある。それは国文研  
のごく一部の方であると思うが、言葉態度が国文研という一  
つの殻にとじこもっているように感じられたのは、私の心が  
まだ小さいからであろうか。他の一つは、国語問題も語られ  
た合宿であったが、会を主催する国文研の方たちの中に、方  
言は別として正しい言葉を使われないことが案外多くあっ  
た。こういう誤まりは国語を守るわれわれ合宿に参加したも

のが先頭に立って直して行かねばならない。

(玉川大学 文 二年 深谷正徳)

言葉にいいつくせぬもの

何を得たか今のところ分かりません。でも後で胸に迫まっ  
てくるようなものがある感じですよ。

(亜細亜大学 商 一年 平塚俊三)

私は今興奮している

私は今興奮している。何がそうさせるのかわからないが、  
実に多くのことを学んだ。言葉、歴史、祖先等私の心をそれ  
ぞれのものが駆けめぐっているように、言葉とならない。

それらの一端を拾い出してみよう。慰霊祭については、あ  
たりの電燈を皆消した中に、二つのががり火から舞いあがる  
火の粉は、われわれのささやかないとなみを喜んで舞ってい  
る英霊ではあるまいかと思うほど美しかった。祭壇に向か  
い、詠みあげられた明治天皇御歌の数々や祭文は、雲仙の山  
々に響いていった。国のために死んでいった益良雄を、われ  
われにかわって悼んでおられる明治天皇の御歌の一つ一つ  
は、私の心に涙をさそわんばかりに、響いてきた。何もいわ  
ずに国を護っておられる英霊に対し、私は国を、日本の国を

護ろうと強く念じた。(九州大学 農 一年 蒲牟田高雄)

ムチでビンタをはられた思い

はつきり言って、班別討論の場では何も言えなかった。しかし、私は自分なりに自覚ができたと思う。それは今までの自分の生き方というものに、何かするどくムチで打たれたようなそんな気持でいっぱいになったからである。こんな立派な日本に住んでいて、幸福だと思うと同時に、自分をどんな場所においても、またどんな場面に出合っても自信がもてる、そんな人間にならなければだめだと痛感した。そのためにも自分の専門の分野(電子工学)と同じくらい、あるいはそれ以上かも知れないが、とにかくその程度まで真剣に自分の生き方や、日本の現状等の事柄を学ばねばならないと思った。参加してほんとうに良かったと今思っている。

(鹿児島工業短期大学 一年 竹下和範)

きてほんとうによかった

大学入学以来、左翼的なことを聞かされたり見たりしていましたが、この合宿に参加するには重大な決心がいりました。といいますのは、この合宿教室は右翼的なものではなからうかとの懸念があったからです。何はともあれ合宿に行っ

て自分はどう処すべきか、態度をきめようと考えました。でも実際はこの合宿期間が終りに近づくにしたがって、「ここに来てよかった。ほんとうに良かった。」「自分の誤まった日本の見方がわかった。」と思いました。そして誤まったこれらの教育をなんとかしたいものだとも思いました。

(鹿児島大学 教 一年 入佐芳登)

生活の指針ができた

自分の考えがはつきりしておらず、班別討論でも、なかなか意見が発表できなかった。また、今までの自分の生活の無意味さ、フアイトのなさに気づかされた。短かい五日間ではあったが、これからの私の生活の指針が形成されたように思う。

(神戸大学 経 一年 西川弘毅)

ムードと心の交流は違う

この合宿におけるわれわれの班内でのディスカッションについての感想を書きたいと思います。われわれの班は、あまりにもムードが支配しているような気がしました。ムードと心の交流とをまちがえているかのようでした。

心の交流があまりにも前に押し出されすぎて、頭の交流、理詰めで物を考え、かつ発言するようなことが少なすぎたよ

うだ。

人間は考える力があるのであるから、当然、それもしなければならぬ。しかし当合宿では、そのようにすると、あまりにも観念的であるかのように感違ひされた。日本を考へ、日本を思うのは、日本人としてあたりまえのことであるからそれをいかに論理的に展開していくかを考えることも、大事ではないかと思う。  
(神戸大学 工 二年 野口豊太)

思いを歌に托して

小田村先生のご講義を聞きつつ

言葉こそ人の創りし文化なりと師は話し給ふ力をこめて  
ことごとくに心をさらけ出しつきあへば友にも師にも心通はむ  
み親との心のつき合い今ここに知りたる喜び何とあらはさむ  
よるこびてよるこびてもなほわきいづるうれしさつひになみ  
だになりし

みおやらが国の始めの記念日を信じきたるは事実に他なし  
天皇のみ位信じて幾千年つきあひきたるみおやしのばむ  
天皇とみおやとのつきあひすつきりと話し給はる師の目うつ  
くし

小柳先生のご講義を聞きつつ

力こめすりぶみ読みます師の君のみ声聞きつつ身の引きしま  
りぬ

生き生きと躍動しつつ流れ行く人の生命を今こそ学ばむ  
名も知れぬ女子の身なれど身をふるひなすべき道を求め行き  
しか  
(長崎大学 医 三年 田村 潔)

微力をつくした

諸先生方のご講義を聞くにつけ、過つた思想が風靡し、わ  
が国は混乱していることに気づきました。これを打開するた  
め、私も微力ながらつくそうと思ひます。

(鹿児島経済大学 経 四年 野中民生)

今でなければならぬ

心の惑いのとれぬまま、頭のガンガンするまま合宿は終つ  
てしまいました。万年筆を置き忘れたりします。しかし、エ  
ネルギーは残っていることは確かです。全部だしていない状  
態です。半分もでていません。ある人は家に帰ってもう一度  
すつきりさせたい、といいますが、それは嘘です。すつきり  
させるのは今でなければならぬと思ひます。

なんでもわかるうとしました。わかるうとした態度がいけ  
なかつたのだと思ひます。そのまま素直に受けとめ、感じる  
のがほんとうのやり方だと気づきました。

(福岡大学 工 三年 江口研治)

ヨウシ やるぞ!

この合宿について全く何も知らず、ほとんど白紙の状態に参加したのですが、一言でいえば来てみてほんとうに良かったということ。パンフレット等によって抱いてきた期待とは異なった内容のものが大部分でしたし、班別討論の行ない方等に進行上の拙さが目につき不満がありましたけれども、そんなことは問題とするに足らないほど、多くのすばらしいものがあつたと思います。

全日程を通じて強く感じたことは、自分が今まで、あまりにものんびんだらりとした毎日を過ごしてきたということ。それと同時に自分のやらねばならないことがつかめたという喜びでいっぱいです。

今、心の大部分をしめていることは、「ようし、俺もやってやろう」ということです。精一杯にやりたいと思います。

(長崎大学 経 三年 山崎 太)

心のたるみがひきしまった

この合宿で感じたことは、「心のたるみがひきしまった。」ということ。ここで体験したことを基にして、日

々の生活を反省しながら自分を励まし、力づけて生活しているかと思えます。(亜細亜大学 商 四年 金田士郎)

日本人としての教育をうけた

私はこの合宿において一般になされている学校教育とは全く異なつた、日本人としての教育を受けられたことがほんとうに嬉しい。この点、国文研の先生方になんとお礼申してよいかわかりません。

神ながらの時代より行なわれてきた日本人の魂の儀式を身をもって体験するうちに、何か祖先の生活が偲ばれてならなかつた。先人は日本の行く末を心こめて憂慮していたのに、行く末となつた現在に生きている私達日本人が、そのことに気づかずに自分だけで生きているのだといったような、勝手気ままな考え方に反撥を覚えます。樋口一葉の言葉や福沢諭吉の言葉を深く噛みしめるにつけ、その真剣な人生態度を憶念する時、全く頭が垂れさがる思いで一杯でした。

(鹿児島大学 文理 四年 藤崎義之)

頭がモヤモヤして重い

ここにくる時は、雲仙の山でも見てこようという気持ちでしたが、先生方のすばらしい講義を聞いて心が惹かれて

しまいました。合宿にくる時まで僕は二つの考えごとをしていたので、それを雲仙の山にふきとばしてこようと思ってきたのですが、合宿最終日になった今は、以前よりも何か頭の中がもやもやして重くなってしまった。

#### 第四班

独善的であった自分

今日まで自分がどんなに、あいまいな言葉を使っていたか、また、たとえ相手を傷つけても自分は傷つかないようにして、議論に負けまいという意識が強く働き、無意識のうちに行動化していたことを、班別討論等において気づかされました。独善的であった自分がつまらなくなってきました。

(鹿児島経済大学 経 一年 山本圭三)

物を考える土台ができた

合宿を体験して物を考える基礎ができたように思えます。これをもとにして、自分の人生目的や、人生の意義を考えて生活したいと思います。

(鹿児島工業短期大学 工 一年 宮園 朴)

素直に物が言えた喜び

合宿で一番嬉しかったことは、自分の心にあるものが自分でも驚くくらい、口にすらすらと素直に出てきたということであった。

学校生活では、相手の意見をねじ伏せようとしていたのに、なぜここにきたらそういう気持が失せてしまつて、素直にものがいえたのか不思議に感じられるが、とにかくこの気持はこれで、理由などをくつつけなくてもよいと思う。その気持がとにかく嬉しいのだがら。

(中央大学 法 一年 飯田勝一)

胸をグサリと刺されたような思い

今まで体験してきたものと、非常に違った体験であっただけに衝撃が大でした。講義は、精神生活に関するものばかり占められていただけに、胸にぐさりとささるような気がしました。

しかしながら、精神的・宗教的であったためかどうかかわからないが、現時点の客観的判断が独善的であったのではないでしょう。

私もマルキシズム理論は、おそまきながら成り立たないと

思っておるものですが、なぜその理論が風靡し、かつ成立したか、等の社会科学的地見地から相手の立場に立って考えてみる必要があると思います。建国記念日、天皇制についても同じく感じました。

(慶応大学 法 二年 安田 稔)

### 曖昧な態度に気づく

僕の態度のあいまいさ、言葉のあいまいさによって、自分の言いたいこと、あるいは感じたことを、相手に通じさせることができなかった。そして、観念的な言葉を使わずに、すなおに話そうと思えば思うほど、言葉が出てこなかった。はがゆかった、そしてはずかしかった。

これからは、悪いことは悪い、良いことは良いという的確な態度で生活したいと思う。

(玉川大学 文 一年 遠藤 徳)

### もっと柔軟な態度が欲しい

心と心のふれ合いを求めて雲仙へやってきた私にとって、柔軟性に全く欠ける合宿教室を運営している人々の態度は、非常なるショックであった。

しかし得るところもたくさんあったのです。日本をおもう心を強く感じたのです。だが、我も彼も凡夫だと感じている

のなら、どうして木内先生や国文研の方々のような態度がでてくるのでしょうか。

私は日本をおもう。私のおもいをもつと正しく生かせる道を求めたい。

(順天堂大学 体 二年 西口 健)

### 実り多き五日間

この合宿の感想をといわれても、一言ではとても言えない。何か良さそうな感じはするが、体をそこに投げこむというようなところまではいかない。

木内先生の一見、人をつっぱなしたような「結局は自分が考え、実行しなければならぬ」ということは忘れることはできない。ほとんどの講師の方がおっしゃった、日本的な精神的風土、時が移ろうとも変わらない一本の綿々たる流れがあるということ、これを私は、最後の小柳先生の「学問のすすめ」「文明論の概略」の講義で強く心にきざみつけられた。

(鹿児島大学 法文 一年 中島繁樹)

### 来年も参加したい

期待していたほどの感動は得られなかったが、自分を改めて見つめ直す機会を得たこと、寝食を共にし、心を開いて語ることでできる友を得たことは、何ものにもまして良かった。

た。

慰霊祭には非常に抵抗を覚えたことなど、いろいろ不満はあったが、とにかくいい勉強になった。又来年も参加したいと思う。

(鹿児島大学 法文 二年 白髭 進)

自分はまだまだ誠が足りない

こんどは副班長という立場での合宿でしたが、班別討論などにおいても生命をぶっつけて入っていくことをしないで、適当な距離を置いて話していました。他人が「自分の殻を破れない」ということに対して、何とかそれを破ってやろうというような意志が働き、自分の殻はそのままにしておくというような態度でした。それだから相手に感動を与えることはおろか、自分自身が何か空しくなってきました。

小柳先生の講義の中で、樋口一葉の、国を憂うる心の強さに感激しました。

今までの自分というものが、まだまだ生きることににおいて誠が欠けていることを思い知らされました。今後、まごころをもって、つきあう人生态度を練磨していくことに、すべてをかけていこう思っています。

(宮崎大学 教 二年 望月俊毅)

自分なりの考えをもちたい

この合宿にきて、天皇制の問題、教育の問題、共産主義の脅威といった諸問題が提起されて、非常に考えさせられました。国文研の考え方に全面的に賛成はできません。やはり独走しているという感じがしました。

自分には理論などまだありませんが、この会で習ったものを参考にして自分なりの考えをもちたく思っています。

「日本の情緒」、「歴史につきあえ」、「師を求めよ」といった言葉が強心に残りました。帰ってから、古事記その他の古典をぜひ読みたく思いました。福田先生の熱心さにも感動しました。

(明治大学 商 二年 江藤正弘)

中途半端な気持での参加

合宿に最後まで素直に溶け込めなかったのが残念ですが、私の目的とした福田恆存先生のご講義を聞けたばかりでなく、直接われわれの班にきて私の質問を受けてくださったことは、ただただ感激でした。

それから、この会を運営なさっている先生方の勇氣に、昨年同様改めて感心させられました。

また、和歌も作ろうとする気が興らずに、無理に作ってし

まったく感じでどうもいいのができませんでした。これも中途半端な気持ちで合宿に参加した心の現われでしょうか。

(京都大学 法 二年 松沢嘉彦)

### 心に残る慰霊祭

最も強烈に私の心に残っているのは慰霊祭です。この合宿での慰霊祭においては、ものすごく心が動かされました。静かな雰囲気の中にいて、かがり火のいきおいよく燃える音、そして夜久先生の詠まれる御製と、夜久先生のお声を聞いているうち、その朗々とした中に何かこみあげてくるものを感じる事ができず、戦地で苦しんでいる兵士の姿が浮かび涙が出てしまいました。

割りきるとか、どういう意義があるとかでなく理屈抜きで素直に感動できたというこの体験を大切に、これから学校にもどっても何か確固たる決心で生きていける気がしております。

(亜細亜大学 経 三年 長谷川賢司)

何も掴んでいない—だが……

現在まだ何も掴んでいない。だが今何も掴んでいないから合宿は無駄だったというのではない。今後ゆっくり考えながら得られそうに思う。というのは、最初の間の班別討論にお

いて、上つからの知識を述べていながら、それをまちがっているとも感じなかった。しかし三日目だったと思うが、H君が「皆が語っていることは心から出たことではない。外面的な知識のみを述べ合っている」というようなことを述べたことから、たまたま自分もそのようなことを求めていただけにうれしく、合宿の「共に語り合う」意義を見いだせた、という体験があるからである。

最後に、パネルディスカッションにおいて学校制度のことについて述べられたが、われわれとしては、特に現在のわれわれの学生の態度について主に意見を述べてほしかった。

(神戸大学 理 二年 矢内定雄)

### 友を得たよろこび

きのうまでは、顔も見知らぬ友たちであったのに、心から語り合えるようになったことが、最も楽しかった。また自分でりきむべきことについて、他人から解答を求めようとした安易な態度を今深く恥じている。

(亜細亜大学 商 二年 加藤洋一)

### 人の話を聞くのが楽しくなった

去年まで、ややぎごちない態度で国文研の方と接触してい

たみたいだったのですが、上村先輩などもゆっくり話をする機会を持つことを得て、すばらしい先輩を数多く持っている現在の境遇を「幸福だな」と感じています。数年前までは、自分のことを分ってほしいと思うケチな気持がかなり支配的な時もありましたが、今では、人の話を聞くのが無性に楽しくなったようで、私もだんだん成長してきたのかなと思っております。

(九州大学 工 三年 稲津利比古)

よき友を得ただが……

いい友を見いだしたことは大変うれしかった。しかし、木内講師の北爆大賛成論にはどうしても納得できなかった。

(鹿児島大学 工 二年 並松 繁)

## 第五班

夢の中をたたき起こされた感じ

意見発表の時も言ったように、日本の国に生をうけたことに対して、誇りを持って堂々と今後の人生を過ごしていきたいと思います。

福田先生、木内先生方を初めとして、諸先生方のお話は実にするどくわれわれの怠惰な気持を指摘され、夢の中をたた

き起こされた感じでした。

特に、言葉の伝達の難しさというより、不可能さというものを話された時は、今までただなんとなく使ってきただけに驚きでした。今まで自分をかえりみる前に、他(環境)を批判してきた感が多々あったので、今後はまず自分をしっかりみつめて自分の確立に努力したいと思います。ほんとうに、こんな有意義な合宿に参加させていただいてありがとうございます。

(鹿児島大学 教 二年 蒲牟田保)

感激を新たに

前の合宿で心の中にばくぜんと残された感激を、この合宿で前よりもはっきりと得ることができ、非常にうれしく思っております。二回の合宿を通じて、自分がおのれの殻にとじこもっていたことを、まざまざと感じさせられ、これからの目標としてはおのれの殻をやぶるのが第一だと思っております。

(福岡教育大学 教 二年 向山 晃)

期待をかけていなかったが

私はこの合宿にそれほど期待をかけていなかった。それゆえ、最初の二日間というものは、講義にせよ班別討論にせよ消極的態度で臨んでしまった。

しかし三日目の班別フリートーキングで班員の素直な話を聞くうちに、ほんとうに先生方の話を自分のものとしていないことがわかり、それ以後の先生方の話がひしひしと身に感ぜられ謙虚であらねばならないことが良くわかった。自分の過去の心の姿勢を考えてみて全く反省を促された。

今後は、少しづつ自分にできる範囲で物事を深く考えて現在の自分から前進したいと思う。

(上智大学 法 一年 津下有道)

### すばらしかった班別討論

大合宿は初めての経験であったが、言うに言われぬ有難さであった。合宿での最大の収穫は、あらゆる問題を常に自分の問題として考えるという基本姿勢を教えられたことである。現時点でそれをどう受け止め、どう実践に移していくか。自分の問題として考えなければこうした厳しさは与えられず、すでに論点が自分と遊離したものの、換言すればすでに死せるものとなることを深く教えられた。

班別討論は内容をきわめた実に立派な活動だったと思う。話すということはこうも心に実りを与えてくれるものだろうか。個々の持ち味といったものが感じられて嬉しかった。なお今一度温めてみたいのは、木内先生のご講義にあった「具眼の士には、一葉で事は足りる」という言葉である。

(玉川大学 文 三年 山本 満)  
大きなエネルギーが湧いてくるよろこび

僕は今、この合宿にきたことを素直によかったと思っている。といって、何か収穫があったということをも具体的にいえるのではない。あえていえば、自分をもう一度もとのスタートに帰すことができたということだ。これは、諸先生の講義全体から静かに浸みこんできたその結果だと、ほんとうに感謝しています。

それほど今までの自分の変なりきみがあった。そんなものがとれた。それは合宿を通じて教えられた、自分自身の無力を自覚することにより、なにか大きな力にだかれている自分に、まだばくぜんとしたものですが気付きはじめ、やすらぎをおぼえたからだと思っています。静かだけれども、なにか大きなエネルギーが沸々と湧いてくるよろこびです。

ほんとうに短期間であっても、これほど心が通じあえる友を得たことに、おどろきもしよろこびもしています。

来年もぜひひきたいと思っています。

(福岡教育大学 教 三年 佐藤和郎)

身近なことを深く考えることから

一年半にわたる大学生活でわれわれが話をしてきたことは、何か自分の身近な存在ということを無視してきたことを改めて痛感させられた。すなわち、自分自身のごく身辺のこと（言葉使いやつき合い等）を深く考えることが、いかに大切であり、また難しいものであるかということをいまさらながら感じたのである。

われわれが今までの学内環境および社会環境で培われた既成概念が、いかに強くわれわれの日常生活にはびこっていて、日本人として生きていく場合大きい支障をなすものであるかということも深く反省させられた。

（島根大学 農 二年 村田清治）

頑なさが崩れはじめた

こんなに多くの人々が、同一の話題でこんなに深く話し合えるのか。そして、こんなにいろんな人がよれば受けとり方がこうも違うのか。一見、類型的にみえてもその実はけっして類型的なんかじゃないんだ、と考えるようになったとき、私の抱いている頑なさの一部が確実に崩れたと思ったのです。

また、私はここにきて、非常に魅力のある人を見つけることができました。その人は朴訥なのですが、非常に心がやさしい。あの心のやさしさは少しづつとり入れたいとほんとうに思うのです。（早稲田大学 法 一年 斎藤 実）

こんな素直になりきれたことはない

私はこの合宿に初参加であったわけだが、自分でも驚くべき体験をすることができたのを感謝しています。私がこの世に生を受けて二十一年になるのだが、こんなにまで自分が素直になりきれたことはないと思う。なぜか、私にはその理由がよくわからないが、多分一日一日真剣に生き抜こうと努力しつづけたたまものではないかと思う。

何か自然と心が安まり、はらはらすることもなく暖い目でも見つけることができるし、自然に対しても感謝する気持ちに自ずとなれたのである。

今までの私には、そんな安らかさ、ほんとうの意味での安らかさは決してなかった。いつも心の中で疑ってみたり、人の幸福に対して無意識のうちにも、ねたましさ、うらやましさといったものが頭を上げていた。

しかしこの合宿においては、真から暖い目ですべての物を見ることができた。文章ではとても今私の感じている事柄は書きあらわせない。それが残念です。

一番印象深かった合宿

今度で合宿教室の経験は四度目であったが、このたびの合宿ほど印象に残った合宿は初めてであった。

僕らの班で合宿途中で逃げ出すようにして帰った人がいた。その人とは大分話しあったつもりだが、どうしても自分の話を聞いてもらえない。最後には腹が立ってきたが、別れから考えてみると、どうも自分のほうに何か話を受け取りにくくしているものがあつたのではないかと思いはじめてきた。自分がほんとうに思っていることを自分の言葉でしゃべっているのならば、自然とそれが態度に現われてくるはずで、それが相手に通じないのは自分の言葉自体に問題があるのではないかと反省された。

「嘘をいうな」ということは、人にはよく聞いていたが、自分自身の言葉自体に、嘘ないしは、人からの伝え聞きがあつたのではないか、僕自身が今から一番考えていかねばならない課題だと思ふ。

(京都大学 法 三年 井上慎一)

心を聞き語り合えた感動

私が一番感動したのは班別討論でした。言葉を交わすうち

にほんとうの意味の意志の伝達ができることに何ともいえぬ喜びを感じ、今までの友情というものを考えなおさせられた。とにかく友の語る言葉に胸を打たれ、涙の出る思いをしたことも二、三度ありました。自分も心を開き、友も心を開いて、語り合えた感動はいい表わせないものです。

また初めて慰霊祭に参加したのですが、私たちの部屋でひととおり練習をした時、何か笑ってしまい、本番に出るのが申しわけなく思っていました。いざ篝火の燃えるのを見、夜久先生の和歌の拝誦を聞いているうちに何か今までの自分の受け入れる態度のまちがっていることに気がつき、終つたあとのさっぱりとした気持は何ともいえぬものでした。

(日本大学 商 二年 三島浩二)

皆の気迫に圧倒された

合宿にくる前までは、他の大学の学生諸君の考えを聞いておくのも、まんざらむだではなからうし、「雲仙は涼しいから行つてもよかたい」と、いささか生意気な心構えていましたが、この短かかった五日間を過した今では、全く謙虚にならざるを得ません。

第一日目の班別討論の時から皆の気迫に圧倒され、それ以後諸先生方のお話をうかがうにつけても、この合宿がいかに熱心な求道者の集まりであるかということを感じました。

た。

合宿全般を通じて、その雰囲気が真剣味を帯びたものであると同時に、非常に和やかで、僕のつまらぬ意見でも親身になつて聞いてもらえたことが何よりうれしく思いました。

(九州大学 法 三年 洲上隆秀)

こんどは大学生となつて参加したい

僕は高校生ですので、大学でどんなことが問題になつてい  
るのかさえ知りませんでした。今はいざ行くと学校の実態  
として参考になりました。そして今の僕の頭の中は、モヤモ  
ヤして一つもわかりません。

自分でつかんだと思つたら、次の講義を聞いてまたぼやけ  
てくる。結局あんまり全部がすばらしい話ばかりだったの  
で、しまいには何が何だかわからぬようになったのです。

それでもこれから「やれば自分の道は無限に広がって行  
く」という気持でおります。これをすぐ日常生活にもつて行  
けるかどうか自信がありませんが、とにかくがんばってみま  
す。この次僕が合宿に参加する時は大学生になつてやつてま  
いります。

(修猷館高校 二年 小森秀人)

心に響いた言葉がいっぱい

諸先生方のご講義が何と共通点を多くもっているんだろう  
ということにびっくりいたしております。日夜研鑽されてき  
た方々は同じことを考えていらつしやるのだなあとしみじみ  
感じております。この合宿に参りまして、初めてこのような  
ことを聞いたということが多々ありましたが、諸先生方は独  
自の学問から出発なさつて、究極の所ほとんど同じ見解に達  
されたということだけでもこの「合宿が本物である」とい  
うことが感じられるのであります。

福田先生の「良き師を求めよ」というお言葉は、戸川先生  
の「石一個にも顔があり、しかもつらがまえ以上の何物かを  
内にもつている。かつまた、この一個の石と人間はかわり  
あつているのである」ということを考え合わせれば、師は必  
ずしも人間のみに限るものでもあるまい。師を求めうるに  
は、それだけの心の姿勢が正しいものでなければだめであろ  
うし、見いだしうるだけの眼を持たねばならないでしょう。  
福田先生の「歴史とつき合え」は物を見る目を全く変える  
べきだと思ひました。歴史を従わせるものでは決してない  
ということを知りました。

とにかく心にガンガン響く言葉は書き尽せないほどあり  
ます。物を見る目、考える目が変わつたことは確かでありま  
す。

(九州大学 法 三年 島津正数)

自分は一人で生きていくのではない

## 第六班

### 合宿中の一番の失敗

昨年、城島の合宿に参加した時には、非常に苦しい日々を送ったが、今年の合宿においては、二日目頃から心がなごんできてうれしかった。僕が本当に新しく学んだのは「つき合い」ということであった。客観的事物の見方に心をとめていたが、福田先生の「歴史とのつき合い」という言葉の中に、客観的すなわち科学的歴史の見方を見出したように思いました。

本当に真の科学的歴史とは、過去の時代の人々の書物なりに、直接に謙虚な態度で接することにより始めるべきだ、ということを見出したように思います。自分は一人で生きていくのではない——つき合って生きなければならぬのだ、ということを見出したように思います。自分は一人で生きていくことを本当に自覚することにより、精神的及び経済的平等の達成がなされていくものだというのを感じました。何事も本当に「素直な気持」になることにより求められるのだと感じました。（鹿児島大学 法文 二年 工藤一己）

合宿中の一番の失敗は、「日本への回帰」を輪読の時アグラをかいて天皇の御歌をよんだことです。この行為こそ先生たちの教えがまだ自分のものになっていないからであると、自分の不真面目さを考えさせられました。自分のほんとうに信じたものが、自分の意識しない時にあらわれて、ふとそれに気がついた時は、どんなにかうれしいことでしょう。

（同志社大学 工 二年 長尾 治）

疲れた。だが、すがすがしい

病み上がりのままにこの合宿教室へ参加させていただき、何よりもまず気になっていたことは、この四泊五日の合宿期間中自分の体力が続くだろうかということでしたが、合宿教室の気迫にいつしか体力への懸念も忘れ、何とか無事に終えることができほんとうにうれしく思っています。今は、これまでの疲れが一度に出てしまっただけでぐったりとした気持の方が強いのですが、何かしら快い疲れという感じですか。疲れながらも、すがすがしい気持です。

今まで素直にということをお願いながらも、それが空念仏になる傾向が強かった自分が素直になれたというのでしょいか、かたくなな気持が素直な気持になったというのでしょうか、自分の気持がすこしひろくなったような気がします。と、同時に、友を得たことが一番うれいのです。このまま別れてゆくのは辛くてしかたないのですが、お互いに信じあえる友がいるんだと思うと勇気が湧いてくるような気持です。

最後に小田村先生がそのお話の中で、「乳を吸う合い間などに、赤ん坊は母親の眼をじっと見つめている」、といわれましたが、この言葉を大切にしていきたいと思っています。

ひねくれていじけたままに終わった

今までごうまんであった。それを自分では素直な気持でやっていたと思ったが、まだほんとうには分かかっていない。というのは、実行が伴わないからだ。ひねくれて、いじけたままに終わった。(岡山大学 理 三年 菅 志朗)

友と語る楽しさを知った

合宿の中で先生方は、右翼にあらざといわれましたが、僕が合宿に参加する前、あの案内のチラシを読んだり、購入し

た書物を読んだかぎりでは、右翼ではないだろうか、そんな気がしたのです。もっとも、今にして思えば僕が世間一般に通用している見方でみたからだったのかも知れません。

一番うれしかったのは、友だちと話ができなこと、この楽しさを教えてもらったことです。しかも話していることが、いちいち胸にひびいてくるのです。討議する問題の内容にもよるかもしれませんが、僕が学校で学友と話す時には、何か、いわゆる空理空論のみを論じていたのです。哲学とか、芸術とか、まるで小さな子供が早く大人になりたい、僕はもう大きいんだ、というので背のびをしているような感じ。僕はそんな時救われぬ気がするので。相手の言っていることも自分の言っていることも自分には嘘だとわかるのです。

ところがここには少なくとも心の底から話を聞いてくれる友がいたのです。これがうれしかったのです。これからは学友にもこういう態度で接しなければと思います。

(早稲田大学 文 一年 広瀬清治)

天皇について考えさせられた

大きな何物かが私の前に立ちふさがっているのを感じ、思案していたが、班別討論は私に積極的にとりくむ姿勢の必要を、身にせまるほど促してくれた。また、天皇に関しては、いろいろと考えさせられた。

(鹿児島大学 教 一年 中村栄司)

### 学生生活の全部と言っていい合宿

最後の学生生活をふりかえってみて、この合宿に参加することに学生生活の全部を捧げた感じがしています。合宿に参加するたびに、新しい気持ちで出発できたし、親しい友を得ることができたのもこの合宿においてでありました。将来の師とする方々を与えられたこともまた、この合宿教室においてであるとだれにも声を大にしていることは非常な喜びです。

(亜細亜大学 経 四年 山路忠重)

### 感激と不満の混同した合宿

「他大学の学生はいかなる問題をいかなる方法でいかに考えているのか」私はそのような好奇心で合宿に参加いたしました。が、卒直にいいまして、感激と不満の混同した合宿でした。

私は人間の生き方に「絶対」と言うことはないと思っております。この観点から見まして、私はこの合宿に何かしら漠然とした不満を持たざるを得ません。

感激したことは、講師の諸先生も学生も社会人の方々もすべての人々が真剣な態度であったということです。私も一生

懸命聞き、語りました。私の一生のうちで大きな転機であったことに確信を持っております。人間の生き方として真剣であることは、より良く生きるためだと感じております。

(福岡工業大学 工 三年 藤本博幸)

### 日本的な情緒を身につけたい

合宿に参加して、強く感じたことは「何に対しても、もつと真剣に考えねばならぬ」ということです。また、各地方から集まってきた人々と、話し合えたことをうれしく思います。和歌の創作をこれから続けて、日本的な情緒を、呼びましたと思います。(中央大学 法 一年 今井文明)

### 考え方がガラガラとくずれてしまった

僕はこの合宿にきた一目標として、現在の学園における学生運動に対抗しようとする確固たる組織の実体を、みようとしました。なぜなら、組織なしにはなんらの活動もできないことが、いつも民青と論争をしてわかっていたからです。けれども、この合宿を過してみても、ここしばらくは、手を引こう、いや引かざるをえないという気持ちとなってしまいました。今までの自分の考え方、学び方、動き方というようなすべてのものが、ガラガラとくずれてしまったような感じがし

たからです。いろいろな主義を設定し、自分をその中へ入れようと試みてきた自分を、もう一度みなおしてみよう。そして夏休みを終る頃までに、一応の結論をだしてみようと思えます。

(一橋大学 商 一年 村越文理)

心の素直さが満ち満ちていた

四泊五日の合宿を通じて、特に印象に残ったものは、講義、班別討論を問わず、人の心の素直さが、みち満ちていたことです。日々何かとあわただしく過して、他人に対する自分の心の姿勢など立ちどまって見ることもなく、また他人から受ける心をくみとるといふ心がけを、往々にして忘れていくときに、全体の中に真心を感じたときに、喜びと自己への煩悶を覚えました。

これからは自己の問題を、来年の合宿まで、今日のこの心持ちを基盤としてほりさげ、学生生活を送っていきたいと思っています。

(皇学館大学 文 三年 氏原正昭)

心のひきしまる四泊五日

まったく心がひきしまる四泊五日で、一生のうちで最も貴重なものだったように思われます。合宿に参加した人のみんなが、ほんとうに真剣に考えたり、討論されるのを見るにつ

け、胸に迫るものがありました。同時に人の心を理解するのがいかに困難であるかを考えさせられました。

一生は時間の制限があるのでむだにはいけない、何もかもできないので、何か一つでも良いから心を打ち込んでやっていきたいと思えます。

(佐賀大学 農 三年 福井英成)

心に残った言葉の数々

「われわれ人間は自分一人で生きているのではない」が、「自分一人で母親の腹から生れ出て、ふたたび一人で死んでいく」という宿命にある。一人で生きているのではないが、なぜ一人で、「生死」の極地を味わわされるのであるうか。私はなんとも、どうしようもない深い悲しみを感じます。私が、合宿で聞くことができた「絶望」もこれであり、「歴史もこの深い人間のさまさまの苦しみ、悲しみのつみかさねである。」との福田先生のお言葉にもこのことを新たに思い知らされました。

「この人生の『絶望』を救うのは、心の純粹さ、素直さ以外に何もない。それが友情の根源である。」この言葉は心にわきでる清々しさを私に教えてくれた。これを機縁に集まった人々との友情のきずなを保っていききたいと思う。

(鹿児島大学 教 三年 北島照明)

## 慰霊祭のあり方に一考を

この合宿で、僕が一番馬鹿らしく感じた行事は慰霊祭であった。僕自身としては、護国のみ霊に祈りを捧げることにについては大いにその意味を認めるが、実際には参加学生の中に相当の疑問を持つものもおり、ただ「経験」が大事であるということから全員参加という方法にもって行くべきでなかったと思う。

(神戸大学 法 一年 岡田吉彦)

## 行動は各自の自覚にまつべきだ

率直に述べれば、私は今度の合宿で感銘を受けた点が少なからずあったといえますが、当会の趣旨とは関係のない点で漠然とした反撥感を覚えました。たとえは講義の時、本で扇を作って扇いでいますと「遠慮しろ」と注意されたり、喫煙も許しが必要ではないということなのですが、それもさることながら天皇のみ歌を輪読する時に、オプザーバーの方から正座することを、半ば強制的にされそうになった時はその最たるものでした。私は天皇の国民を思う歌に相当の感動をも受けましたが、正座するかしないかは各人の自覚に待つべきものではないでしょうか。全体感想発表会の時に、誰かが「中世キリスト教的なものを覚えた」といいましたが、私

も以上のような点で同感であります。

本来この会は、いわば啓蒙的性格を持っているものと思います。それゆえに、啓蒙される人に対しては、ある程度自由な立場を与えるべきではないでしょうか。そして各人が感動を覚え自覚すれば、行動においては彼の判断にまかすべきであると思います。

(中央大学 法 四年 川添 昭)

## 心にくい込んできた講義

戸川先生の講義は本当に自分の心にくい込んできた。自分は、かってこれほど肉迫してくる話しを聞いたことがなかった。自分の心はまだまだ非常に濁っている。この濁りをなくしてしまわなければ、世に役に立つ人間になれぬだろうと、今痛切に感じている。

(早稲田大学 政経 三年 水上三郎)

## 第七班

### 非科学的であった

今回の合宿は、初めて会った人々（しかもまじめな人々）と自由に懇談し非常に有意義であったが、雰囲気自体が何となく非科学的かつ観念的であり、もっと学問的な研究討論が

必要であったのではないかと思う。たとえば国家・愛国心について国家論（ラスキ、マキャベリー）などに関する研究はまるでなされなかったのはどういふわけか、疑問に感ぜざるをえない。単に「国家を愛すべきだ」という前提に従って論を進めるのでは、あまりにも学問的なものが欠如しているといわざるをえない。

すこしもんくをいったが、他の点ではまあまあよかったと思う。  
（早稲田大学 法 二年 舛田忠生）

### 勉強不足を痛感

正直に言って終ってほっとしたという気持です。もちろんなごり惜しさもあるのですが、今は早く帰って、ともかく猛烈に勉強しなければならぬという気がするからです。それは下等な感情かもしれない劣等感からであります。非常に自分自身の勉強が足りないという厭になるような悲壮さともいふべき気持からです。昨年度参加し事後の学習を心に誓いながらそれがなされず、問題をすべて曖昧にしまった誤ちを繰り返す、恥ずべき行為のないようにしなければならぬと思っています。

慰霊祭においては何らかの違和感はどうしようもないものですが、三井甲之先生の「ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもるやまとしまねを」という献歌を聞いた

とき、いかに押えようとしても、若者のあふるるものを感じざるをえませんでした。本当に祖先を慰霊するという気持には残念ながらなれませんでした。そういう気持は大切なもの、尊ぶべきものと心から思います。

（鹿児島大学 法文 二年 土岐直彦）  
生まれて初めての和歌創作

福田、木内両講師の講義をじかに聴きえたことは、ここではっきりということではできぬが非常に大きな何物かを感じさせてくれた。

和歌を生まれて初めて作ったが、なかなか自分の感情、ところが出せず苦労したけれども、なにかさわやかな、すかっとした気持になった。和歌に自分の感情をたくすということには意義のあることだ。今後勉強していきたい。

（関西大学 法 二年 柴田義治）  
謙虚な気持になった

私を謙虚な気持に導いてくださった木内先生はじめ全参加者に感謝の気持を述べたいと思います。特に木内先生は多くの学生の意見に対して、「そう考えるなら自分でわかるうと努力すれば良いではないか。私が返答を与えても君たちはわ

かるはずがない。」と答えられました。が非常に感銘を受けました。

また「最後の夜のつどい」は生まれて初めてほんとうにゆかいな気持ちで友らと心を通わすことができた集いでした。

(長崎大学 経 一年 白石 肇)

### 感ずることの大切さを知らされた

この合宿に参加して一番の収穫は「感ずる」ことの大切さを再認識させられたことであります。今までの僕が持っていた「本の文章に傍線を引っぱって世の中を理解する」という知のみの考え方の危険さを先生方に教えられたことが、これからの僕の物の見方をより高次元へと導いてくれることを確信しています。その一例が「天皇」についての考え方です。すなわち「天皇はおられても一向にかまわれないが、それだけだ」というのが今までの天皇に対するごく浅薄な考え方でしたが、今回の御講義に関連してこれから「天皇の政治精神」をよく研究していきたいと考えています。

(明治大学 経営 一年 奥山章男)

### 学園にない雰囲気

この合宿には初参加ですので、いかに過ごしたらいいのか

郷里を出発する前から不安でなりません。正直いって五日間の講義は私にとってむずかしかった。

和歌では自分の体験を正確に詠むことに一生懸命つとめましたが、たいした作品はできませんでした。しかし私はそれ以上のものを身につけました。それは授業に対する心構えであります。入学以来気のゆるみで毎日をなんとなく過ごしていたのが、この合宿前の私の生活の有様でした。

三百人余りの人が集まり話し、声ひとつ聞かえない講義の雰囲気、これは学園にはないものでした。そこで私は学園に戻ったら一生懸命気を入れ変えて授業に臨まねばならないことを痛感させられました。来年もできたら友だちも誘ってぜひ参加したいと思えます。(亜細亜大学 法 一年 斉藤得三)

### 感動したパネルディスカッション

僕はパネルディスカッションにたいへん感動した。特に木内・福田両先生が親身に僕たちのことを考えていてくださるということがとてもうれしかった。木内先生は班別討論のときおみえになって、「自分はいつ死んでもいいと思っている。明日死ぬかもしれない。しかしそう思うことによってその生きている一刻一刻が充実した内容をもってくる。」と話されましたが、非常にすばらしいお覚悟だと思った、自分はいつそんな心境に到達できるのだろうかと思うとなんだかさみしい

ような気もした。とにかく今度の合宿で立派な先生方の講義を聞いたということはたいへん役に立った。

(神戸大学 経 一年 西尾幸雄)

### 一致団結して日本を護ろう

合宿教室に初めて参加して一番感激したことは、日本人のみんなが日本を護っていくために一生懸命に努力し、勉強していることでした。

まったく未熟な私ですが、この合宿を機会に、日本を担う青年学生たちと一致団結して、祖国日本を護るために協力しようという感激でいっぱいです。

(鹿児島経済大学 経 二年 東条 久)

### もっとゆさぶられたかった

班別討論ではもっと長い時間、師を囲み、「お前はだめだ」と思い知らされる体験をしてみたかった。そうすれば身も心もおどるような感動を味わうことができただろうと残念に思います。

なお来年も参加することができれば、同じメンバーで一年間しっかり勉強してきて会いたいと思います。

(中央大学 法 三年 高橋俊樹)

### まず自分がしっかりやらなければ

なぜもっと自分の切実な体験として、生きた言葉としてお互いの会話ができなかったのでしょうか。自分自身がそういう言葉をけなかつたのであろうか。自分の日々の生活の怠惰な、無気力な姿勢というものを痛感している。

福沢諭吉の「独立の気力なき者は国を思うこと深切ならず」という言葉が自分を突き刺すようだ。まず自分がふわふわしていて天下国家を思うことなどできたものではない。そういう人間が祖国を論じるようであれば、偽善であるばかりか、国に対しての侮辱であろう。現代の日本の混乱もそのあたりにあるのではなからうかと思う。帰宅してのち、心をはりつめて勉強をしたい。まず自分がしっかりやってのち、来年も友と肩をたたきあって会えることを願っている。

(鹿児島大学 教 三年 徳田浩士)

### 真の学問の姿を見た

今年の雲仙合宿では、諸先生のご講義で真の学問の姿をかいま見たような気がします。でも、その代償として過去の自分というものが、現在の自分というものが、一体何と空しいものだったかを痛感しています。日常生活に戻れば、この合宿

の経験や学ぼうという姿勢がくずれはしないだろうか、それが疑問です。でも私はこれからの自分の生の一瞬一瞬を、この合宿の一つ一つの言葉を思い起こし、必ずや自己の精神生活、思想生活の成長に役立てるよう努力したいと思っています。

(玉川大学 文 二年 二井康雄)

疲れてしまった

頭が回らず、また自分自身が皆より先に疲れてしまって、班員皆に十分尽せなかったことが苦しい。

だが班別討論はきびしいなりにとでも楽しかった。講師のお話を聞きながら、また班別討論でほんとうに気持を引き締められた。

これから自分自身はどう行動するのか、また、せねばならぬのか、どう生きることが真に自分を生かすことになるのか、精一杯取り組んでいきたい。

(九州大学 医 四年 古賀 誠)

木内先生の眼光に圧倒された

僕にはこのような規律正しい合宿は初めてで、かつ目的が思想面だということに一種の疑惑と危険とを感じて参加しましたが、諸講義、班別討論の折々に僕のこういう案じていた

ことが不必要だったのをうれしく思いました。

とある夜、木内先生が部屋においてになりわれわれの車座の一隅に位置された時、人間の眼光(木内先生のです)にわが身の自己満足、浅薄等々の事実を認めざるをえませんでした。「年をとるといふことはいいことだね……私はやりませよ……死ぬといふことは何ともないね……」日本国のため、教育のため不惜生命の悟りを目前に見たような気がしました。私はこの五日間、心に衣を着せずに友の真心に触れたことをこのうえなく若人のよろこびとしたいと思います。

(立正大学 国文 二年 浦 一俊)

自分の始末は自分で

先生方は口をそろえて言われた。「自分の始末は自分でつけろ」と。そうだ、僕は自分の始末をつけなければならぬ。そして、木内先生の言われるように丘に登るのだ。水面から首を出すのだ。いろいろなことについてお話があった。

いろいろな言葉に思いをとどめた。だが、それらの言葉をほんとうの意味で実践しようとするならば、岡潔先生の言われる「死を見ること帰するが如し」との心境にならないことにはどうしようもないではないだろうか。しかし、人間が生きて行くことのきびしさ、真剣さ、それを身につけない限り、決して水面から、首を出すことはできないのではないか、丘に

登ることなど思いもよらないことであろう。現在のこの気持を大切にしたい。(九州大学 工 一年 志賀建一郎)

### 短かった四泊五日

思えば短かい四泊五日であった。でも内容はすばらしく、期間は短かくても、心の大きくなった日々であった。各講師の先生方のすばらしい講義にただ心がふるえるばかりであった。自分の心の中にはいろいろな考えが充満している。考えもまとまっていないが、なにかしら、合宿を機会にして、一つにまとまっていきそうだ。考える基本ができそうだ。うれしい。(鹿児島大学 法 文 一年 曾木国智)

### 居眠りしたことが悪いというのではない

二日目の夜、小田村先生から「君が居眠りしていたことが悪いというのではない。居眠りをしていた者が、班別討論で司会をやったということが悪いというのだ。班別討論がメチャメチャになるのはあたりまえじゃないか。もっと、男らしく物をいえよ。」と忠告された。こういう時、司会を人に代ってもらうのが、ほんとうに班全体のことを思う態度だろう。人の心を汲みとろうとしない自己本位の自分を思い知らされた。しかし、非常に楽しく気持ちのよい七班でした。

(長崎大学 経 四年 森重忠正)

### 話し合いの難しさをつくづく感じた

いかにしたら自分の考えていることを相手に伝えることができるか、と相手と話し合うたびごとに考えてきた。しかし、ほんとうに自分の考えていることが相手に伝わるのだろうか。自分の心を相手に伝えることができるだろうかと思つた時、否としか答はできなかつた。自分の心を伝え得ぬ時の悲しさは、深くそのことを思つた者にしか分らないであろう。もっと深く自分と他人を見つめてみることにしよう。

(鹿児島大学工 二年 泉 和人)

## 第八班

### 自分に対してあまかつた

今まで自分なりに充実して生きていこうと努力してきたつもりでしたが、この合宿を体験して何と自分を甘やかしていたか、自分に妥協していたかということをつくづくと思ひ知らされた感じがします。

班別討論などにおいて、自分の殻を破ってそれにとけ込んでいると努力はしてみましたものの、なかなか難かしいも

のだと感じました。でも、これから人とつき合う時は勇氣をもつて、自分の殻を破り、直情をこめてつき合いたいと思いません。

(鹿児島大学 法文 一年 松木 昭)

考えが崩れた、だが楽しい

自分は自分なりの考えをもっていた。だから諸先生方のご講義の内容には、反駁するものが非常に多かった。しかし、班別討論において自分の考え方の違っているのが指摘され、これでもか、これでもかと追求される。逃げ出したい。しかし逃げられない。苦しい。そして自分の考えが崩れてゆくのが分かる。心に穴があいた。

だが今は楽しい。崩れたものを正しく組み立てられるのだから……。

(神戸大学 工 二年 高橋 豊)

もっと自分をみつめよう

僕が今までいろいろな考えてきたことは、日韓がどうの、ベトナムがどうのということばかりであったが、ここにきて、もっと身近に、自分は人生に対してどうあるべきかという基本的な姿勢を熟考せねばならないことを痛感した。その意味で自分には収穫の多い合宿であった。

(明治大学 商 二年 久保賢之助)

問題意識がわいた

「自分はすなおである」と考えることが、すでにすなおでない。もっと謙虚にならねばならないと班別討論を通じて知ったことが非常にうれしい。

国家、天皇、言葉、宗教など全く考えていなかったが、考えることの意義、問題意識がわいたことも良かった。

(大阪大学 歯 一年 上村佐紀夫)

大きな励み

大学に入学して実際非常に失望しましたが、高校時代から漠然とですが自分の人生に対する生き方、目標を持っていたので、何とか立直ることができ、自分なりに充実した大學生生活を送ってきました。

しかし、合宿教室に参加し講師の方々あるいは友だちの考えを聞き、まだまだ自分の考えが未熟であることを思い知らされましたし、同時に自分の人生に対する目標に向かって進む上での大きな励みになりました。今後も自分自身を見つめながら、日本を愛する国民として自分の人生を生きたいと思っています。

(広島大学 水産 一年 荻山 真)

赤裸々になることのむずかしさ

自分の殻がなかなか打破できないものであり、素直に表現することもむずかしいことを痛感いたしました。

また来年参加して、班友の進歩や自分の進歩を話し合いたい。  
（中央大学 法 一年 樋泉克夫）

### 驚きと感銘

実験、レポートで追われている学生生活で、ひまがあれば本を読むというよりは、パチンコ、ダンス、スタンドバーと刺激的、享樂的な生活を過ごしてきた自分にとって、真剣に祖国日本、天皇を考えている学友がいるということは、非常に驚きであったし、また自分が恥ずかしく感じられてならなかった。

友人との交際にしても、友も自分も傷つかない表面的なつき合いで満足はしていなかったけれども、あえてそれを打破しようとも思わなかった。が、今後、急にはいかなくとも、打破してゆくつもりである。

先生方の講義そのものより、自信に満ちた話し方、態度に心打たれるものがあつた。

（鹿児島大学 工 四年 嶋村宗広）

相手の意を汲もうと努めて

合宿教室において一番痛感したのは、人間同士のつき合いの難しさということである。僕達の班のふん囲気はしばらくの間、固く氷りついたものであつた。僕は班員の当然の義務として、この空気を和らげること努めようとした。しかし、だめなのである。僕の言動は僕の意志の反対方向、すなわちふん囲気を固める方向に役立っている気がするのである。

しかし、小田村講師の話聞いて以来、相手の意を汲み取ることには一生懸命になつた。そしてこれが解決の道だつたのである。そう、この方法は調和した和やかなふん囲気と、激しい真情を投げだすことを両立せしめた。この方法に確信を与えたのは和歌創作であつた。僕は他人に批評してもらふことにより、自分の歌、すなわち自分の心をみながら、自分のいつわつた言動を知り頭を下げたのである。このいつわつた心の姿勢を正す道は、相手の話をよく聞き、その意を一心に汲みとることだったのである。人に、歴史に、国家につき合ふこれからの僕の生活において、対象を自分の固定概念で決めつけず、常に謙虚にして意をとり、その上で自分の処する態度を決めようと思つた。合宿参加の皆さん、ありがとうございました。

（長崎大学 教 二年 梶島有三）

つき合いはむずかしい

人とのつき合いをこれほどむづかしいと感じたことはなかった。今まで「人とつき合う」ということすら、たいして必要なこととも思っていなかった。したがって努めて人に接しようともしなかった。副班長という立場でやむをえず班員と接していかねばならなくなったわけであるが、日頃の心の姿勢ができていないのでなんともならなかった。

(鹿児島大学 文理 三年 黒木清重)

深く考えることの大切さを知る

一切の制限を越えて裸のままできあがり、この「ことば」は理解したつもりでいたが、はたして真実を述べるだけでいいのであろうか。

ウソを言わない。それだけで裸になったと私は感じていた。本を読むにしても、熱心に読んだ、感動した、それだけで満足していた自分に、何か深く考えるという大切なことを教えられた感じがする。

(鹿児島大学 法文 一年 高橋良和)

一刻一刻に心をこめて

いかに人の心をくみ理解することに欠けているかを思い知らされました。人それぞれその思いはさまざまであることを自覚せず、自分の狭い考えでしか、人の気持を考えなかったように思います。もっと謙虚な気持で人の話を聞き、人の心に思いをよせることを心せねばならぬと思います。

自分はまだまだだから、もっと緊張した精神生活をおくらねばならないと考えさせられました。しかしそう思うことによつて何か現在を回避してきたように思え、そういう生活では何も生み出せないと思ひ知らされました。そのつどそのつど心をこめてゆかねばならぬと思っております。

(亜細亜大学 経 四年 岩越豊雄)

態度で説得すべし

諭吉が「人の思想は一方に偏すべからず。綽々然として余裕あらんことを要するなり」といったことばを「偏すべからずとは、右でも左でもない中間に低迷することではない」という註釈をつけるまでもなく「確乎たる思想を有するも、それを人に押しつけることなく悠然と処し、説得するなら態度で説得する」と解し、かつその必要さを痛感した。

戦後の精神的な共通基盤の建て直しは、ことが精神的な問題であるだけに、時間がかかるが、あわてずに時間をかける必要があると痛感する。

(東京外語大学 英米 四年 松井博文)

自然を見直すことを迫られた

第一に「恐ろしいのは自分だ」と感じたこと。自分にうそをついている時、自分で「これでいいさ」と感じるが、これではいけないと知った。

第二に「自然を見直す」ということを迫られたこと、実はこのことが最も深い印象であるが、自然を見直せば、おのずから歴史をも見直すように迫られることになると思っている。

(関西大学 工 一年 渡辺 章)

まず相手の気持をくみとることだ

班長として合宿をうまく進めようという意識のみが強すぎて、相手の気持を汲む努力が足りず、また自分の思いを伝える言葉が不正確であったことなどが反省させられました。

「人につきあうことはむづかしいぞ」ということの自覚がなかったためともいえませんが、こんなに熱意をもっているのになぜ通じないのであるかと、自分の心を疑い、相手

の心をも疑ってしまふのです。逆説的なようであるが、相手に自分の思いを伝えるということは、伝えることが非常にむづかしいというのを絶えず自覚していて、はじめて可能であると思った。「人につき合うことが容易である」と思った時にはすでに、「つきあえなくなっている」ということを痛感しています。

(九州大学 法 三年 古川 修)

## 第九班

講義より友人を得た喜びが大きかった

この合宿にきて実に純真な学友と接し、ちよろど赤子に接し自分の心が清らかな水に洗われたような感じをうけた。

この合宿に参加している人は、僕に言わせれば、ほとんどニヒリズムにおちいったことのないような印象をうけた。だから卵からかえったひなのように美しい。汚ない世の中にこういう人たちを出して汚したり、苦しめたりするのが可哀想で、人間否定にならぬようと祈られずにはいられなかった。

合宿講義で感じたのは、非常に国文研に対して失礼だが、期待はずれであるということであった。日本で指おりの理論家といわれる福田先生には特に期待していた。というのは昨年度合宿参加者の意見を聞くと、岡潔先生の講義に感激し、世の中が変わった、ということだったからである。僕ももし

かすると人生が変えられるかもしれないぐらゐの期待をもつて参加した。しかし先生の講義からはそれ程のことは得られなかった。

講義よりもむしろ友人と心を打ち明けて話したその方にはるかに得るべきものがあつた。

(鹿児島大学 法文 二年 辻 正道)

### 古典に接する必要性を認識した

この合宿で得た最大のもの、古典に接する必要性を認識したことである。われわれは西洋の学問を日頃勉強しているが、日本古来の書物に親しむ機会はあまりにも少なく、興味さえしめすことは少なかった。しかし、この合宿において古典の中にも自己の生き方に有意義なものを見出すことができました。これを機会に古典への交わりを多くしていこうと思ふ。

講演にはある程度のおもしろさを感じたが、班別討論にはあまり得るところはありませんでした。理由としては討論の時間が少なかったし、われわれが日頃、友だちと討論するときはずっと激烈であり、真の自己の姿を暴露させられてしまうほど反応が強く戻ってくるが、そんな場面がなかったことです。

(学習院大学 経 二年 酒井大明)

### 今はじっとしておれぬ気持

戦後主流を占めた思想にのっとりて物事を判断するということ、僕自身は気づかぬうちに身につけていたのです。福田先生や他の講師の方々の話から、自分は内容のないうけうり的な考えにとらわれていたとは気づきましたが、気づいたとは言え、完全に自分の考えが崩れたとはいえません。それで、もつともつと皆と意見を交換して自分を一度うちこわしたいと思ひ、そんな機会が得られたら幸いと考えます。しかし、それにしてもいかに自分の精神生活や、物事あるいは人に対する姿勢が、いい加減で真剣でなかったかが痛感させられ、また日々の生活の怠慢さを眼前にさらされ、自分に対する腹立ちと同時にやらねばならぬというじっとしておれぬ気持ちにさせられ、真に得難い体験を得ることができたと感謝いたします。

(九州大学 法 三年 山下光明)

### 二十一年間に匹敵する四泊五日

四泊五日、日数としては短い期間であったが、精神面においては実に長いものと感じられた。というのは、私が今まで生きて二十一年間の生活に匹敵するもの、いやそれ以上のものを与えられ、これからの私の生き方に……現在はその一

一つ挙げることはできぬが……指標を与えられたと自分なりに思った。

合宿に参加したこの八月七日は私の誕生日であった。立派な先生方や友達との交わりは、すばらしい誕生日のおくりものであったと考えている。

(鹿児島大学 教 三年 三宅達也)

### 過去の自分が恥ずかしい

昨年合宿に参加して、これではいけない、自分は何を今までしていたのだろうと反省して、この一年何とか自分なりに勉強したつもりであった。しかし、今度この雲仙にきて、私の一年の勉強はもののみごとに打ち砕かれてしまった。いたい私はこの一年何をしてきたのだろうかという気持ちでいっぱいです。残念だというよりも自分に対して恥ずかしく、またはがゆく感じております。人と語ることの難かしさ、自分の殻を打破って人のふところに飛び込むということの難かしさを痛切に感じました。このことができなくて、社会に出て何ができるかと思ひ、なおいっそうこれからも努力をしていきたいと思ひます。

(九州大学 法 三年 脇坂佳秀)

### 今まできびしさが欠けていた

今思うことは、「友とのつき合い方」に誤りがあったことです。私は「友情」という言葉を余りにも安易に考え、その考えを実行してきました。友の願いはすべて聞き入れてきましたし、また私も友が私の願いを聞いてくれるのがあたりまえだと考えていました。今ここにきて感じたことは「友情」という名に甘えずぎていたのではないかと思ひます。甘えずぎたというより、そういう考えを基にして考え行動していたのです。私にはきびしさが欠けていました。友にもたれずぎていたのです。友の願いをことわるのも良いことです。今からはそれを努めて心がけます。合宿での班別討論は私には苦しいことの連続でした。話をしようとしても言葉が出てこないのです。そして友の言葉の跡をたどって、わかろうとするのもやっとのことです。

乱れたる心秘めつつ友どちの言葉かみしめ聞きをりにけり  
これが私の気持を多少なりとも表わしていると思ひます。  
四泊五日の短い合宿でしたが、今ふりかえりますと実に清々しい気持がします。

(京都大学 法 三年 溝江 優)

## 向上心が芽ばえた

先生方が真心をこめて、自分の講義に生命をうち込んで話されたことに非常に感銘を受けました。感動する自己の状態を持続させたいと思います。あくまでもこれは契機で自分が向上したわけではない。ただ向上心が芽ばえたのです。小柳先生の話にもあった「入口」にやってきた状態である。いつまでも感動する心を持ちつづけ学問に心を傾けたいと思いません。僕のいう学問は知識の積み重ねにとどまらないで、もっと学問に真心を傾け、その学問に満ちている生命力をつかみ取るということです。いままでの僕は物事を外面的に見て、それに反発し、反発して自分を向上させてきたつもりですが、もっと物事の根底をつきとめてその真心をつかみ取りたいと思います。

(長崎大学 経 一年 目下部隆)

きてよかった

どのような講義が聞けるかということに少なからぬ期待は持っていた。ところがこの合宿で最初に聞いた講義、および三日目までに聞かせてもらった講義はかなり自分自身のイメージとは異なっていて、少々失望に近い気持を味わった。たしかに哲学的な講義も必要だと思ひ、物事を考えるという

意味においては大きなプラスになったとは思いますが、一方、世界の動向、日本全体の動き等についての講義などもっともっと多くあるべきだったと思う。この点について最終日まで不満が残っていた。

しかし、小柳先生の講義を聞いて初めて自分の求めていた講義を聞いたという気がしてとてもうれしかった。とにかくよかったと思った。来年は社会人になるが、やはり参加するつもりである。(熊本大学 法文 四年 西村正顕)

ムチを打たれた気持だ

この合宿に参加した大きな目的は、現在のだらしない自分から脱出したい、ということだった。今まで精神の糧となるべき話を聞いたこともあるし、本も読んだことはある。しかし、実感として湧いてこなかった。それがこの合宿に参加して、やっと実感が湧き、自分は勉強せねばならぬということに気がつき始めた。また問題となることを多くの人とともに話し合うと問題の焦点がはっきりして、考えていくときに非常に参考になるということを知った。

中でも最も心を打たれたのは、パネルディスカッションにおける福田先生のお言葉を聞いたときでした。先生が「師を求めろ」と云われた時には、ムチを打たれた気がし、合宿にきてよかったという気持を最も強く感じました。最後に、和

歌は心構えがそのまま出るといふことも痛感しました。といふのは班別の批評のときに、自分がめんどうだと思つて詠んだ歌をみごとに指摘されたからです。

(横浜国立大学 教 一年 深田 肇)

### 内心を吐露しあつた班別討論

緊張して参加した班別討論も回を重ねると意見もでやすくなり、ふだん、他人にもぞかせない自分の内心を吐露しあつたことは得がたい経験となりました。人間が心の内をみせようと、こうも親しくなるものかとあらためて驚いた次第です。たくさんの講義を聞くうち、よくわからないところも多くなりましたが、講義内容が自分の苦しい経験にあてはまる時、その巧みな、真実のお話は痛い程胸にひびきます。明日からはまた自分一人の生活がはじまります。『実行あるのみ』という木内先生のお言葉を噛みしめ努力を重ねる決意です。

なお、新しいしかも心のかよつた友人ができたこと、立派な先生方のお言葉をまじかに聞けたこと、そういう先生方に読むべき本の名を教えてもらったこと、これらは合宿にきてよかつたことです。

(神戸大学 経 一年 藤塚紳也)

### 一つの収穫

この合宿で、自分が何もわかつていないということが、わかつたことも、一つの収穫であらう。小田村先生の講義に非常に感謝したものの、その感激自体、全然自分のものとならない。感激を自分のものとする基盤が、出きあがっていないのであらう。どうして自分は純粹にそのまま受け入れられないかわからない。

(鹿児島大学 法文 二年 牛塚耕三)

### 右翼でも左翼でもない

合宿にくる前、ある友だちはあの人たちを右翼だといつていたことを思いですが、今、正直いって右翼でも左翼でもないことを確信しました。小田村先生をはじめ国文研の方々にはまったく清々しい、すばらしい気持を感じました。和歌でそのことは一目瞭然です。このままの純なる精神を持つてまっすぐ進んでゆくならば、決して変な方向には行かないと思えます。

ただあまり感情と情熱に走りすぎると、だめになる恐れがある。それと同時に、歴史はひととおりにいかないからといって、あまりにも過去を肯定し、いわゆる保守の態度をとるのもよくないと思う。今度の合宿で天皇制、憲法問題について

皆と腹を割って話したかった。これらを論じるとき、一般に知識のやりとりで終始してしまうので、皆避けたがるように思われた。過去の歴史に立脚しつつ、現在を未来に向かうに感じられた。しかし、得るところは実に多かつたように思う。

(大阪大学 工 一年 草地八寿郎)

### 心とは何か

この合宿では、心の交流を強調されます。この心の交流といわれる場合、心ということが僕にはわかりません。わからなくなったのです。諸先生のご講義、班別討論また人とのちよとした会話においても、相手の人がどんな心もちで、なぜそんなことをいうのかとばかり気にかかりました。また僕が自分の思いを語ったつもりでも、どうしても僕自身のそのままを語ったとは思われません。それなのに友だちは「分かった」と同情にも似た賛意を表します。そんな時僕は何といったら良いのでしょうか。よくよく人の体験を聞けば、やすやすと賛同することは僕にはできないと思うのです。

また人の言葉を借りて話す人を見ると、それだけでもう、その人の話を聞く気にはなりません。その人は、その言葉を自分勝手に解釈しているにすぎません。僕のこの感想文を読まれる方は、僕のことをわかるはずがありません。僕自身、

僕がわからなく、僕の思いのままを書けたとは思いません。

(亜細亜大学 商 二年 宝辺幸盛)

### つぎは「行動」である

各先生の講義が昨年では味わえなかった印象となつて胸に焼きついて残った。特に小田村先生の開会式の挨拶の言葉「同じ顔、同じ言葉の私たち」を聞いたときには体がじんとしびれた。また福田先生の講義は以前に著書を読んでいたためか、ほんとうに一語一語が胸に迫ってきた。よくいわれることだが、書いたものを通してその意をくむことは難しいし、誤解をまねく恐れがある。

やはりその人の真意はその人の生の声を通してでなくてはだめだ。合宿では人の話を聞くのは難かしいといわれる。今回は私自身の意志を伝える点をさしおいても、人の話を聞く点では十分できたと思った。その力はこのような合宿によって養なわれてきたのだと思う。私の今の思いは意見発表でも出された言葉「行動」である。

(神戸大学 工 二年 中木 繁)

### 甘ったれた感情との訣別を

合宿には志を同じくする友がたくさんいるし、それにすば

らしい先生方もあまたおられる。そして合宿の日程はといえ、たえず根本を問題とする。こうしたまわりの「順境」にあつてはじめて自分の心は安心して開展していく。そして合宿の感想はといえ、「精一杯努力した」と自分自身で思い込む。しかしこの中には極めて不愉快な甘ったれが自分の中にあるのを看過している。四泊五日という合宿期間をいかに充実させようとも、それが毎日の生活で意味をなさなければなんの役にも立たぬ。この甘ったれを克服しない限り、自分はほんとうの意味で雄々しく生きていくことはできないであろうと思う。

国文研もない、師も先輩もなければ友もない。残るのは自分一人だけだ。こうして他に頼ろうとするあらゆる甘ったれの感情と訣別しようと意志するときこそ、ほんとうの使命感も湧きいずるであろう。そして現在の甘ったれた友情もなくなるであろう。そのためにはまず第一に、一切の欺瞞と偽善を排さなければならぬと思う。それは苦痛を伴なうかも知れない。だがその苦痛をさけてきたことが欺瞞であり、偽善であつたとすれば、それは何としてものりこえなければと思う。この問題は現在の私に課せられた最大の、そして緊急にとりくまねばならない問題だと痛感するのである。

(早稲田大学 政経 三年 今林賢郁)

## 第十班

木内先生の言葉をかみしめたい

学校を出ようとする僕にとって、木内先生が今回、話されたことは、社会に出てから勉強していく上に、非常に有益なように思えた。まだ概念的にしか把握できていないが、よくよくかみしめて、考えてゆきたい。

(神戸大学 文 四年 寺川真知夫)

友らと別れるのが残念

できるだけ相手の心にくみながら、自分の思いを述べたつもりであつたが、それがしばしば、相手の心を圧迫することになった。長いと思われた四泊五日も、たちまち過ぎ去り、ようやく心のとけあえかけた友らと別れるのは、なんとしても残念でならない。

(九州大学 経 三年 片岡健)

国文研の方々の間でも討論を

文研の方々の講義の受け取り方というのが、完全に同じで、われわれは正確に理解している、というような感じが見

受けられたのが、ちょっと気にかかった。講義の受けとりかたというのは、多少はちがっていいはずではないか。いや多少ちがうのがほんとうではないか、と思った。つまり、討論にこられた国文研の方々は、われわれに、助言を与えるのみでなく、その人々の間でも討論をして欲しかった。最初から国文研の意見を正しいものとして、それをわれわれの方に押しつけるというような感じを受けた。ムードにのまれて、みんなが、知らず知らずのうちに、国文研の意見の方向へ近づいて行くような気がしました。

合宿に参加してよかった、と思う。解決された問題は少なかったが、残された疑問を大事にしていきたいと思えます。

(九州大学 経 二年 平山正憲)

### 裸になる勇気がなかった

合宿にきてほんとうによかったという、心底からあふれるような喜びがないのが残念な気がする。それは、人とのつき合いがうまくいっていなかったからではなかるうか。たしかに自分は、相手の立場を考えるまでの余裕がなく、裸になつてぶちまける勇気がなかった。しかし、ともすれば権力と財力にとらわれがちな、エゴイステイックな人間を見つめ、それに立ち向かおうという正義感のかたまりのような友と会い、人との相対的な評価で安心するのではなく、あらゆること

を、まず自分を出発点として考えて行かねばと思つたことが、大きな収穫であつた。

(東京工業大学 理 二年 内田啟彦)

### 一つ残念に思つたこと

班別討論で自分の意見がありながら、最終日の全体意見発表の場で意見を出せなかつたことは残念だつた。このような集りで意見を出せなければ、その自分の考えは頭の中だけの空論のような気がしてなりませんし、また、積極性があれば先生方が言われました言葉も一段と身につくのではないかと反省しております。

(亜細亜大学 経 二年 塩崎徳郎)

### 自分は安易な生活を送っていた

安易な生活を送っていて、なにも考えることなく過して自分自分に気づいたことが最大の喜びです。今後の生活においては、常に自分自身を見つめ、梅田さんの言葉ではないですが、「自分の気持は、一体これでよいのだろうか」と問いつつ、緊張した生活を送っていきたいと思えます。

(早稲田大学 法 三年 伊賀義昭)

## 参加者の真剣さにうたれた

合宿に初参加して感じたことは、参加している学生、一般の方々の、非常に真剣な態度だった。講義を聞いている時も、班別討論の時も、みんなの顔を見てると「やるぞ」という意気ごみがあった。私は、人生の生き方に新しい一ページを見つけたような気がした。

(鹿児島経済大学 経 四年 野元 博)

## 肌を通して体得したもの

この合宿で、私は話し合いによる相互理解ということを持た言葉の上だけでなく、肌を通して体得することができた。心から話し合い、一つの問題にとりくむ友だちの姿、互いに相手の言っていることを真剣に考え、真に理解しようとする姿、これほど美しくすばらしいものはない。真心をこめて相手の気持を考え、理解しようとする心からのつき合い、このことをこれからの生活に生かしてゆくつもりである。

(亜細亜大学 商 二年 皆月 隆)

## 今までの自己の考えに赤信号

この合宿において、もっと身近な人と心の奥底からふれ合うということ、われわれ日本人の立っている基盤、当然日本人として考えねばならぬ天皇制の問題、陛下のみにふれるということ、あるいは歴史とつき合うということなどが、もつとも重要な事であって、ひいてはそれがほんとうの意味での日本を守るということになると感じ、今までの自己独断的な考えに赤信号を得たことはよかったと思っています。

(神戸大学 経 一年 井上雅圓)

## これで終らせたくない

私は合宿の初めに、自分の防波堤がかたく、とても普通では破られないものだが、私は初めの誓いとして、自分からこれを開いて、みんなと心ゆくまで話し合うといった。けれど、もそのあとに、心の防波堤が現われては消え現われては消え、たえず自分を悩まし続け、これではいけないと思いつつ、今日合宿が終るのは非常に残念であります。けれども私はこれで終らせたくはありません。今まで頭の中に入ったものを、一つ一つとり出し、今までの考えをなおしていきたいと思えます。

(福岡大学 工 三年 古賀三郎)

## 問題を掘り下げた班別討論

この合宿ではいろいろ学んだと考えているが、特に自分のためになったのは真剣になって考えた班別討論であった。

講師の先生方が語られたことに對し、自分がどのようにうけとめたか互いに討論し、思索を深めあつていったことにより、日頃の私の思考方法が反省させられた。以前は「物は考えよう」と安易に結論を出して、しかもそれは真剣に心をこめて考えた結果出た「物は考えよう」でなく、怠慢で思考の苦しさをのがれる安易な妥協的な方便であつたからだ。重苦しいものであつたがゆえにいつそうためになった。また問題の掘り下げる段階が、私の結論を出す段階をも組上にのせて検討していったという点では、深く私の思考生活が開眼したのを覚える。臨席された国文研の先輩がほんとうに真剣でおごるところは微塵もなく、意見を出す人の心情を汲みとられていた姿を見て、ただ先輩が側に坐つていらつしやるということだけで、思わず衿を正さずにはいられなかつた。

この間の自分を考えてみると、くる時と比べて帰る時とでは、心にかかき重い塊のようなものを得たように感ずる。

(鹿児島大学 文理 三年 福岡利裕)

## 心がきれいに掃除された

私はまずこの合宿に参加して、私の心がきれいに掃除されなくなった感じがうけます。私の参加した意義は大学生として何を目標にするかということでした。その点私は満足なほど理解できたと思います。ただ問題は、合宿で知り合った友とあるいは同じ大学の人と支え合いながら、その目標にいかに向うかということだと思ひます。

私はこの合宿に一人で選択してやってきたことを誇りに思ひ、これからもずっと参加し愛国心をもつ日本人となりたいと考えています。(鹿児島大学 教 一年 水垂照明)

## 昨年以上のものを得た

今年の雲仙合宿において昨年以上のものを得ました。それは端的に申しますと真の学問研究の姿勢ということです。

旧来の日本の国の性質を呼びもどすことこそ、現在日本に課された問題であり、われわれ日本人が学問してゆく上の最も肝要なことだと思ひます。そういう考えを進めて行つて知り得ることは「真理を曲げて理屈に走つてはいけないうこと、真理は真理として素直に探求してゆかねばならない」ということでした。(下関市立大学 経 三年 梅谷道明)

もっと早くから参加したかった

この合宿にはじめて参加しただけに、あらゆる面において得ることばかりです。ほんとうに僕自身の精神生活に、表現が大げさかも知れませんが大革命が起こったようで、そのくらいにこの合宿から得るものが多かったのです。ほんとうに他の参加学生や諸先生方の真の人間味といいますか、情意といえますか、そういうものに直接触れて、ただただ自分がこの合宿に参加したのは、ほんとうに幸福だと思っています。どうしてもっと早くからこの合宿に参加しなかったかと思うとくやしくなりません。

(熊本商科大学 経 三年 古市左千夫)

ただすばらしかった

合宿教室に参加して自分が今まで考えていなかったようなことに接して、深く感動したということが自分の実感です。祖国日本のことや、人間としての生き方などを真剣に考えておられる先生方その他国文研の方々に、深く尊敬の念をいわずにはいられませんでした。

また班別討論などにしても、自分の意見を述べられる機会をつくっていただき、自分の欠点をも広くみんなの考え方を

聞くうちに気づき、現在の自分がいかに生半可のものか痛切に考えざるをえませんでした。

最後になんといっても、ただすばらしかった。また苦しかったけれども大いに得るところがあった。きてよかったという印象を強烈に感じました。

(明治大学 商 一年 柴田寛幸)

## 第十一班

素直な感情があふれてきた

学友の今林賢郁さんに、一年の時からこの合宿の良さについてうかがっておりましたが、当時は、まず何をおいても参加しようとは思いませんでした。と申しますのは、合宿案内に「日本人としての自覚」と書いてあったり、「天皇についての認識」とかいう文字を見ただけで、何か心にひっかかる気がしたのです。当時私は、よく考えもせず、日本人ということより、国際人という言葉に心がひかれていたからだと思います。一方自分の国を軽視するということはどうしてもできないという気持が同時に心にあっただのは確かです。

今年の早大紛争で、みずからの心から出てきた言葉に裏づけされない言動がいかに無意味なものであるか、いかに危険

なものであるか、また、真心の感じられない言葉のやりとりがどれほどか私たちの心を荒廃させていくかということを感じたことはありませんでした。この合宿にきまして一日とすごしていくうちに、今までの自分の心の中から追いついてきた素直な感情のようなものが胸いっぱいにあふれてきて、それが福田先生はじめ諸先生方のお話の中の一つ一つのお言葉によって、しっかりと裏付けされていくように、合宿教室をお開きくださった方々へ「ありがとうございます」と手をついてお礼を述べたいほどでした。また今までも知らぬ友との話の中で、あるいは和歌の中に友の素直な心を感じられて、自らも反省する最高の契機をそこに見いだした気がしました。

(早稲田大学 政経 三年 河原倫子)

### よかった慰霊祭

慰霊祭は初めての経験でしたが、何かなつかしいような、しみじみとした気持ちでいっぱいでした。ほんとうに多くの数えきれないほどのいのちにつながって、いま生かされている自分なのだと思わずに得ませんでした。心をこめて生きていきたいと思えます。

(玉川大学 文 三年 勝山啓子)

### 大事なものは実行に移すこと

第一に私が己というものをいかに捨てきれないでいるかというのを、和歌を通じて痛いほど感じました。それと同時に己を空しくするということがいかに難かしいかがわかりました。

第二に今までの私はうけうりの知識をよせあつめ、自分の意見として述べていたことに気付いたことです。今から先、私のすべきこととして大いに読書し、基盤作りに精を出したいと思っています。

第三に自分で良いと思ったことはどんなことでもいから実行に移して行こうと思えました。私はやりもしないでそのことを推測したり、あきらめてかかったりしていました。何よりも大事なものは実行に移すことだろうと思えます。空論に終らないよう心してかかりたいと思えます。

第四に懸命に考え、そして自分の考えを述べるといのはほんとうにすばらしく、楽しく、また苦しいと感じました。日程を終えた今思うことは、良い友を得て、心から話しあうことができ、ほんとうに合宿にきて良かったということだと思います。

(熊本女子短期大学 家政 一年 林しのぶ)

ものを見る目が開かれた

一番強く感じたことは、今まで何と自分が表面的、概念的にしかものを見ることができなかったのかということでした。ほんとうに心のこもらない皮相的な思想の組立てが、むなしいもので、実生活において何の役にも立たないものと感じました。そしてその薄っぺらな考えを持って得心していることはおそろしいことだと、心の底から感じました。

(福岡大学 薬 一年 工藤啓子)

頭の中が混乱している

今感じていますことは、頭の中が混乱しているということですね。四年生となって大学生活も終り近くなった今、いままでの学生生活を反省し、これからのことについて考えています。この混乱はこれからの私に大きく影響するよるうな気がします。

天皇統治というに関して、うろこがはがされたような気がしてうれしく思っています。

(第一薬科大学 四年 平下博子)

話を皆が聞いてくれた

この合宿にきてはじめて人に自分の思っていること、言いたいことを言ってみようという気になり、うまく言えなかったけれども、皆が聞いていてくれるということに勇気づけられ、何だかともうれしくなりました。

天皇制の問題にしても、今まで何とか考えないでおこうとしていた自分、ことなかれ主義でいた自分を恥ずかしく思いました。この合宿で何かはっきりしないけれども、一つのもののみつけ出すことができたような気がいたしますし、はじめて心の通い合う大勢の友だちを得たことは、何とっていかかわらないほどうれしいことです。

(共立女子短期大学 一年 山田苑枝)

ほんとうの生き方を求めていきたい

四泊五日の合宿を通して今までずっと持ちつづけてきた考えを、もう一度じっくりとふりかえる機会を得たことを感謝しています。感情におぼれたり、雰囲気にもまれることなく静かに自分をみつめ、この合宿で教えていただいたことを手がかりとして何とかほんとうの学問の方法、生き方を求めていきたいと思っています。ご講義をされた先生方がお示しに

なった御本を読むことから始めるつもりでいます。自分の中にしっかりと基盤を築くこと、このことが今私には大切なことに思われております。

(津田塾大学 文理 一年 友清葵子)

やさしく強い人になりたい

今までの自分は、やさしく弱い自分であったような気がします。しかし、その弱さは弱さとして、自分の短所ではあるが長所でもあると認めていました。そんな自分でも、弱いということを認めることにより、何とか生きられると思っておりました。でも今、やさしく強い人にならなければ生きていけないという気持です。最後に聞いた福沢先生の教え「独立の気力なき者は国を思ふこと深切ならず」という言葉を痛感し、独立の気力なき者は国を思う資格はないのだという気がしております。

(西南学院大学 文 四年 内野敏子)

人生の忘れ物に気づく

昨年参加して感激し、学んだことがより確実に心の中に培われた気がします。昨年度の姿勢の方向づけのようなものが捕えられたと思い、後は精一杯行動してみようと、夢中で過してきて、途中でずいぶん忘れ物をしていることに気付いて

いました。その忘れ物を、人生経験豊かな諸先生のご講義に触れて、改めて切実に感じ知りました。小田村先生のおっしゃった「つき合い」という言葉をかみしめて、脱線しそうなになったら講義ノートを開き、これから進んでいきたいと思えます。

(西南学院大学 文 四年 大村圭子)

赤ん坊が母親をみつめる眼をいつまでも

四日目のご講義にもありましたように、常に「つきあう心がけ」についてよく考えながらこれからの生活で得たいと思えます。赤ん坊がああ澄らかな澄んだ目をもって母親をみつめるような、そんな気持、心がいつでももたらはんといいいなと思います。また、求めるように努力したいと思えます。そして合宿でできた友だちを大切にして、これからも一生懸命励んでいきたいと思えます。

(学習院大学 経 二年 小田村静代)

つき合いの真の一コマを見た

全体意見発表の時の司会者と小田村先生、長内先生、川井先生その他の人との話のやりとりによって、人と人とのつき合いの真の一コマを見たような気がしてとても感激してしまいました。意見発表が何かかた苦しい感じがして、素直に感

じたことを発表できないような雰囲気を感じになって、これではいけない、もっと皆が話せるようなものになんては最後のしめくりとしてせっかくのこの意見発表が皆の心に感じられない、というように真剣にこの会のことをお考えになつておられたから、司会者の足りない点、また先生のお考えをはっきりとお述べになられたのだと思います。もし私でしたら、たとえそのようなことを感じたとしても、勇気がないから、また自分がにくまれたくないからきつと言えないだろうと思います。しかしこれではいけないのだということがわかつたような気がしたので。あの時の小田村先生のご発言がなかつたら、司会者の方もまた意見を述べたいと思つていた方々も、また聞く立場にあつた者も心にすつきりしないものを残さずにはいられなかつたと思います。司会者の方を攻撃されたのではなくて、会のこと、全体のことを思われて、また司会者の方の立場をほんとうに考えてのご発言であつたと思うのです。あの時の言葉のやりとりにも真の人と人のつき合ひというものを感じました。何か自分に一つの解決への道が開けたようで、ほんとうにうれしく思つております。

(東京女子大学 文理 二年 久木ゆり子)

## 行動は心の反映

一般に大学内でうける講義とは全く違つた諸先生方の御講

義に、私は今のところ胸も頭もいっぱいです。どの先生のお話もひとつひとつが行動をとれない得るものだったので、こんな心に響いてくるのだと思います。この合宿で大きさに言えば、私は生まれ変わるような気がしました。それは福田先生のあくまで自分にきびしいお姿がこの上なく美しくみえたからです。そして行武先生とともに生活し、今までの理想をまのあたりに見て、決して自分を甘やかしてはいけないと思ひました。先生は全くおのを捨てて生きていらつしやると思ひます。そして先生が努力して悩んだのち、小我を捨てていらつしやるということ。いっそう心をうたれました。自分を甘やかしてはいけないということとはとても難かしく、極限を考えると、いったい何のためかわらなくなるけれども、これはきつと今まで考えていた幸せと異なつた幸せであろうということ。想像できました。そしてこの幸せはいつもでもしみじみと心へのこり自分の心を太らせていくような気がいたします。この合宿を通じて得たのは人の行為が最も心をうつすということです。言葉は頭の中で考えて出るけれど行動は心の反映だからと思ひます。

(神戸女学院大学 英文 一年 足立啓子)

## やさしさの中に雄々しさを

五日間終つてほんとうに胸がいっぱいです。初参加の気持

で参加しようと思っておりましたのに、班長という立場になり、至らぬ自分を励まして五日間、ただ一生懸命やりました。最初なかなかうちとけなかった友だちが、二日目の夜からぐっとうちとけ出して話はずみほんとうにうれしく思いました。このような班のこと、またご講義の内容等で頭がいっぱいです。オリエンテーションの時も、自分でもほんとうに貴重な経験をさせていただいたとうれしく思っています。私の拙ない話をいっしんに聞いてくれる友、また和歌に詠んでくれる友までいて感激しました。福田先生は女子班にいらして「女性はやさしさの中にも雄々しさを」とおっしゃいました。強く心に残っています。外にもかみしめなければならぬ言葉やお話がたくさんあり、少しづつでも勉強したいと思っています。

(東京女子大学 文理 三年 梅田咲子)

### 日本人としての自覚を深めた

今年で二度目の合宿を迎えた。去年の真剣な何か姿勢を正さずにはおれないような雰囲気感激して一年たち、もう一度合宿にきてみよう、感激をもう一度確かめたい気持ちでやってきました。去年班長から歴史とは何かと聞かれて、わからないまま彼女から説明をうけましたが、よくのみこめなかった。それが今年になって統一された思想となって私の心に銘

記され、去年よりいっそう日本人としての自覚が深められたような気がします。

(九州大学附属病院 杉本行子)

### 天皇様はぜひいてほしい

家においてむだな時を過ごすより、福田先生のお顔を見たい程度の気持ちで初めて参加しましたが、思わぬ精神的栄養を与えられ自分でもどう処して良いかわからず迷っております。いいことはたくさん教えて気づかしてくださってけれど、さて今から私はどういう風にして少しでも自分を高めていけるか。家に帰って一つづつかみしめてみたいと思います。ただ言えることは、日本という国の中に精神的な意味で私はいれたということ、今までおいでになってもそうでなくても関係ないと思いついていた天皇様が、本当にぜひいてほしいと心から思うようになったことです。四泊五日くらしでみて、いろんな友からたくさんのお話を学んだのもすごい収穫でした。かみくだくように話す友、大きな目で物事をみられる友、言葉ではなく態度ではっきり示され、自分のいい加減さが胸にしみてわかりました。

(青山学院女子短期大学 英文 二年 満本万里子)

感動に酔うだけではいけない

日本の情緒の一端が体験的に学びとれたことは非常に有益だった。しかし、女子班に特に顕著だったのかも知れないが、その情緒に触れた感激のあまりの強さに、実生活の中にその感動を生かし、真の日本人として実際に生きていこうとする心構え、または、気迫にまで感激が転換されないままに合宿期間を終ったのではないか。その後の一年の文集などを通してのつながり合いにもその方向への変化が見られず、結局感動に酔い、雰囲気を感じた限りで進歩がさして見られぬまま、翌年の合宿を迎えるという傾向があるのではないかと思われた。先に『日本の情緒』などと簡単に書いたが、今の自分の心境では単に今までの自分のやはり情緒枯渇気味の学生生活、精神生活にもう少しうるおいだけはもたらせるのではないかと思われる。一般的情緒としては体得できたが、常にその情緒に住む、さらに大きく絶対との合一を体得する方向へはまだまだ非常に遠いし、はたして具体的修業方法をもたないと思われるこの会の行き方で、そこまでゆけるのか疑問である。(お茶の水女子大学 文 三年 松本明子)

心が明るくなった

日本の悲観的なことばかり身近に聞いてがっかりしてしましたけれど、一応水準に達した日本はもう独自の大和民族らしい生活をしてゆけばよいと思うと、とても心が明るくなりました。先生方のご講義を聞いて自然に郷土愛というか愛国心がわいてきました。福田先生のご講義で「学問のための学問、社会のための学問、国家のための学問」と学問について導いてくださったことがとてもすばらしかった。

「封建的な日本」や「天皇制の日本」と悪しざまにいわれてきたことを再考して、その中よりよさをとりもどすこととはとても大切だと思いました。そのよさこそ日本的だとも思いました。けれども、暗い差別的なところもどってこないかと心配です。とにかく日本はすばらしいと自然に思えるお話をたくさん聞いてよかったです。

(同志社大学 文 一年 江畑寿美子)

私の人生で最も大きなできごとだった

心から国を思い、かつ良識ある態度で考えておられる立派な人々のもとで五日間を送ることができたことは、私の人生で最も大きなできごとと確信しています。学生としてあるべ

き姿、人間としての基本的態度を学び得たことは、これからの生活に最大限に生かしていくつもりである。人間の奥底にある魂の叫びに実感としてふれた気がする。この実感を常に思いだし、その感激を持ち続けていきたい。

考えることの基本的な出发点を与えられたのだから、これからは私自身の問題と思う。生まれて初めて心から真実を吐露することができ、班別討論での友の真剣な顔を忘れることはできない。人に心から打ち解け、話し合ったこの五日間の生活は、過去の生活のどこにも見当らない。

(長崎大学医学部附属看護学校 三年 延近史子)

### 人格にふれた先生方との話

私は問題意識がたりないのか、ご講義がむずかしく感じられ、その後の班別討論で自分も皆の中にとび込んで話せるということができなかった。しかし、講師の先生方がわざわざ班室までおいでくださって、ま近く先生のお顔、お声からにじみでる人格にふれることができてとてもうれしく思いました。服装とか外見によって人間の価値が付加されると思っておりましたが、われわれといっしょになって合宿にのぞまれる夜久先生や川井先生や小田村先生をみて、私はふしぎとその情緒にうたれました。人と人とが接触し、話すことによって意思が通じ合うことを感じて、これからの自分の生活にど

んなにかプラスになると思っています。

(玉川大学 文 一年 畑野純子)

## 第十二班

よりよき合宿になることを願って

良い感想は出せませんが、皆様がそれをやるでしようし、私は悪い面の批判を行ないます。このことが次の合宿教室の参考になれば幸いです。

一、よく「時間がないから……」と言われますが、徹底するようにしたらいかがでしょう。

二、班長クラスの指導方針が決まっていらないように思う。明確にすべきでないでしょうか。

三、中途退場の清水さんのその後の処理のことについて。

少なくとも電報をうち、場合によれば自宅まで出むぎ、ご家族の方へいきさつを説明することが望まれます。

(皆川経営研究所 荒巻哲朗)

本式に考えてみたい

四泊五日の合宿は、見知らぬ人々と思ひどおりのことを話し合うことができ大そう楽しく思いました。

この合宿がどのくらいためになったかということについては、全体感想で誰かいわれたように、非常なもやもやとした気が心の中に満ち満ちており、自分もとにかく本式に考えしてみようという思いにうたれております。

(島原市立第二中学校 井上信一)

### 自信がついた

この合宿に参加しての収穫は、自分の精神が決して違っていたいなかったという確信を得たことである。

すなわち私の学生生活と社会(社会に出、わずか四ヶ月あまりですが)を通じ自分なりに反省してきたわけでしたが、その学生生活に得た精神(だれとでも膝をつき合わせて話しあえる)が今の職場においてもためになっているなという確信をえ、今までの不安がなくなり、今後への自信というか方針というものができたということである。

(株式会社増田商店 重松憲一)

### 会社の命令で参加したのだが

正直に言えば、私は会社の命令によりこの合宿に参加させられたのですが、しかし私は「いったん合宿に参加するからには何かを必ずつかんで帰ろう」と考えて、この地に向った

のであります。私たちの班は皆同じような事情によって参加した人でした。その点において私たちは学生の班あるいは社会人の他の班とは、きわめてちがった条件にあったといえます。しかし私たちはともに語り合い、ともに心の奥底までさらけ出して打ちとけ合い、ともに学んで、五日という日々が経った今日は何かを学びとったものと思われまます。私自身もその通りでした。

私たちは、毎日非常に多くの人と接するのですが、人に接するに常に誠意を持ってすれば相手は自から理解してくれるものである。そして人とつき合うことこそ生きる道であるということを改めて認識しました。今までもそうした気持でしたが、この合宿によって、私の考え方が正しかったことが確認されうれしく思います。

(株式会社岩田屋 古賀 彰)

### 講義の内容にまさるもの

私は講義の内容にも得るところ多くあったのですが、むしろ講師の方の態度、それから合宿を運営される国文研の方々や学生諸君の態度の中に、きびしさと真剣さを感じとりました。いままで真剣に考えることなどめったになく、あつても自分のことばかりでした。しかし、私たちにはいい加減なことで妥協してはいけないものがあることを知りました。

(福岡県立香椎高校 田中利一)

## 物の見方、考え方を知った

私は予備知識もなくこの合宿に参加させていただきました。講師の方の話もあまり理解できなかったのですが、要は、人間生活における物の見方、考え方等の基本態度ではないかと思えます。帰りましたらこのことが実行できるように努力したいと思えます。

(株式会社白屋 長田美津夫)

## 要は真剣に考えること

この合宿教室に参加して得た収穫は、われわれはすべてのことに對してもっと真剣に考えるべきであるということである。私自身、あまりものを考えるということをしていなかった。天皇問題にしても、また建国記念日にしてもそうである。結論がどうであろうと、また結論が出なかつたとしても良い。要は真剣に考えるということである。この一つを得ただけでも、私はこの合宿に参加したことを良かったと思っている。

(株式会社 浜田組 梶 英志)

## 真の教育とは個性をつぶすこと

参加してよかったと思う。無事日程が終了しようとしている今、心の中に満ち足りたものを感じている。

諸先生方のお話はそれぞれ得るところが多かったが、中でも福田先生が「真の教育は個性をたたきつぶすことである」とおっしゃったお言葉は、教師である自分の心に突き刺さるほど強い印象を与えた。このお言葉を胸に真剣に自己を練磨していきたいと思う。そうして、次代を担う生徒たちを正しく、おもいやりのあるしっかりした青年に育てていきたいと思う。

自分自身の未熟さを思い知らされた五日間であった。

(長崎県立島原商業高校 宮崎金助)

## 反省の機会を与えられた

今回の合宿で何を得たのか、いまだに分かりません。学生、社会生活を通じて、私の知っていたのは一方的なある思想でした。そうしてその思想を、自分の思想として確立しつつあったのですが、こういう研修を受けたことで、いい反省の機会が与えられたと思う。

(長崎相互銀行 井石則雄)

和歌創作はためになった

この合宿で、今までの自分の生活が安易であり、読書が足りない（特に専門書）ことを痛切に感じた。今後もこの体験を守り自分の考えをしっかりとしたものにし、思想や、生活の中に入れて行きたいと思う。また、和歌の創作は日本の古くからあるこういう物への理解という面でたいへんためになったと思う。

（長崎相互銀行 江口英昭）

実行に移すメドがついた

参加するたびに心の琴線に触れる何物かがありながら、不安が絶えなかったが、今回の合宿でそれがとりのぞかれたように思います。学問は鍛え上げられた常識であるという言葉、自分をぎりぎりのところまで推しすすめてみる、という体験、それがつき合いの基礎となるということを御教示いただき、ほんとうによかったと思う。自分の求めんとするもの、それはきびしい試練に耐えてゆかないとだめでしょうが、今度はそれを実行に移すメドといったものがついたように思う。しっかりとやってゆきたい。

（鹿兒島興業信用組合 伊集院 豪）

心の指標となった

木内先生のお話の中で「憂うべき状態を打破するためにはとにかく実行することである。実行するに当って制度がどのようになつたらよいか、現在どのようになっているかを考えないと自分が分からなくなる。何も実行しないで政治や社会制度等を非難するな」という言葉を聞き、非常なフアイトがわいてきました。自分の求めるすべてではないにしても、心の指標となった点で大いにプラスになった合宿であったと思っている。

（株式会社高田工業所 永渕 徹）

共鳴できぬ点もあるが

個人の意思での参加ではなかったが、私自身確かに参考になるものがあり、得るところがあったと思っている。合宿参加で参考になったことは、元来の私の考えを今一度再確認できたという点であり、たとえば日本人としての自覚・歴史に対する姿勢、人との交り等々である。国旗掲揚の体験一つをとってみても、私にとっては大きな意義があった。また慰霊祭にしても、たとえば、夜久氏が詠う和歌が、山にこだまするときの感動というものをそのままに受け入れることができた。

### 第十三班

しかし、私は、この会全体を受け入れるということとはできない。共鳴するところもあり、疑問をいだくところもあり、また拒否するところもあった。

(株式会社岩田屋 時枝養一)

#### ことばを大切に

会社の命で急に出席することになり、何も準備していなかったので、初日、二日は何もわからずまごついたが、三日頃目よりやっと分かりかけてきた。今では、はじめのもやもやとしたものもすぎ去りました。

どんな講義を聞いたか、また、どの先生が話されたかよく覚えていないけれども、その中で得た内的なもの、精神的なものだけは大切にしていこうと思う。

なお国文研では、「言葉を大切にすること」を強調するが、その国文研の会員のなかに、ぞんざいな言葉を使われる方があった。たとえばわれわれが講義中に私語していたら、「これは当然悪いことだが」「話をやめんかね」と言われたが、これでよいのであろうか。

(宮崎トヨタ自動車株式会社 成田善樹)

#### 心を新たににして

合宿に参加した動機は「行って話を聞いてこい」式のものであったが、今は勉強になったということである。私は現職が事務屋のため、心を堀り下げ、事象を見つめる関心がなかったが、この五日間の講義、あるいは生活において、大いに認識することができ、心を新たにし、私なりに開眼できた次第である。講義はいろいろの内容を持っていたが、この一貫して流れているものは、歴史に付きあえ(みつめる、かえれ、もどれ)ということだったと受取っている。

(熊本市立一新小学校 松枝幸三郎)

#### 理論よりも接触を

私は今回の合宿生活で、三つのことを学んで帰れることをうれしく思う。「人に接して、活潑なるは飛鳥の如く」の福沢諭吉の言葉。

人間は歴史を通じて、歴史の一時点で、位置づけられるべきである。

すべての物事の相関関係と無限の世界へのはてしない試行

が、人生であり、私も人生に対する今後の考え方を真剣に考えたい。

たしかに人間関係は、スネークのようなものかもしれない。理論のたくみさよりも、接触によるところが大きいのである。ではなからうか。そこから、同胞感が生まれてくるのである。

(吉川工業株式会社 百崎末夫)

先生と呼ばれるのが恥ずかしい

この合宿に参加するのは二回目である。一回目はただ感激し、何か大いにやろうという気持ちで帰り、いくらかは自分では熊本市の教育のために力を尽したような気もするが、今は何か学生諸君に詫びたいような気持ちである。自分としては、あんがい立派な先生だ、ぐらいに思っただけで教えてきたが、ほんとうは何を教えたのだらうか。なにも教えてきていない。

その自分が先生あるいは師と呼ばれることで、とても「恥ずかしい」「すまない」という気持ちである。しかし、それだけにこれからの私の仕事の中で、また私の精神生活において、取り返すようなつもりで精進したいと考えを新たにしている。情性に流れがちな日頃の生活の中に涙の出るような心の躍動を感じたこの合宿、やはりきて良かった。私の一年間の中で一番心を練り培かう時になった。

(熊本市立竜南中学校 松浦良雄)

力強い指針を与えられた

国文研の、運営にあたる心づかいを強く感じ深く感謝しています。学生ともどもに日本を見直すことができ、混乱していた教職のあり方、態度に、大きな力強い指針を与えられた感を受け、明日からの励みにいそしみたいと思う。慰霊祭はことに感銘を受け、忘れられていったものを思いださせてもらった。視律のきびしさの中に流れる精神のもち方にありがたいものを感じる。スリッパの件にまでの心配りも印象に深い。しかし、今後もっと生活態度、人に接する態度、ことばづかいにも十分の指導を願う。和歌のありがたさ、和歌を通して天皇の理解、今後の勉強を続けたい。

(福岡県川崎町立川崎中学校 国松茂雄)

緊張の連続から得たものは

緊張の連続であった五日間で、私が得たものは次に掲げる物の見方、考え方に関する四つのことからであった。それらは、講義室で得られた三つのことごとと、班員と起居をともしした班室において得た一つのことごとであった。それらのことごとを次に列挙することによって、感想文にかえさしてもらおう。

講義室にて得たこと

一、すべて絶望から出発せよ。

二、すべて行動あるのみ。

三、物すべてが、その「顔」を有する。

班室にて得たこと

「他」を知ることによってのみ「自」の成長が得られる。

(長崎県立島原高校 川山 勝)

きびしさを呼び起こされた

忘れかけたきびしさを呼び起こしてくれた感激で一ぱいで  
す。

この合宿で最もうれしかったことは、現在まで自分が抱いていた職務上の信条といえますか、信念がまちがっていないか  
ったことを確かめることができました。

また合宿に参加するまで安易な生活を求めていることも事実  
です。これを機会にはづかしからぬ人生を送ることができ  
るよう反省し努力したいと考えています。

(熊本市立藤園中学校 宮永高照)

先生方の敬虔さに教えられた

この合宿教室にはじめて参加したものであるが、深い感動

と共鳴を覚えた。それは「人間としての姿勢」である。いと  
も当然というべきことを忘れ、自然であることよりも何か虚  
栄にみちたものを追う傾向の多い社会の中で、静かに自分た  
ちの姿勢がどうなればいけないかを反省し、謙虚な態度で  
自分たちの生き方を歩こうとすることである。

講演をしていただいた一流の講師の先生方ですが、ほと  
うに人間的に敬虔で、責任感つよくほんとうに真面目な態度  
であられることについても考えさせられることがいっぱい  
でした。人につき合うつき合い方、歴史へのつき合い方、和歌  
へのつき合い方等、私の生活にうるおいをふきこんでいた  
きました。

(熊本市立白川中学校 勝木家安)

涙が出てしかたがなかった

何というすばらしい合宿教室だろう。各講師の明快な自信  
ある講義、学生のみなさんの情熱のぶつかり合い、すべて見  
るもの聞くものに感動をおぼえた。たびたびの感激に何かし  
ら涙が出てしかたがなかった。

先人の偉大さにただ哑然とし、自分自身の無情熱に反省す  
るばかりであり、うれしい思いであった。歴史の中に流れる  
精神の体得、歴史の捉え方や見方、感じ方、すべて心に深く  
銘記しなければならぬ。

今後は今回の貴重な体験を胸に秘めて、さらに自分にきび

しく働きかけ努力しなければならないと思う。

とくに各先生方、国文研の方々の絶大なかけの力を思うごとくに頭が下がり心から感謝申しあげます。

(吉川工業株式会社 佐藤定吉)

一言一句が宝石のよう

合宿を通じて、木内先生の講演に特に感銘を受けた。やはり社会に大きな影響力を持ち、それだけの実行力をそなえていらっしゃる人の言葉だけに、一言一句が宝石のような感じがする。班別討論では、学生と違っておのおのが自分の「から」に閉じこもる傾向にある(特に私の場合)から、あまり得るところはなかった。(長崎県立島原高校 永田徳穂)

青年諸君に対するお願い

これは私の青年諸君に対するお願いです。自己の人生をいかに意義あるものにし、社会のために、いかに有用な人物であり得るかは、その瞬時の状況を適確に判断し、「人に負けない」判断、効果を上げ得る人であることです。そこで最も必要になるものは、自分が成長していくことと、行動に移せる勇氣です。環境すなわち自己以外のことに不平をいわず、まず自分の成長を考えてください。自分が立派な人になるの

です。そうしてあとは、超越した勇氣をもってください。

最後に、まずこの合宿を自分のために役立てること。すべてそれで解決します。(福岡工業大学 早田二彦)

国文研の人達と語り合いたかった

班内においては、みじかい期間に、知り得た班友と、心のつながりを大事にしながらか、明日の生活に帰りたいと思います。ただ残念なことは、国文研の人たちを全員特に運営委員の方々を知り得なかったことです。と申しますのは、小田村先生のいわれる言葉にそぐわない人が、中に見えたこと(言葉、態度、動作)これは、私の一方的な判断であって、その人と心が通っていないからと思ひ、時間が許せば、ぜひ話し合いたいと考えていたものですが、その時間もなく、終りそうです。来年は、ぜひそのような話し合いを、ひざをまじえてしてみたいと考えております。

(協栄管理株式会社 荒木義一)

## 第十四班

同じ目的、思想を持つ者として

国文研と同じ目的、思想を持つ私として、学生が正面から天皇に取りくまれる勇氣（信念）に感服しました。なお小田村先生が非常に気にしておられました。この種の思想を持つ団体の人にありがちな（真面目であればあるほど）固苦しさ、特殊な雰囲気となつてやはり感ぜられます。この点はこのから大いに努力しなければならぬ。われわれの課題と思ひました。総合的にいって、その努力、その内容に大いに感激しました。戸川先生の方法論は私たち思想者の最も大切にしなければならぬことと思つています。

（会社員 遠藤太嘉志）

学び得たものは無限

四泊五日で学び得たものには無限なものがある。学問の不足や、静かに自分を見つめるとき、教養の低さなどである。日本に生をうける者として、もつともつと歴史にふれ、正しい生き方を身につけなければならぬと思ふ。

澆刺とした学生諸君と寢食をともにし、ともに学び、とも

に語つた中に、新たな人生觀が湧いてきたようだ。この精神を帰省後、全職員、全生徒に及ぼし、将来明るい日本の建設にあたりたい。

（熊本市立京陵中学校 岩崎良一）

国を愛することは時代おくれか。

イギリスの政治評論家ビーター・ワードは「日本が受けたのは、敗戦の傷だけではなく、占領軍は、意識的、計画的に日本の伝統を破壊した。さらに愛国心を軽侮し、国や天皇を愛することは、時代おくれだといった。そしてそのようにしむけた」というようなことをいつたのですが、私はまさにそのとおりだと思ふのです。国文研のみなさんが、そのような風潮を打破し、健全な祖国再建の道を歩むべき実践活動を行なつていらつしやることに、厚く感謝し、意を強くしているところがあります。特に和歌の創作と、夜、行なわれた慰霊祭は、有益なものだと思われました。こうした実践活動を伴つたこの合宿は、ほんとうに有意義で効果的だつたと思ひます。

（熊本市立城西小学校 吉弘憲雄）

日本に生まれたよろこびを知る

現今の日本の良識といわれる福田・木内両先生のご講義、ならびに国文研の先生方のご指導により、深く自己の蒙を啓

いたことは大きな収獲であった。常に現時点に立ち、沈思して心眼を開くには、日常におけるきびしい自己練磨により生まれることを自覚し、謙虚な態度で物事の魂にふれ接する眼を常に自己に内蔵することが大切であることが痛感された。

世界に比類なき輝しい伝統を有する日本に生を享けたよろこび、その底流にある祖先の魂、これらをこの合宿で強く自分のものとして受け取ることができた。

戦後混乱した中に日本人としての自覚がややもすれば見失われ、喪失せんとする現今、勇氣と自信をもって日本の伝統を受け継ぎ、世界的視野に立って生々發展せしめる覚悟を新たにし、今後自己の職場を通じて、行動的に教師としての使命遂行に邁進したい。

(熊本市教育委員会 兼田 功)

### 日本を守るものはわれわれ

今日まで二十年間教壇生活をしながらいかに自己をみつめる目がなかったか。過去の自分の生活をもとにして子供たちだけに、君たちはどうしなければならぬ、というようなこと、またある特定のイデオロギーのみを教育してきたことなどがいかに影響が大きいかやまれてならない。しかしある学生の教育行政の批判を聞きいくらか安堵したが、日々に進歩する子供をみつめるときさらに新たな決意がわいてきた。

自己をみつめ自分を反省することこそ教師としての第一の

資格であること。過去をふり返って歴史とつき合えば自然と日本人としての方向がわかること。日本に生を享けた喜びを知ると同時に、日本を守る者はわれわれであることを深く知らされた。

(熊本市立藤園中学校 片山生志)

### 教え子よゆるしてくれ

現在教育の正常化が熊本市において非常にさげばれている。この正常化なるものの正体が合宿前までは十分理解できなかったのであるが、講話の中で歴史観、教育観、人生観なるものの考え方の足らなさを指摘され、背に冷水をかけられた思いがした。戦前の教育を受けた私がどうしてこのようになってしまったのか、日本人としての誇りを失ってしまったのか、まったく教育者としての資格のなかったことを反省せざるを得ません。

戦後二十年のブランドを、失敗を取りもどすために受けた教えを種々な面で生かしていきたいと思う。

子どもよ、教え子よ、ゆるしたもれ。

国文研の発展を祈り、共に力をあわせ、もっともって人間らしい人間、日本人らしい日本人を作っていきたいものです。

(熊本市立川尻小学校 上村清彦)

この体験を広くわかちあたい

一、参加をして

すばらしい機会をあたえられ、なんともいえない雰囲気  
接することができたことに感謝申し上げます。

二、講師に接して

すばらしいお話を聞き、日本一流の先生方のけいがいに接  
して感激しました。頭の中の整理はできていないが、得たも  
のは貴重なものばかりで、いつかはこれが実行され行動とな  
って実現すると思いい、そのつもりで頑張っていきたい。

三、日本人として

もっと日本の歴史につきあい、そして日本人としてのほこ  
りをもって今後行動したい。同志を集めて邁進したいと思  
います。

四、わかちあい

今回の合宿で得た体験、学んだことを自分一人のものとし  
ず広くわかちあたい。立派なつきあいをして日本人とし  
ての自覚をもつ人を一人でも多く集めるよう努力していきた  
い。

五、最後に

本部役員の皆さんの綿密な計画運営その他に心からお礼を  
申し上げます。  
(熊本市立向山小学校 真佐喜 親)

この感動を生活に

意欲はあっても何かとけこめそうにないと感じた最初の日  
であった。しかし、一日一日の時間経過ごとに全くこれまで  
の心境と違ってきた自分を省み、その変化に自分自身驚いて  
いるのが今の気持である。何がそうさせたのであるか。一  
つ十分な配慮をもって組まれた日程内容の充実さにもよ  
るであろうが、むしろ受け身であった今までの自分の中に、  
「まごころ」のつきあいの境地が開かれたためだと思う。

パネル・ディスカッションの場での発言の中にこめられて  
いる念いに、いくたびか涙し、慰霊祭の中になきみ霊とまみ  
えていることに感動し、戸川先生のご講義の中に、どうして  
も目頭の熱くなる感動をとめることができなくなった自分。  
これは単に感傷からの涙ではない。全く異質の「まごこ  
ろ」にふれ得た感動であると思う。

「感動はこわれやすい」が、これを持ちつづけ、さらに強  
いものとして心に受けとめ、発展させていくためには、それ  
に応じた自分自身の努力が必要である。職場での多忙さに  
負けてしまうことなく、基本になる心がまえを、ここで学  
びとったものを充実させていきたいと念願する。

(熊本市立力合小学校 磨井敏春)

## 同胞の死を無駄にしない生き方を

私は、戦時中、台湾の特攻基地におりましたが、同室におりました海軍予備学生出身の特攻隊員（生島少尉）が、出撃前に私に、米国が空からまいた降伏勧告のビラに書いてあった、日本内地における母親が子の手をひいて強狩りをしていける絵をみせ、泣きながら、「一度は自分もこんな平和な生活をしたい」、といって死んでいった。この特攻隊員の述懐していたことがいまだに目に残っている。私は日本を真に平和にするのは教育以外にないと思って、教育界にとびこみました。そして、これまでただ平和な家庭を築くことを目標に女子教育をしてきましたが、この合宿にきて、私のこれまでやってきた教育が決してまちがっていなかった、ということの自信をもつとともに、今後の生き方にいろいろと指針を与えてくれたようです。とくに慰霊祭のときは、生島少尉の霊よ安らかに、安心して日本の将来を見守っていてくれ、と心から祈りました。今後はこの合宿の経験を生かして人生をより深く掘りさげてみつめ、平和を守るため勇気をだして将来の日本の母体というべき女子教育に専念してゆきたいと思えます。この合宿で何よりもうれしかったことは、われわれが苦しんだ頃の時代と同じ年代の学生たちが、日本の将来に向かって真摯な態度で研究しているということでした。ほん

とうにたのもしく感じました。大戦で幾多の散っていった同胞の死を、決してむだにしないような生き方をしなければと心に固く決意しました。

（福岡筑紫女学園中学校 田村常武）

人間は自分一人で生きているのではない

小田村先生の「われわれ人間は自分一人で生きているのではない」の講義に非常に感銘を受けた。人と人とのつき合いの深さ難しさを感じるとともに、なさねばならぬことが心の中にはつきりとしてきた。

私は今まで、自己を拝み、親、先祖を拝み、人を拝み、物を拝み、両陛下を拝むことを二十年間続けてきたが、そのことがまちがっていなかったことを、この合宿の中で確信することができた。

（熊本市立碩台小学校 本庄茂道）

インスタントな考えでなしに

五日間のこの合宿を終えた今、ほんとうに来て良かったという気持ちをもった。このような有意義な機会に恵まれるということは、めったにあるものではない。ことに私のように、小学校に奉職し、日々児童と接している者にとっては、ともすると、その日その日の教育技術のみに汲々として、人生の

根本の道ということに思いをいたすことを忘れがちである。しかし、その道をしっかりと見直し、また、自分の住む日本をよく見つめるといふことは確かに重要なことである。

私は、この合宿において学んだことが、そのまますぐにここからの生活に役立つというのではなく、すなわちインストールな考えではなしに、これからの学習や処世についての示唆となつてゐることに感謝しつつこの雲仙を去らうと思う。

(熊本市立城東小学校 神瀬克巳)

## 第十五班

この貴重な体験を日々の生活に

現在の民族の危機の根ざす病根は、歴史とつきあう態度の無視からひき起こされた当然の帰結であるといふことの確信を、今度の合宿において得た次第です。

この貴重な体験を日々の生活に行じてゆくことだけが私に残された問題であると信じています。具体的に諸先生の御話で強く心を打たれたことは数々ありますが、要は、それらを糧にして国のいのちにつながるよう、念々刻々の覚悟といたし行じてゆくのみです。

(福岡県糸田町立糸田中学校 木森俊輔)

日本の教育の源流をさぐりあてた

昨年の城島合宿に初参加し、師弟の息づまる魂のふれ合いのきびしさとその中に溢れる真の師弟愛に感動し、この国文研の道統の中にこそ日本の教育の源流をさぐりあてた喜びに、今年と同僚を誘い参加ができたことを心から喜んでゐる。

昨年と違った大きな特色は、慰霊祭が加えられた一事である。星屑冴えわたる宵闇の中に、簡素ながらも古式ゆかしい祭壇を設け、神代さながらのかがり火を焚き、祖国のために殉じた祖先の御霊を厳肅に祭つたこの儀式こそ、今次合宿の最も重大な意味を持つ行事だつたと思う。この儀式が、全合宿をひきしめ筋金を入れるくさびとなつたことを確信する。

(福岡県川崎町立川崎中学校 向山 正)

道を求める手だてを探しあてた

四泊五日の合宿で、こうも感動を受けたことは、講師の先生方の、講義内容は違つてもその本なるものが一筋であつたこと、また、言葉が心のほとばしりとして出ていたことに起因するものと深く感じ入つた。今自分は何を求めて生きていくべきか、具体的な問題についていろいろなことに気がつく

ことができた。その一、二を挙げると、

- 1 自己の存在がなんと小さかったか
- 2 物の捉え方考え方がどれほど浅薄であったか
- 3 歴史に対するつきあいがいかにエゴイステックであったことか

4 情意が年々に欠如衰頹してきていた

こう気づいた時、自己の位置、生きている意味を認識することができたように思われる。私は今、日本歴史の伝統のなかに生をうけ、この生命を永遠に受けつぎ伝えるべき一人の日本人であることに責任と情意とをもつべき宿命に立っていることを痛感している。

(熊本市立一新小学校 山口里信)

#### 四泊五日で帰るのが惜しい

四泊五日は長すぎるなと思って乗り込んだのであるが、最後の日を迎えて、まだ続けて合宿にいたいという実感がわいているのはなぜだろうと、今書きながら考えている。その理由として、まず第一にあげられる根本的なものは、合宿教室の性格が実にすっきりしているということだと思う。すなわち、歴史につきあおうという目的をはっきりかかげ、しかもある型にはめようという強制的な意図が毛頭ない。初参加者、経験者あるいは性別、地域別、能力別その他一切の異なる

った条件をのりこえて、平等に人間を認め合っているという霧囲気があふれた合宿であったからである。

(熊本市立健軍小学校 相良正典)

#### 待ちのぞんでいた真の教育

四泊五日の合宿教室に参加して、現在の社会生活の中ではなかなか見られない経験をえました。講師の方も国文研の指導者の方々も、全く同じ考えのもとに家族的霧囲気の中で、希望と実践力を身につけさせ、新しい学問を産み出させる素地が培われたような気がしました。参加者全員がそれぞれ一人の人間として、なまの考えや体験をぶっつけ合って、心と心を通わせて行く間に、自己のかたくな殻も破れ、皆とのつきあいによって真の友情が、真の愛国心が養われていく。

このような教育こそ現在の日本にとって最も大切な、必要な、私たち教育者の待ち望んでいたものでした。私は心から感動いたしました。

(熊本市立城東小学校 木多繁男)

#### 真剣な修行の生活

一、日本人としての自覚

ややもすれば妥協的、安易な生活の中に生きて、目前の世俗的な小事にのみ心を奪われがちだったが、五日間の真剣な

必死な自己探求を続けることができて、おおいかぶさつていた雲が少しずつ開かれてゆくよううれしき、生きがいを感じたに感じることができた。

## 二、家族的同行の合宿

人間の本心をえぐりとする真剣な修行の生活であった。講師も、主催者も、一般会員も同じ食堂で、同じ部屋で、同じような態度で、身分、地位、年齢を超越し、全く一つの家族内の行事として行なわれたことに、強く感動した。主催者は別の部屋で寝食するのが現在の会合の通例になりつつある。ここでは心のつき合いはできない。運営上の支障は多々あるであろうが、会を重ねることに会員も年々多くなりつつあるとか、今後一人でも多く、特にイデオロギーを異にするような人たちにも参加を呼びかけられて、伝統の日本人の血を蘇生させていたきたいと念願する。

(熊本市立託麻原小学校 鍋島正登)

## 心にすず風の吹く如く

(一) 四泊五日しかも学生といっしょという合宿は、自分にとってやや不安であった。が今この会を終了するにあたっては、心にすず風の吹くごとく、大いなる勇氣と奮起する意欲が湧いてきたことを何よりもありがたく思う。

(二) 講師の先生方の、真意を吐露されて語られた深い学識

と教養と、日本の将来をいかにするかの鋭い洞察とその情熱に、小さき自我、安易な市民的生活をむさぼりゆくこうとしていた自分の姿が浮きぼりにされたような感じがする。

(三) 日本の社会の、教育の、家庭の、個々人のいろいろな分野に危機がいわれているが、これをどう受けとめるかにについても、この合宿によって解決の糸口が見出された心地がある。

(四) 班別討議もたいへん有効であった。お互いに講義内容のつかみ方が深まった。

(五) 短歌創作 これは今後持続してゆくつもり。初めての手ほどきをありがたく思う。

(六) 慰霊祭 印象深く、この会の全ての集約された行事であったと思う。日本肇国の古代に帰った心地がした。

(熊本市立出水中学校 村上 勲)

## 歌の中に同胞感を見出そう

天皇の御歌を中心に私たちは、日本の美の伝統をもっと深くつかみとり、その中から、天皇のお立場、祖先の文化、国家への献身、同胞一体感を汲みとるべきだろう。ともすれば万葉を歌の芸術的価値だけにとどめ、その底に流れる天皇、あるいは、詠み人の心にまでふれる認識に欠けていたことを恥じ入る。また、安保改定に伴なう左翼の目に見えない攻勢

と準備を私はひしひしと感ずる。日本の知識層と称する人々の間にも、それが見えるし、特に日教組のあり方については、徹底的に対決し、処理すべきだろう。多くの無関心層のあり方がこのさい問題であり、私たちは教師として、子供を教える立場にあるがゆえに、正常化に焦燥を感じる。講師の先生の学問的深さと、それを支える宗教観、あるいは先哲の教えを基盤とされている人間的深さに強く心を打たれました。

(熊本市立湖東中学校 城本辰記)

### すばらしい雰囲気

講師のご講話ならびに班別討議により、いろいろな問題を再認識させていただくとともに、自分自身真剣な態度、大らかな気持の不足を痛切に感じさせられました。特に日本の現在の現状分析の甘さ、自分自身の思想の貧困さには、われながら、私自身に愛想の尽きる思いがいたしました。なお参加者の態度というか、雰囲気というか、ほんとうにすばらしいと思いました。こうした態度や雰囲気を醸し出す根源を考えさせていただいたわけですが、これは国文研の先生方の長年にわたる、献身的なご努力の集積に他ならないという結論を得ました。

(熊本県教育庁 後藤 包)

### 大いなる勇気を

五日間の講義や討論の内容が、いかなるものであるか、いさか不安な気持を持っていたが、明治の先覚者の精神を汲まれた講師の諸先生の風格に接しただけで、今まで、もやもやしたものが吹きとんで、大いに勇気を奮いおこされた気がしてきた。また、班別討論でも、世話人の先生方の高い識見と豊富な体験を基にした、適切な指導助言により、班員の真剣な意見交換ができて、祖国復興の念をいやが上にもゆさぶられた。講義で特に感銘を深くし、感動したこととしては、一、歴史に仕えるということ。二、今日の社会・人間があまりにもエゴイストであること。三、自分の中に宿っている無限の働き等、数多くのことばがある。これからは、個人の生活のみならず、社会生活、特に現場の職場において、体得したことを大いに生かし、同僚にも働きかけたいと思う。

(熊本市立慶徳小学校 高見 覚)

### 三度目の誕生を迎えた気持

「命の洗濯」という言葉どおり、ほんとうにすがすがしい気持で、四泊五日を過しました。生を受けて四十六年、今から二十三年前には、帝国海軍にいて、空母にのりくみ、敵機

の洗礼を受けて、やっと生きのびるといふ経験があり、この世に生を受けること二度あったと思ひ、二十歳代のつもりで、教育の道にいそしんでいたのだが、今ここに、また新しい三度目の誕生を迎えた気持で、いっばいである。木内先生のお話しの中に、誠心をもって、つきあつたら、きつと相手をなつとくさせることができるということは、特に心に銘じて、これからの生活信条として、生かしていきたいと思ひます。

(熊本市立壺川小学校 道田繁久)

### 涙なくしては聞けぬ講義

諸先生方のご講義やその他の行事、一つ一つが身にしみた。特に小田村先生は、前夜の班長会の反省に出た事項を、早速とり上げられ、参加者にこんこんと説かれるあたり、涙なくしては、聞けないご講義であった。自分の利害については、深く考へるけれども、全体のことについては、一向に眼を向けようとしなない現代人の欠陥に対して、これを怒らず、じゅんじゅんと説かれる愛情ある会は、この会より他には見られない。しかも、格調高い諸先生方のご講義の内容を、かんでふくめるように、わかり易く敷衍してくださった。われわれは、人、歴史、自然、学問等と深くつき合ねばならぬ。われわれの生活は、これらのものと、時間的、空間的に、広い深いつながりがある。それらと、つき合つて行くということ

が、同胞ということの内容である。また、生命共同体としての国家とのつながりなど、プリントにあつた「ある一つのこ」と」を強く感ぜずにはいられなかつた。

戦前は、縦のつながりが強調されていたが、戦後は、民主主義の名のもとに、これこそ平板的なせまい、横のつながり、いや個のことへのみ頭を向け、自分は自分一人で生きていけるような錯覚にさえ陥つていた。しかし、この会のおかげで、目を大きく、見開くことができた。今後は、あるがままの歴史に、大いにつき合い、わが国土のため強く生きぬくことを、ここに改めて誓う。

最後に、この合宿に参加する学生こそ、真実を求める学生であり、将来の日本を背負つて起つにふさわしい人物になるであろう。ますますこの会の発展を心から祈念する。どうもありがとうございます。

(熊本市立碩台小学校 増田三二)

### 胸をえぐる青年の言葉

五日間の最後の全体意見発表で、鹿児島大学教育学部二年、蒲牟田保君が、「私は、この合宿に参加するまで、日本がこんなによい国であるとは知らなかつた。……」と発言したが、私は職責上、このことばがきわめて痛烈に聞き取れ、かつ反省させられた。五日間にわたつて、日本の歴史の中

に、先人のことばの中に、日本のよさを具体的に教えられ、感動していた矢先に、蒲牟田君のことばを聞いたのである。

一、概念的に知っていただけではだめであること。一、行動を伴わぬ知識では、真の生き方ではないこと。一、教育という国家の重大な使命を負っている者にとっては、微温的な弱さでは、真の国民教育は不可能であり、罪であること。以上について、痛棒を加えられた思いがするのである。

運営についても、社会人という足手まといのグループに対しての、細かな配慮をなされ、目に見えぬ苦勞を重ねてくださった国文研の方々、学生諸君にお礼を申し上げたい。偉大なる奉仕を受けて、通じ合わない者はいないと思う。

和歌創作のめざすところが、ものごとを、ことばに換える時の心の姿勢を正すことにあることを知って、創作する喜びを味わった。今までに創作したことはあるが、苦しみであったが、今回は、苦しみは苦しみでも、楽しかった。

福田、木内両先生の共通のご指導が「ことば」の問題であり、今までに知っていた意味論は、単なる知識としてであったが、人間の生き方として、仕える道の手はじめとしてとらえさせてくださったことが、最大の収穫であった。自己は孤独なり、それに絶望し、自覚することが、克服への出発だといわれた福田先生に、生き方のきびしさと楽しさを教えられた。パネルで、教育の誤りを福田先生から指摘された。教師が「教えること」に「日本の歴史」に、感動をもっているか

どうか問題だといわれたのも、大いにこたえた。

夜久先生の、太子十七条憲法解説は、黒上先生の文章を引かれてのお話で、太子の偉大さ、黒上先生の学問の仕方被打れたが、同時におのれの古典の読み方の浅さを恥じ入り、さっそく、「古事記のいのち」から古典を学び直したいと思いました。

(熊本市立黒髪小学校 香月 敏)

## 短歌詠草について

合宿教室のスケジュールの中に、短歌創作を必須の条件としてとり入れてから、今年は七年目にあたる。短歌創作というこの意味を正確に解説することは、かなりの紙面を要するので、ここでは割愛するが、ともかく、人の真情の表現に感動したり、自分の心が人の心に伝わって行くことを確認したりする「体験」を持つところである。「うた」というものの持つうしろ向きのイメージや、教養主義的な受けとりかたの間違ひは、実際の創作体験によってどんどん打破されて行つたことを、合宿参加者は切実に経験したはずである。

短歌創作の指導は次のような順序によって行なわれた。まず初日に、国文研の山田会員によって導入講義が行なわれた。これは、歌をよむ基本的な姿勢が、素直な心の正確な表現である点を強調したものであった。初心者のために若干の技術指導が行なわれたのはもちろんのことであったが、上手な歌よりもむしろ正しい表現ということが繰り返し強調された。導入講義に続いて第一回目の歌稿が提出され、その中から選別された約三五〇首のプリントをもとにして、三日目の午後山田会員が講義を行なった。言葉や語法の間違ひはもちろん、心の姿勢そのものが、かなりきびしく批評された。その日、雲仙登山の後、第二回目の創作が行なわれ、選別された歌約五五〇首について、四日目の班別相互批評の時間が持たれた。この時間に、班員は作者の心になって、正しい言葉を選択するという経験を積んだわけである。作者は自分の表現が主観的であること、読者は自分の解釈が主観的であることを否応なく思い知らされる一瞬である。こうして相互の批判によって歌が修正されてゆく過程で「心が通う」という実感を持ち、初めて「心が聞かれる」ということも体験できるのである。語法の間違ひや、とん

でもない誤解などで爆笑も湧いて、なごやかなひとときが過ぎた。

感想文集に短歌を入れることになって、第一回、第二回の創作全部、約二千首あまりを、もう一度丹念に読んだ。選択の基準は技巧的なうまさよりも、合宿教室における心の交流の表現という点に重点を置いた。全くの初心者の作が大部分なので、幼ない表現もあるけれども、作者にとってはかけがえのないものだから、なるべく原作のままにしたが、明白な文字の間違ひは一部訂正した。また選択は紙面の都合に制約されて、参加者一人一首という原則で選ばなければならなかったので、連作から一首を選ぶこともあって、かなりの無理もあった。しかもかく、こうして選び終えてみると、そこには、巧拙を越えた一つの大きな心の交流の世界が実現されているように思われるが、どうであろうか。また、こうして参加者一人一人の心の中に、素朴な情意が回復されたということは、この合宿教室が、今の時代における一つの盲点とまともにとり組み得たような気もする。この冊子本を読まれる方々のご批判を、率直にいただきたいところである。ともあれ、前記の感想文とあわせてお読みただければ、编者たちの喜び、これに越したことはない。

# 短歌詠草 (しきしまの道)

## 第一班

今上天皇の歌碑の前に立ちて

中央大学 磯貝保博

きざみたる御歌の文字に大らかな御心しのび  
くりかへしよむ

九州大 友池仁暢

雲仙にて初めて聞きしひぐらしのこゑのすが  
しき胸内にとどめぬ

九州大 宮崎義美

来年も会はうと誓ひし君なのに今年来ぬのは  
いかにしつらむ

鹿児島大 横田喜弘

雲仙の下に開ける天草のいにしへ人をしのび  
つつ行く

東京都立大 末光正忠

ひぐらしのなき声ききて雲仙の静かに暮れゆ  
く夏の夕暮

亜細亜大 小山田清光

静かなる夜もふけゆきて友みなの眠りははや

し高原の夜は

神戸大 深津春義

駅前にわれが忘れしハンカチを届けてくれし  
母ありがたし

川井先生の講義を聞いて

中央大 井ノ口重紀

先生のあざやかなりし説明に我心まつたくあ  
らたになりぬ

鹿児島大 中西勝義

友どちとところを尽して語りあふその厳しさ  
を我は忘れじ

広島商科大 中西弘幸

かなかなと鳴くせみの声にさそはれて暑さわ  
するる仁田峠かな

玉川大 益井重征

合宿に集ひ来たりし友どちの交す眼の輝く光  
福田恆存先生の御言葉聞きて

明治大 繁永正博

師をさがせかく言はれたる先生の御言葉いま  
も心に残れり

亜細亜大 栄悦三

友みなの心澄ましてうた作る部屋の外より蝉  
の声高く

大分大 中原義人

人がらにひきつけられつ聞きをれば心にひび  
く講師のことば

## 第二班

合宿地に向ふ途中にて

京都大 福島義治

車中にて久々に友の顔見れば心はもはや合宿  
地に飛ぶ

福島君、弟急死の報をうけて合宿地を去  
る

富山大 岸本弘

言ひかはす言葉も少なく去りゆきし君が胸内  
いがあるらん

何一つなぐさむる言葉も口にいでず君を送り  
て心むなしも

仁田峠、野岳登山から

鹿兒島大 田 潤 勝 次

生ひしげるひのき林の舗装路を涼風うけてバスはのぼりぬ

玉川大 細 田 邦 泰

複雑なるおもひにすこせしこのつどひはやくも三日目となりにけるかな

鹿兒島工業短大 佐 藤 正 文

仁田峠はるか南をながめつつ我が故郷の山々を思ふ

鹿兒島大 溝 口 忠 文

幾年も風雨きびしき山頂に耐へて根をはるみやまきりしま

鹿兒島経済大 横 手 満 男

湯を上がりしばし窓辺にたたずめばひぐらしの声きこゆ雲仙の山

島根大 岩 本 一 也

志一つにつどふ友どちと野岳をゆけばたのしかりけり

神戸大 白 坂 隆 重

雲仙の山の緑に囲まれて生業<sup>なりは</sup>求めて働く人あり

鹿兒島大 凶 師 博 隆

先輩の言葉に耳を傾むくれば柔き中に凜々しさあり

神戸大 円 尾 敏 浩

夏草のおひしげりたる山道に紫色のりんどう咲けり

下山の途中にて

亜細亜大 坂 本 民 雄

何げなく語りし人は同郷とわかりてさらに心なごみぬ

慶応義塾大 雨 宮 夏 雄

歌出でよ歌よ出でよと苦吟する二段ベットの上の友どち

九州大 小 松 大 輔

日に映ゆる緑のしげき樹の間よりはるけき海に小島の見ゆる

国学院大 白 鳥 和 彦

仁田峠杉木の間より見ゆる海橋湾の輝き白く

第三班

岡山大 伊 藤 三 樹 夫

天草の海原はるか見渡せば胸の思ひの澄みわたるかな

長崎大 田 村 潔

しみじみと友と心の通ひたる集ひの喜び消ゆることなし

川井先生の御講義を聞きて

福岡大 江 口 研 治

日毎に己がことをのみ気にかくる心のせまきに鞭を打たるる

神戸大 野 口 豊 太

美はしき景色を眺めてしみじみとうれしと思ふ日本人なりしを

鹿兒島経済大 三 園 敏 則

すくすくと伸びゆく幼木の間には雄大にそびゆる老木のあり

亜細亜大 平 塚 俊 三

晴れ渡る雲仙の朝けふの日を道求めんとわれら集ひぬ

長崎大 山 崎 太

流れ落つる汗をぬぐひし我が衿に山あひの風すがすがしかり

鹿兒島工業短大 竹 下 和 範

夜も深く風も冷たくなりければ暑き我が家が思ひいださる

福田恆存先生の御講義を聞きて

鹿兒島経済大 野 中 民 生

言の葉は心と心の出合ふ場と師は真剣に我らに訴ふ

九州大 蒲 牟 田 高 雄

真青に晴れわたりたる朝空に静かに昇る日本の旗

鹿兒島大 入 作 芳 登

強き日静かな冷気日の丸よたなびけたなびけ  
朝のみ空に

鹿児島大 藤崎 義之

はるかなる故郷の母のいまいかにあるかとせ  
つに偲ばるるなり

亜細亜大 金田 士郎

旅立ちしときの両親のあたかなころづか  
ひに心のなごむ

神戸大 西川 弘毅

大御歌刻みし石を仰ぎつつわれもかほどにう  
たひたしと思ふ

広島大 大橋 健治

整然と茂れる山の植林の若き生命よたくまし  
き力

松江をしのびて

玉川大 深谷 正徳

雲仙にありて今宵も偲ばるる堀にうつれる白  
壁の街

#### 第四班

A君に贈る歌

九州大 稲津 利比古

合宿の名簿にたまさか君が名を見つけし時は  
うれしかりけり

去年の夏友らと語らふこともなく黙せし君を

思ひ起しぬ

野岳さして登りゆきし時

亜細亜大 長谷川 賢司

目的の頂上さして登りゆくに暑さにも負けぬ  
友の歌声

宮崎大 望月 俊毅

まだ来ぬと時計にらみつつ友待てど開会式は  
つひに始まり

鹿児島大 並松 繁

いつのまにどこからとなく聞えてくるコーラ  
スの声に我も歌ひぬ

神戸大 矢内 定雄

うたたねの眠りさむれば山近きひぐらしの声  
に我が家を偲ぶ

鹿児島工業短大 宮園 朴

山腹に煙たなびく雲仙の緑にはゆる景色美し  
岩山をのぼりきたればはるかにもかすみわた  
れる有明の海

中央大 飯田 勝一

眼前に広がりてある有明の海はただただ美し  
きかな

玉川大 遠藤 徳

友どちと湯ぶねにつかりかはしあふ声もたの  
しや雲仙の宿

明治大 江藤 正弘

京都大 松沢 嘉彦

夜深く熱こもる友の声聞けば旅来し私の疲れ  
忘るる

鹿児島大 中島 繁樹

かたはらの友らの話に気をとらる歌を詠まん  
と紙に向へど

亜細亜大 加藤 洋一

はるかなる雲仙の地に誠実に勤めし乙女ら清  
く美し

鹿児島大 白髭 進

何もかも我が意のままと思ひたる貧しき心悲  
しかりける

鹿児島経済大 山本 圭三

きのふまで顔も見知らぬともだちと今日はし  
たしく話すなりけり

慶応義塾大 安田 稔

合宿の開会式に臨みひて君が代の声胸にしみ  
入る

順天堂大 西口 健

遠き道を朝まだ早き港まで我を見送りに友か  
けつけし

#### 第五班

合宿中途より帰りたる友に

京都大 井上 慎一

私のいふ言葉も聞かずただ君は手をふりきりて外に出でにき

おのがじし素直になりて人の言ふこと聞くほかに道なしと思ふ

君に言ひし私の言葉に嘘なきかとただただ深く省みらるる

九州大 島津 正数

おのが身の心の奥まで響きけり良き師もてとの師の御言葉は

玉川大 山本 満

父君の死に会ひてより法華経を読み初めにしと師は宣へり

体調悪しく仁田峠行きを断念し、宿に残りて

福岡教育大 佐藤 和郎

友去りて一人で入る温泉の湯口の音のドームに響く

九州大 洲上 隆秀

野岳より下りてのちに汗ふきつつジューズをのめば心すがしき

合宿に来る途中のバスの中にて

福岡教育大 向山 晃

雲仙のすそに広がる草原に我を忘れてしばし見ほるる

車中にて

早稲田大 芥藤 実

なに見てもただ父母のこののみが私のこころにうかびくるかな

福田先生の講義を聞いて

鹿児島大 浦牟田 保

ばくぜんと使ひきたりし言の葉の伝へ難きを教へたまへる

懸命になつて友のまちがひについて語る

四国学院大 垣内 一夫

吾が心わかつてもらへぬかなしさに吾が胸うづき言葉も消えんとす

天草第一橋をみて

鹿児島大 清水 勝

鋼なるこの大橋は天翔りかかりてはゆる海山の青に

島根大 村田 清治

湯の町につどひて来たり友どちは日本の国の明日を夢みて

上智大 津下 有道

真直ぐに友より出づる言の葉に我いまはたと胸をつかるる

木内先生の御講義を聞きて

修猷館高 小森 秀人

しみじみとしみこむごとき言の葉になやみぬかれし跡を感じる

日本大 三島 浩二

はるばると遠き南の雲仙になつかしき友と会ひし喜び

川井先生の御講義を聞きて

鹿児島大 工藤 一巳

きびしかる師の言の葉にしるる長き努力の心のつよさを

## 第六班

「苦い経験の深い悲しみは話さぬ」といふ木内先生の御言葉を聞きて

鹿児島大 北島 照明

人間のまことの深き悲しみに耐へて生きます御姿尊し

梅田さんのオリエンテーションを聞きて

亜細亜大 山路 忠重

朗々と自信に満ちし言の葉よ真の姿目の前に見る

明治学院大 井上 佳彦

ひととせを経て会ふ友はその面にやさしさたへ我を迎ふる

鹿児島大 中村 栄司

眼前にうつる日の丸あざやかにめざめしむるかやまと心を

中央大 今井 文明

汗かきて登りつめたる野岳山冷たき風に心も安らぐ

岡山 菅 志朗

合宿の宿ははやそこ我急ぐ木の間小径に小鳥すだくも

早稲田 水 上 三郎

いまぞとく小さきこだはり捨てざりてころとこころぶつつけんと思ふ

中央大 川 添 昭

炎天下緑濃き野を行く汽車の停りたる小駅に蟬の鳴きをり

皇学館大 氏 原 正昭

かなかなと入り日をつぐる蟬の声けふの疲れもうすれゆくなり

同志社大 長 尾 治

夕日さす友の背中を流し合ふ雲仙の湯はまろくなごやか

神戸大 岡 田 吉彦

合宿を樂しきとのみ思ひ来てそのきびしさに心たださる

早稲田大 広 瀬 清治

我が不安たちまちに消ゆ先輩のなつかしき声そばにし聞けば

一ツ橋大 村 越 文理

日本のすすまむ道を予測して身のひきしまる

思ひするなり

佐賀大 福 井 英成

討論はむづかしけれど講義にはためになることまつたくおほし

福岡工業大 藤 本 博幸

雲仙の深みどりなる山々に季節はづれの小鳥鳴くなり

### 第七班

夕食後ベランダに出て

長崎大 森 重 忠 正

夕されば深山ひぐらし鳴く声の耳に入り来て心安まる

鹿児島大 徳 田 浩 士

われ友と心ひきしめ今日よりは師の御言葉に耳傾けむ

九州大 古 賀 誠

日は落ちて黒く変りたる山の端にうすき夕焼け美しきかな

九州大 志 賀 建一郎

己が目がただひたすらに先生の目を見つむるに気付きて驚く

玉川大 二 井 康 雄

えにし得て初めて会ひし友どちの言の葉すべてに耳傾けむ

明治大 奥 山 章 男

刃のごとく鋭く光る水平線目に痛くしみ我は眉寄す

鹿児島大 曾 木 国 智

目をとちて静かに床にふしをれば心に友の声ぞ残れる

神戸大 西 尾 幸 雄

旅に來し思ひもあらたバスの窓ゆますぐに並び立つ木を見れば

中央大 高 橋 俊 樹

すばらしき歌作り得ぬこの我はまことのころ持たぬなるべし

早稲田大 舛 田 忠 生

車中にて揺られしこち今もする旅に疲れて今宵眠れり

鹿児島経済大 東 条 久

先生の厳しき言葉友どちと聞けり何とも感ぜずや友

班別討論の折

立正大 浦 一 俊

かりそめの言葉にあらじはらからと心つなぎとともに歩まむ

合宿教室に初参加して

亜細亜大 斉 藤 得 三

初陣の胸の高まりおさまらず一夜過して心落

ち着く

木内先生の講義を聞いて

長崎大 白石 肇

哲学は全学問の王様と説きたまふ師の姿たく

まし

関西大 柴田 義及

夕暮れの合宿地になくせみは故郷の母の祈りにきこゆ

鹿児島大 泉和人

懐しき城島の友と語り合ひ去年の議論思ひ出すなり

鹿児島大 土岐直彦

鹿児島を発つにあたつて

朝まだき星の残れる街中を父は車で吾を見送りし

### 第八班

小田村先生の開会の挨拶を聞きて

九州大 古川修

この一瞬に全ての思ひを托すと師の御言葉はきびしく響く

亜細亜大 岩越豊雄

開会をつげる友の声ひびきわたり合宿教室今開かれんとす

いまはただ心限りにこの五日をすこしゆくよ

こほかに道なし

鹿児島大 黒木清亜

静かなる海のかなたにうつすらとかすみてみゆる天草の島

神戸大 高橋豊

山深きいでゆの里の夜はふけて細く悲しき虫の声せり

鹿児島大 嶋村宗広

たくましく空にそびゆる木々のごと我も生きたし世の荒波を

鹿児島大 松木昭

朝日受け心さやかに体操し気持新たに今日を過さむ

洗濯さるゝ先生の姿を見て

我々とともにあゆまんと生活をともにしたまふ姿尊し

中央大 樋泉克夫

野岳にて

関西大 渡辺章

はるかなる長野の山で合宿をつづける友のひたに思はゆ

東京外語大 松井博文

雲海の下海原の島がすみかすめる涯に心消えゆく

大阪大 上村佐紀夫

膝交へ語らふ友の顔見ればあらたなる闘志ひたにわきくる

明治大 久保賢之助

雲仙の木々の間を通りぬけ眼下に見ゆるは青き有明

鹿児島大 高橋良和

不安がる己の顔に班長のやさしき言葉胸にしみこむ

広島大 荻山真

先人の残せし言葉に我が胸は前にもまして強く感じる

長崎大 椎島有三

真心を尽して人に話さむと思へど何故か心ふさがる

### 第九班

学習院大 酒井大明

雲仙の青空のもとみわたせばはるかにつづく緑の山なみ

長崎大 日下部隆

日をあびてまつすぐ伸びる杉林我を待ちをり大空のもと

横浜国大 深田肇

夜更けてかがやく星を眺むれば友とかたりし喜び迫る

鹿兒島大 辻 正道

七曲りゆれ行くバスの側面に消えては見ゆる  
青き山川

鹿兒島大 三宅 達也

友どちと登る野岳の山肌に咲きし一輪の野あ  
ざみの花

亜細亜大 宝 辺 幸 盛

友どちと声高らかにますらをの歌詠みゆけは  
涙こみ上ぐ

九州大 山下 光明

若人の競ふ歌声はつらつと林の道にこだま残  
しつ

鹿兒島大 牛塚 耕三

朝つゆのむすびし緑ながめをればおのづと聞  
ゆ谷川の音

九州大 脇 阪 佳 秀

友どちのうたへるうたに声合はせ歌へばおの  
づと心なごむも

京都大 溝 江 優

張られたる班別表に懐しき友の名前を見いで  
たりけり

神戸大 藤 塚 紳 也

外に出て山に登れば友どちの心もとけてなご  
みあひけり

梅田さんのオリエンテーションを聞きて

早稲田大 今 林 賢 郁

ひた／＼とよせくる波のそのままに君の思ひ  
のひた迫り来ぬ

心して聞きてあればわが胸内の静かに豊かに  
満ちくる思ひす

きびしくも生きてありしかみ言葉の静かには  
あれどその力強きよ

聞くうちにのおのが心の統べられてあらたな力  
の湧き来る覚ゆ

熊本大 西 村 正 顕

山道を共に登れば友どちの心かよひてうれし  
かりけり

大阪大 草 地 八 寿 郎

目の前によこたふ九州の大地見て心の躍動を  
われ禁じえず

神戸大 中 木 繁

壇上で汗かき語る師の言葉一語一語が胸に焼  
きつく

第十班

神戸大 寺 川 真知夫

福田先生と言葉をかはしうれしげにそをいふ  
友の面はかどやく

たどじつと先生のかほみつめぬしとかたりぬ  
る友のおもかどやけり

東京工大 内 田 敏 彦

紳士の態度は捨てようと言ふ友の真摯な言葉  
胸にせまりく

小田村先生の御挨拶を聞きて

ゆるみなく訴へ給ふ師の君のその御心にそひ  
たしと思ふ

九州大 片 岡 健

熊本商大 古 市 左 千 夫

学舎の窓の彼方に見る木々の緑深きこと何に  
例へむ

下関市大 梅 谷 道 明

班員と歌をうたひてすごせしはしばしと言へ  
ども安らぎ覚ゆ

亜細亜大 皆 月 隆

わが友と惜別の日は近づけどいつの日か再び  
語らむ明日の日本を

鹿兒島大 福 寿 一 男

帰りなば友に伝へんこの我の決意となりし師  
の御言葉を

登山の中のにて

鹿兒島大 水 垂 照 明

次々といでくる歌にみな顔疲れも知らずた  
だ楽しかり

登山の途中で

福岡大 古 賀 三 郎

腹痛み苦しむつつもまけぬぞと一歩一歩とか  
みしめ登りつ

早稲田大 伊賀義昭  
合宿の思ひを長くどとめんと友と肩くみカメ  
ラに向ふ

亜細亜大 塩崎徳郎  
野岳から見ゆる有明のすばらしき海辺に白く  
波の光れる

九州大 平山正憲  
合宿の初日を終へて疲れたりわが精神の緊張  
を知る

鹿児島経済大 野元博  
雲仙の遠くの山に日は沈む緑の木々を紅にそ  
めて

明治大 柴田寛幸  
雲仙の自然の中にいだかれてはるかに思ふ故  
郷の海

班別討論の際に

鹿児島大 福岡利裕  
先輩の言葉にはつと人生を生きゆく事の厳し  
さを思ふ

神戸大 井上雅円  
まごころのこもりし友のそのことは胸に入り  
きて心ゆきさぶる

第十一班

オリエンテーションにて

東京女子大 梅田咲子  
大勢の友等の前で語りゆく拙なきことばに心  
をこめて

語りゆく拙きことばをいつしんに聞く友達の  
まなざしうれし

夜久先生の御講義を聞き

学習院大 小田村静代  
流れくる玉の汗をばふきまきさず教へ給ふ師の  
ありがたきかな

玉川大 勝山啓子  
にこやかに迎へてくれし友ありて緊張一気に  
ほぐれゆくなり

西南学院大 内野敏子  
古の戦ひのあと秘めながら有明の海かすみた  
るかな

東京女子大 久木ゆり子  
朝日浴び国旗仰ぎて体操すれば心の底までさ  
わやかになりぬ

早稲田大 河原倫子  
大空を埋め尽せる星のもとうすすみ色して連  
山のうかぶ

福岡大 工藤啓子

朝日背に松のこずえの輝きてみつめる我的心  
もうれし

玉川大 畑野純子  
我は今何を求めて進まんと覚えざれども友あ  
りてうれし

共立女子大 山田苑枝  
友どちのつくりし歌は我が歌になきまごころ  
ありいたく胸うつ

津田塾大 友清蓉子  
なつかしき友の手をとり語りあふその口もと  
に喜びあふれをり

青山学院女子短大 満本万里子  
雲仙の山のたかきに見る海はうろこのごとく  
さざなみひかる

お茶の水女大 松本明子  
月にむかひゆらりと立ちて水の際にひかりう  
かびぬ待宵の花

木内先生の御講義を聞き  
第一薬科大 平下博子  
御講義をすべて理解はできねども心はずがし  
終りし時に

山登りを断念し居残りし友と語る  
長崎大看護学校 延近史子  
今頃は如何におはすや友どちは山に登りて楽  
しかるらむ

熊本女子短大 林 しのぶ

夕暮れてひぐらしの声に聞き入れればわびしき  
おもひまとも迫り来

同志社大 江畑 寿美子

有明につぶく平野を眺むればかすむみどりに  
心やすらぐ

松江南高 青砥 道子

うつくしき山にかこまれホステルの夕ぐれす  
よし秋おもはする

西南学院大 大村 圭子

去年の夏受けし感激そのまゝに今年も過ごさ  
む合宿教室

九大病院 杉本 行子

古き友新しき友に会ひし今このひとときを大  
切にせむ

神戸女学院大 足立 啓子

遠く来てユースホステルに歓迎ののほり見え  
しとき我が足はやまりぬ

### 第十二班

株式会社浜田組 柊 英志

歌詠みに月の出まちて床を立ち一首うかびて  
心やすらぐ

宮崎トヨタ自動車株式会社 成田 善樹

同胞ののこしたまひし日の本の尊き道をしづ

かにまなぶ

株式会社白屋 長田 美津夫

ほほじろのさへつる声に目をさまし昨日の疲  
れ忘れけるかも

長崎県立島原商業高校 宮崎 金助

文字をのみ眺め疲れしまなこにはあふるる緑  
ただただ美し

仁田峠への車中にて

株式会社岩田屋 時枝 養一

車よりはるかに望む島原の乱を想へば胸いた  
むなり

株式会社増田商店 重松 憲一

なきしきる蝉の声きさふるさとの病弱の母思  
へば苦し

野岳にて

長崎相互銀行 江口 英昭

見おるせば天草の島広がりに合宿のつかれし  
ばし忘るる

長崎相互銀行 井石 則雄

窓辺にてうた詠む友のすがたにぞ照る月かけ  
はわびしく思はゆ

鹿児島興業信用組合 伊集院 豪

たどたどしき言の葉なれど心こめうたひあげ  
たし敷島ののみち

島原市立第二中学校 井上 信一

風もなきこよひなれどもわが宿は友多くして  
衆しかりけり

株式会社岩田屋 古賀 彰

夏去りて秋来たるらし山の夜に虫鳴く声も涼  
しく聞こゆ

家を出るとき

福岡県立香椎高校 田中 利一

おくり出す母のことはよ妹ときびしき家によ  
たり残れり

株式会社高田工業 永瀨 徹

青年の若き魂を燃やさんと仕事忘れて雲仙に  
行く

皆川経営研究所 荒巻 哲朗

雲仙の緑に映えて日の丸はをしくあがり身  
もひきしまる

### 第十三班

熊本市立託麻原小学校 宮本 忠昭

若者の集ひに入りて我もまた日本の未来築か  
むと思ふ

吉川工業株式会社 百崎 末夫

早朝の風にたなびく日の丸の緑にはえて心さ  
わやか

協栄管理株式会社 荒木 義一

夏草をわけ登りたる野岳よりわがふるさとほ

まのあたりみゆ

友の母「キトク」の電報ありて合宿地を去る  
熊本市立藤園中学校 宮 永 高照

友の母危篤の報に胸つまりよくなれかしと神にいのるも

かの友は母をおもひついまごろは汽車やおそしと駅にまつらん

オリエンテーションにて

熊本市立竜南中学校 杉 浦 良 雄

女子学生この一年の成長を述ぶる姿は輝きて見ゆ

吉川工業株式会社 佐 藤 定 吉

夕暮にはしやぐ子供を見てをればどろんこ姿の我子を思へり

野岳に登りて

熊本市立白川中学校 勝 木 家 安

久々にわがふるさとの鳥々をわれを忘れて眺めけるかも

鹿児島県経営者協会 今 森 邦 茂

流れでる汗をふきつゝのぼりゆくはだにこゝちよし高原の風

福岡県川崎町立川崎中学校 国 松 茂 雄

うつとりと眺むる普賢の山肌はつよき陽ざしにみどり美し

雲仙小地獄にて

長崎県立島原高校 永 田 徳 穂  
たらちねの母に負はれて来し里に我は来にけり  
輪かさねて

山なみの胸に抱かれし雲仙の合宿にゐて亡き母を憶ふ

合宿三日目の夜

熊本市立一新小学校 松 枝 幸三郎

三日すぎて妻子におくる便りにはたゞすこやかにとつゞるのみなり

福岡工業大学 早 田 二 彦

山頂で立ち売る母の背に負はれ陽もさけぬ子の生の強さよ

長崎県立島原高校 川 山 勝

天つ日の雲間を出でて照るたびに海原をゆく船白く見ゆ

### 第十四班

仁田峠

熊本市教育委員会 兼 田 好

風雪に耐へて久しき常盤木の雄々しき姿強く胸うつ

熊本市立藤園中学校 片 山 生 志

雲仙の山にそだちて雄々しくも霧氷にたへしみやまきりし

熊本市立碩台小学校 本 庄 茂 道

合宿の体験語る学生の光る涙に心うたるとる

熊本市立川尻小学校 上 村 清 房

涼しさの身にしみ通る頂きに汗の匂ひもいづくにか消ゆ

熊本市立城西小学校 吉 弘 憲 雄

わがまなこ開け来たりしかいつもより山歩きても心勇むなり

熊本市立京陵中学校 岩 崎 良 一

路の辺にををしく立てる天皇の歌碑のみ歌は心にしみいる

オリエンテーションにて

熊本市立竜南中学校 野 水 一 郎

をとめごが切々述ぶる言の葉の一語一語は胸にせまりつ

会社員 遠 藤 太 嘉 志

日の本を語り伝へて何時までも心の通ふ友となれかし

熊本市立向山小学校 真 佐 喜 親

気のつきて鉢に灌水する人のあればよからむ言ひ忘れ来て

仁田峠より談合島を望みて

熊本市立城東小学校 神 瀬 克 巳

有明の彼方にかすむ湯の島に教へ子等は今も居らむか

熊本市立万合小学校 磨井敏春

班長の踏越えし道よりほとばしる言の葉つよ  
く心ゆさぶる

福岡筑紫女学園中学校 田村常武  
道を説く師の一言ももらさじと聞く若人の瞳  
かゞやく

## 第十五班

熊本市立葦川小学校 道田繁久  
合宿の窓より見ゆる絹笠にとも登れる子ら  
を思ひつ

熊本市立一新小学校 山口里信  
薄く濃く重なり続く山肌にのりうつぎの花今  
をさかりと

登山バスを見送りにて  
熊本市立黒髪小学校 香月 敏  
鳥原のなまりもまじるガイド等の声のはずみ  
てバスは出で行く

熊本市立城東小学校 木多繁男  
あとおひて振る吾子の手をしのびつゝ一人ま  
どろむ合宿の夜

熊本市立湖東中学校 城本辰記  
高原の夏草しげき短夜を生命のかぎりこほろ  
ぎの啼く

オリエンテーションにて

熊本市立碩台小学校 増田三二

いばらずにわが体験を訴ふる学生の姿尊く見  
ゆる

不眠の暁を迎へて  
熊本市立託麻原小学校 鍋島正登  
雲仙の谷間を越えて朝まだきはじろの声窓  
辺にきこゆ

熊本市立健軍小学校 相良正典  
語りても語りてもまだつきせぬを燈消して今  
日を終りぬ

熊本市立慶徳小学校 高見 覚  
噴き出づるいでゆの如く熱き血の溢れくるな  
り合宿の夜は

熊本市立出水中学校 村上 勲  
ひたすらに教へ説かるゝ師のことば惻々とし  
て胸にせまりく

福岡県糸田町立糸田中学校 木森俊輔  
すめろぎのみゆきし給へる高原の歌碑の前は  
去りがてぬかも

熊本県教育庁 後藤 包  
この国の行くべき道を語らむと吾子の頭をな  
でて旅立つ

亡き道友を偲びて  
福岡県川崎町立川崎中学校 向山 正  
痛と知る友を残して旅立ちしこぞの合宿よみ

がへりくる

せまりくる友の死おもひすべもなき歎きに耐  
へし高原の夜半

亡き友の生きてしあらば雲仙のこの合宿に來  
たりしものを

## 国民文化研究会

亜細亜大学 夜久 正雄

明日ありとたのむ心をいましめし友のことは  
は耳にのこれり

つたなかる心ながらもま心をつくして生きむ  
けふのひとひを

目に見えぬ朝とりのこゑ水の音しづかに明け  
ゆく天地なつかし

木内・福田両先生がともに三泊なされし  
御心情に感激しその御講義を聴きて

国民文化研究会 小田村 寅二郎

蒸し暑き場内に満ち壇上は暑さひときはきび  
しかるらむ

涼しかる土地なるべしと案内せし山雲仙に  
この暑さとは

ことのはのみだるゝさまを手にとるがごとく  
に示したまひける大人

聴く者のまなごことごとくかかやきて語らふ大  
人の面にそゝがれぬ

日程を終へ旧き友らと語る

鹿児島大学 川 井 修 治

久々に来りて会ひし友なれば語らひつきず心  
なごみて

うち笑みつ肩たたきつくさく／＼の思ひ出語  
りぬ時を忘れて

み友らの熱き心に支へられひたに生き来ぬ十  
まり一年 ひととせ

合宿参加

共同通信社 浜 田 収二郎

やまなみのめぐるじやり道いそぎつゝ十年あ  
まりをいまかへりみぬ

長崎市宇宙書房 脇 山 良 雄

風かほる稲穂の波のはてしなき原のかなたの  
雲仙の嶽

年々に集ひの友も数まして国のまもりとなる  
ぞうれしき

橘湾を雲仙の山より望む

熊本県林業研究指導所 瀬 上 安 正

美しく静かな湾のその奥は橘中佐の故郷なる  
か

雲仙野岳に登りて

山頂に近く今上陸下御製碑あり。吉田首  
相諱書、西岡知事跋文。跋文に曰く。昭

和二十四年五月二十六日行幸時に、快晴

花全山を彩りて寿ぐが如くありきと

亜細亜大学 関 正 臣

夏草の深き尾根路を登りゆけば大御歌の碑静  
かに立ちたり

草深き山頂の大岩に刻みまつりし大御製おとぎはも  
「和歌講評」で山田先生が、歌を直され

ゆくのを聞いて

大分県国見町教育委員会 三重野 悌二郎

生命のなきもの蘇へりみづ／＼しくいきづき  
そむるを見る心地すも

木内先生の御講義を聞きて

岡山県立笠岡商業高校 名越 一二荒之助

一葉の落ちるを見ては一瞬に天下洞察すその  
極意はも

学問は資料の分析にあらずそは常識の鍛練に  
ありとふその言葉はも

独創の世界に入れば通じ難き孤独に襲はれし  
師の体験よ

日本タール協会 加 部 隆 三

合宿の道しるべありしるけくも友よと書ける  
その旗なつかし

受付にをとめ子われらを待ちあたり手あげ名  
のりぬそのをとめ子に

夜汽車にて

玉造温泉こんや旅館 青 砥 宏 一

なりはひのくさく／＼あれどそをきて雲仙さ  
して出でて来にけり

こぞまでは一人なりしが吾子とわれ二人の旅  
の心にぎはし

友

福岡県立若松高校 山 田 輝 彦

はかなかるいのちをもちておのがじし生き来  
しものかこれの二十年 はたとせ

若き日の面輪うつゝに浮び来てなつかしきか  
も語らひをれば

まさびしき現し世にしてかゝる友持ち得し多  
にしかしこみ生きむ

熊本市役所 徳 永 正 巳

はげましつはげまされつゝ道を求め求めつど  
けし十まり一とせ

年ごとに若きいのちの新たなる友のまなざし  
かがやきて見ゆ

今上天皇御歌の石碑を拝して

福岡県立宇美商業高校 小 林 国 男

折り折りに写真に拝せし石碑はもいまうつし  
くもここに仰ぐも

夏草の茂みが中に天皇すまみのみ歌の石碑を仰ぐか  
しこき

県立鹿児島工業高校 押 川 公 親

防人の昔のさまをしのびつゝ三角の浜の島門

くぐりぬ

若者のきびしく集ふこの山を一人行きつゝ吾子を思ふも

合宿地向ふ

株式会社宝辺商店 宝辺 正久

朝日さす広き青田を見さけつゝゆくが清しき合宿地さして

なつかしき友見つけたりもろともに馳せゆく旅の席の間に

ものゝふ橋中佐の出でし村よはてなき海にたゞに向へる

電源開発株式会社 長内 俊平

山の端に陽の落ちしよりひぐらしのなく音のいたもしげくなりゆく

はかなかる命のゆゑか息をつくとまなきがに鳴きつづくるも

病める友集ひえぬ友のねむごろにたのむとのりしことばうかびく

福島君の令弟急死

弟を突如うしなひ帰りゆく友を送りぬ灼けつく真昼に

福岡県立修猷館高校 小柳 陽太郎

遠方ゆはせこし友らあまたありていま部屋ぬちに集ふうれしさ

さがたきつとめをきて国思ふとみ友らあまたここに集へり

一とせに一たびをあふみ友らのたくまじき声みななつかしき

合宿運営にあたる若き友ら

小泉会計事務所 小泉 明

事務をとる疲れに眼閉づるとき討議の声激しいま午前三時

若き友よ心つくしてこの道を伝へよかしたとだに祈るも

合宿への道

山陽電気軌道株式会社 加藤 善之

ともどちと語りつ歩みつ思ふかな今年も我はこの道を来ぬ

この道を求めて集ふわかきらと今年も語りあかさむと思ふ

合宿のあかり見えけりぬばたまの暗き夜道の彼方に高く

光村図書出版株式会社 百崎 素明

一年の思ひをこめし合宿に立立つ朝の心すがしも

株式会社千代田コンサルタント

上村 和男

合宿にむかふあとおひ泣きぬれて吾が手はなさぬ吾子をさとしぬ

合宿地にて従姉みまかりしを聞く

福岡筑紫女学園高校 行武 靖枝

知らざりき君の病ひも知らざりきわがいで立ちし日にみまかりしとは

ご殿毬の刺し方を習ひに君のもとに通ひし日々はこの頃なるに

合宿に心はりつめ君しぬふいとまもなくて一日経にけり

心ふとほぐれし時はおもかげの思ひ出されて悲しくなりぬ

検討会にて

岡山県立岡山操山高校 三宅 将之

班長をつとめる若き友どちの心の動き痛く迫り来

自民党鹿児島支部 湯通堂 義弘

ようやくに片言語る幼児に文書きゆけば楽しさこみ上ぐ

朝日ビール株式会社 坂東 一男

かなかなと鳴くせみの音のおちこちに聞えずがし野岳の岩場

わきおこる雲たちまちにひろがりてみどりに映えたる普賢おほへり

十八銀行 田川 和昌

久々に訪ねし山は火と燃ゆる若き生命の満ちあふれをり

日商株式会社 沢部 寿 孫

運営をいかにせむかと友どちと心くだきて時過ぎにけり

いつしかに夜も更けゆき虫の音のかそけく聞こゆしじまのなかに

原因のわからぬ背骨の激痛のため、医者  
のすすめで今日から入院するといふ親友  
をおもひ

皇宮警察本部 亀井 孝之

ただひとり病室にゐておちつかぬ友をおもへば心いたみぬ

よせがきをつくりて君をはげまさんといふ友  
どちのおもひ伝へむ

神戸市立湊中学校 諏訪田 陽三

天皇の歌碑をかこみてしげりたるみやまきり  
しま美しきかな

キューピー株式会社 山本 伸治

我が胸にまことの灯ともさせし雲仙の地を再び  
ふみぬ

三年ぶり雲仙の地を訪なひてともに語りぬつき  
ぬ思ひを

山田先生の和歌講評を聴きて

長崎県中小企業金融協議会 合原 俊光

久々に御姿仰ぐも嬉しかりねむりしいのちめ  
ざめしがごと

まごころを詠みたる歌は必ずや人のころに  
ひびくとのたまふ

われもまた心新たになりはひのいとまいとま  
に歌詠みゆかむ

K先輩の「そんなこと必要ないじやない  
か」てふ力強い寝言を聞く

福岡市徳島水産株式会社 加藤 征雄

寝ながらもつねと変らぬ響きもてわれらを励  
ます言の葉いできたり

先輩のあふるる思ひに打たれし我夜の白むま  
でつひに寝られず

島原への連絡船上にて

九州大学大学院 行武 潔

うねりなす海原押し分け白波を立てつつ進む  
船は勇まし

漁舟へさきをあげてエンジンの音軽やかに進  
みゆくなり

合宿への車中にて

長崎県楠木真珠養殖場 内田 英賢

立ち並ぶ杉の木の間を登り行くバスの夜風は  
ことにすずしき

冷やかな風に打たれてありありと城島の集ひ  
よみがへり来ぬ

陸上自衛隊幹部候補生 大越 雅行

夏草の茂れる野岳の中腹に御製刻みし大岩を

見つ

大岩に刻みし御製を声を出し読みつつ我が胸  
つまる思ひす

野岳への道に足の不自由な友の登る姿をみて

県立長崎北高校 本城 良子

山道を足ふみしめて友二人手をつなぎ合ひの  
ほりゆくなり

背に汗し登りゆくらむかの友は皆の歩みに遅  
れじとして

石ころの多き道にて疲れなむしばし歩みを休  
ませ給へ

会友

佐賀県武雄市 毛利 潮

この山もかつて火を噴く多良、阿蘇と火の国  
なして鳴りとよみけむ

日本の真槓まがたとるべき若人の群の尊しまなざし  
清く

敵しくも生くる息吹の迫り来る乙女の声はや  
さしかれども

亜細亜大学 千々和 純一

野岳へと額に汗して登り行くこの若人と明日  
もあゆまん

日の本の男の子と呼ばれる我ならば此の一生  
を雄々しく生きん

聴講者

会社役員 山口 為次

けがれなき学生に触れて思ふかな五十路いそぢのわれは恥を重ねし

あたたかき師のおさとしを膝寄せて聞き入る  
若人の眉のさやけさ

夢路よりうつつかへるひとときをたえて聞  
かざりし蝉の声聞く

事務局 早稲田大学学生 西川 朔人  
我が家より入社の電話に奮ひ起ちこの暑ささ  
へ忘るるごとし

福岡中村学園女子高校 行正 維紀子  
緑陰に憩ひし友の瞳涼し集ひの声の遠く聞こ  
ゆる

興立長崎北高校 松本 美佐子  
青年の蔽しき顔を見つめつつわれも負けじと  
話聞き入る

福岡筑紫女子学園高校生 小柳 怜子  
有明の広々とした海の中ただ一つだけ湯島の  
浮ぶ

あとがき

— 合宿教室のありのままの姿を —

昨年「創立十周年記念の集い」の資料として、第十回「合宿教室」参加者の感想文を編集出版したが、今年も次のような目的で第二集を出そうということになった。

一つには、合宿教室に御協力をいただいた方々への御報告と、今後御協力をいただいた方々へ、当会の趣旨を紹介する一つの資料として配布申しあげること。二つには、合宿教室の参加者に対し、まだ合宿での感激が新たなうちに、ともに参加した友人の思いを伝えてやること。三つには、来年の合宿への勧誘にも役立つことであつた。

以上の趣旨から、合宿教室のありのままの姿が読者に伝わるように、全員のものをのせること。筆者の手柄が、その文章から感じとられるように、極端な誤字を正すこととどうしても意味の通じにくい箇所は意味が通ずるように多少の修正を加えるに止め、かつペーシ数の関係から、長いものは筆者が言わんとする核心の部分にしぼることとした。

一方その作業は—筆者の気持をできるだけ汲みとるようにしたいと考えて、学生班の分

は、大学卒業後二、三年ぐらゐの若い国文研の諸兄（はしがきにもふれてある合宿運営委員であつた上村、坂東、山本の諸兄）に、社会人班の分は、同班の世話をした加部氏にお願いして編集を進めた。和歌の方は、九州の山田、小柳両氏が、そのまま印刷に付せるまでにして送ってくれた。

— 同信協力 —

できあがつてしまえば、ほんの手にとる程の小冊子であるが、約一カ月の間に、仕遂げることが、それぞれに忙がしい仕事をもつ社会人にとって容易なことではなかつた。八月末から十月の初めまで、在京の関、福島、野間口、小幡、七夕、それに前記の方々が、原稿の整理から清書、校正まで、土曜、日曜も交互に泊りがけで協力してくれた。同信協力の心なくしてはなしえないことであらうと思う。

— 人の文章を直すことのコワさ —

何度読んでも筆者の言わんとするところが分らないがある。しかしどうして

も分らうとさらに繰り返し読んでみると、ハツと、これだと分てくるのが少なくなかつた。その時は実に嬉しい、と同時に、人の書いたものを直すことのコワさをつくづく思ったことである。

— 九州の友ら进行 —

この小冊子を編集しつつ、思うことは九州の友らのことであつた。今日まで十年ものあいだ、合宿の計画から記録の出版まで、その仕事を一身になつてやってきた友らの苦勞はいかばかりであつたかと。

なお体裁、内容ともに不十分な点が多いがお許し願いたい。(O)

(資料)

第十一回合宿教室(雲仙)感想文集

非売品

昭和四十一年十月五日發行

編集兼発行者

東京都中央区銀座七の三柳瀬ビル

社団法人 国民文化研究会

理事長 小田村 寅二郎

編集委員 長内俊平・上村和男

香川亮二

電話(五七二)一五二六〜七番

